

Netfinity クライアントサービス SA88-6558-00

ユーザーズ・ガイド

Version 5.2

IBM

Netfinity クライアントサービス SA88-6558-00

ユーザーズ・ガイド

Version 5.2

— お願い —

本書の情報とそれによってサポートされている製品をご使用の際は、最初に227ページの付録G、『特記事項』に記載されている一般情報をお読みください。

第 1 版 (1998 年 8 月)

原 典	10L9268 Client Services for Netfinity Manager User's Guide
発 行	日本アイ・ピー・エム株式会社
担 当	ナショナル・ランゲージ・サポート

©Copyright International Business Machines Corporation 1994, 1998. All rights reserved.

Translation: ©Copyright IBM Japan 1998

本書について	xi
本書の対象読者	xi
第1章 Netfinity の製品説明	1
第2章 Netfinity の始動	3
Netfinity サービス・マネージャー	4
Netfinity サービス・プログラムの説明	5
アラート・マネージャー	6
クリティカル・ファイル・モニター	7
DMI ブラウザー	7
ECC メモリー・セットアップ	7
事前障害分析	7
RAID マネージャー	8
安全保護マネージャー	8
シリアル接続制御	8
ソフトウェア・インベントリー	9
システム情報ツール	9
システム・モニター	9
システム区画アクセス	10
システム・プロファイル	10
OS/2 システムでの Netfinity 始動の遅延	11
第3章 アラート・マネージャー	13
アラート・ログ	16
アラート・テキスト	16
アラートのタイプ	17
重大度	17
アプリケーション ID	18
アプリケーション・アラート・タイプ	18
送信元	18
システム名	18
アラートの時刻	18
アラートの日付	18

システム固有の ID	18
アラート・ログの表示	19
アラート・マネージャー機能	23
削除	23
印刷	23
ファイルに印刷	23
プロファイル	23
最新表示	24
アクション	24
ヘルプ	24
終了	24
Netfinity アラート・アクション	25
アラート・プロファイル	37
アラート・プロファイルの新規作成	39
アラート・プロファイルの編集	43
アラート・プロファイルの削除	43
定義済みアラート・プロファイル	44
アクションへのプロファイルの割り当て	48
個々のアラートへのアクションの割り当て	51
第4章 クリティカル・ファイル・モニター	55
システム・ファイルの監視	56
OS/2 のシステム・ファイル	56
Windows 3.1、Windows for Workgroups、および Windows 95 のシステム・ファイル	56
Windows NT のシステム・ファイル	57
NetWare のシステム・ファイル	57
別のファイルの監視	58
ファイル作成の監視	60
第5章 DMI ブラウザー	61
DMI について	61
DMI の動作	62
DMI 構成要素	63
Netfinity DMI 構成要素インストールメンテーション	65
DMI サービス・レイヤー	66
管理アプリケーション	67
DMI ブラウザーの使用	67

DMI 構成要素情報の表示	68
グループ情報の表示	68
属性情報の表示	69
属性情報の変更	69
問題またはエラーの通知の受信	69
第6章 ECC メモリー・セットアップ	71
第7章 事前障害分析	73
「事前障害分析」ウィンドウ	73
「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ	76
詳細なディスク・ドライブ情報	77
事前障害分析オプション	78
第8章 RAID マネージャー	79
「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウのオプション	80
表示スケールの変更	81
仮想ドライブ表示の変更	81
筐体構成の変更	82
RAID 情報の最新表示	86
RAID 情報の表示	86
筐体情報の表示	86
物理装置情報の表示	87
一般アダプター情報の表示	88
アダプター固有情報の表示	89
仮想ドライブ情報の表示	90
RAID 装置の管理	91
RAID アダプター構成のバックアップ	91
RAID 仮想ドライブの管理	92
仮想ドライブの同期	92
第9章 安全保護マネージャー	93
着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定	95
着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの削除	98
安全保護アラート	98
安全保護アクセス・アラート	99
アクセス付与アラート	100
パブリック・アクセス付与アラート	101

システム・アクセス拒否アラート	102
システム再始動アラート	103
システム再始動開始アラート	103
システム再始動要求リジェクト・アラート	104
第10章 シリアル接続制御	105
モデムの構成	106
リモート・アクセスの使用可能化	108
初期設定ストリングのガイドライン	109
第11章 ソフトウェア・インベントリー	111
ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイル	113
辞書ファイルのロード	113
新規の辞書ファイルの作成	114
辞書ファイルの編集	115
製品定義の追加	117
製品定義の編集	130
検索の実行	130
全辞書の検索	131
ドライブによる検索	131
選択された製品の検索	131
製品タイプによる検索	133
報告書の生成とデータのエキスポート	134
ファイルに印刷	134
プリンターに印刷	134
データベースにエキスポート	135
NetView 配布管理プログラム・インベントリーの更新	135
ソフトウェア辞書のインポート	136
アプリケーション・キーワードの使い方	137
第12章 システム情報ツール	139
システム情報ツールの機能	139
システム情報ツールの使用	142
機密システム・データの保護	143
第13章 システム・モニター	145
「システム・モニター・サービス」ウィンドウ	147
モニター・ポップアップ・メニュー	149

「システム・モニター」ノートブック	151
しきい値の設定	152
モニターの設定	156
属性モニター	160
属性モニターのしきい値	160
属性モニターの設定	162
IBM PC サーバー 720 のモニター	163
第14章 システム区画アクセス	165
区画からコピー	166
区画へコピー	168
ディレクトリーの削除	169
ディレクトリー名の変更	169
ファイルの削除	170
ファイル名を変更	170
区画の削除	171
区画のバックアップ	171
区画の復元	172
ディレクトリーの作成	172
終了	172
第15章 システム・プロファイル	173
付録A. インストール構成	177
スタンドアロン機能	177
パッシブ・クライアント機能	178
アクティブ・クライアント機能	179
付録B. サポートされる PFA ハード・ディスク・ドライブ	181
付録C. サポートされる RAID アダプター	183
付録D. RAID アラート	185
RAID 物理ディスク・ドライブ状況がオンラインです	186
RAID 物理ディスク・ドライブ状況がスタンバイです	186
RAID 物理ディスク・ドライブ状況が停止です	187
RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオンラインです	187
RAID システム・ディスク・ドライブ状況がクリティカルです	187

RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオフラインです	188
付録E. Netfinity のコマンドライン操作	189
アラート・マネージャーのコマンドライン操作	189
GENALERT アラート記述を NMVT.INI ファイルに追加する	191
システム情報ツールのコマンドライン操作	192
ECC メモリー・セットアップのコマンドライン操作	193
サービスの基本プログラムをリモートから始動または停止させる	194
サービス基本プログラムをリモートから始動させる	195
サービス基本プログラムをリモートから停止させる	196
サービスの結合名	197
付録F. Netfinity アラート	199
電源オン・エラー検出アラート	199
事前障害分析 (PFA) アラート	200
クリティカル・ファイル・モニター	201
ファイル変更アラート	201
ファイル削除アラート	202
ファイル作成アラート	203
プロセス・マネージャー	204
プロセス終了アラート	204
プロセス開始アラート	205
プロセス開始の失敗アラート	206
リモート・システム・マネージャー	207
システム・オンライン・アラート	207
システム・オフライン・アラート	208
安全保護マネージャー	209
アクセス付与アラート	209
パブリック・アクセス付与アラート	210
システム・アクセス拒否アラート	211
システム再始動開始アラート	212
システム再始動要求リジェクト・アラート	212
Netfinity サービス・マネージャー	214
サービス開始要求アラート	214
サービス開始リジェクト・アラート	215
システム・モニター	216
しきい値上限エラー・アラート	216
しきい値上限警告アラート	217

しきい値下限警告アラート	218
しきい値下限エラー・アラート	219
しきい値の標準への復帰アラート	220
物理 RAID ドライブ・オンライン・アラート	221
物理 RAID ドライブ・スタンバイ・アラート	222
物理 RAID ドライブ停止アラート	222
論理 RAID デバイス・オンライン・アラート	224
論理 RAID デバイス重大アラート	225
論理 RAID デバイス・オフライン・アラート	226
付録G. 特記事項	227
商標	228
付録H. 索引	229

本書では、Netfinity マネージャーのクライアントサービス・プログラムに組み込まれているサービス・プログラムのそれぞれの使用法について詳細に説明しています。Netfinity マネージャーのクライアントサービス・プログラムをインストールおよび構成する方法の説明については、*Netfinity クライアントサービス・クイックガイド*を参照してください。

本書の対象読者

本書は、Netfinity マネージャーのクライアントサービス・プログラムを使用して、ローカルなハードウェア・システムの管理をする人を対象にしています。また、個々のサービス・プログラムをご使用になる人にも、クイック・リファレンス用にご使用いただけます。ただし、このマニュアル以上に詳しい説明が必要な場合は、Netfinity サービス・プログラムに用意されているオンライン・ヘルプでご覧いただけます。

なお、ご使用のオペレーティング・システムについて一般的な知識が必要とされます。

第1章 Netfinity の製品説明

Netfinity は、ネットワークのシステム監視能力とシステム管理能力を高めるために設計された、いくつかの分散アプリケーションからなるファミリーです。Netfinity には、柔軟なモジュラー設計が採用されているので、多様なシステム固有の構成ができます。Netfinity から、ネットワーク環境内で個々のシステムが持つ、指定された機能に必要なプログラム・ファイルだけをインストールすることもできますし、それらのプログラム・ファイルをスタンドアロン・システムとしてインストールすることもできます。さらに、Netfinity にはモジュラー性があるため、基本の製品を再インストールしなくても、サービス機能の更新と新規追加ができます。Netfinity は、現在ユーザーが必要とする機能およびアプリケーションの柔軟性ととともに、将来必要になるシステムの拡張性にも対応しています。

Netfinity クライアントサービス・プログラムを使用すると、ネットワーク管理者は、作業を中断せずに、リモートからシステムを効率的に監視し、管理できます。Netfinity サービス・プログラムをバックグラウンドで実行すれば、システムで進行中の作業が中断されることはありません。その間、ネットワーク管理者は、ネットワークのシステム状況を監視できるため、問題が大きくなる前にそれらを予測して解決できます。

Netfinity クライアントサービス・プログラムには、シリアル接続制御サービスも含まれています。このサービスを使うと、Netfinity サービス・マネージャーは、システムのモデムを介し、リモートからシステムにアクセスし管理できます。システム管理者がシステムを監視し、管理し、障害迫及する場合でも、ユーザーがネットワークに付きっきりにならないですみます。シリアル接続制御サービスを構成するだけで、Netfinity サービス・マネージャーはご使用のシステムにダイヤルでき、ネットワーク上のシステムにアクセスするように、安全保護マネージャー・サービスによってアクセスを許可された Netfinity サービスにも個々のユーザーのシステムにアクセスすることと同じようにアクセスすることができます。

また、ご使用のシステムが LAN に接続されている、されていないにかかわらず、Netfinity クライアントサービス・プログラムを使用して、システムを管理し、監視することができます。Netfinity クライアントサービス・プログラムには、何種類かのインストール構成を備えているので、ご使用のシステムの Netfinity サービス・プログラムに、ほかからのアクセスをどの程度許すかに合わせてインストール構成を選択できます。

システムのハードウェア構成と、インストール中に選択されたインストール構成によって、次に示す Netfinity サービス・プログラムのうち、システムで使用可能となるものが決められます。これらをすべて使用可能にする場合もあります。

- アラート・マネージャー
- クリティカル・ファイル・モニター
- 安全保護マネージャー
- シリアル接続制御
- ソフトウェア・インベントリー
- システム情報ツール
- システム・モニター
- システム・プロファイル
- ECC メモリー・セットアップ (ECC メモリーが必要)
- システム区画アクセス (システム区画が必要)
- 事前障害分析 (PFA) (PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブが必要)
- RAID マネージャー (RAID アダプターが必要)
- DMI ブラウザー (DMI サービス・レイヤーが必要)

各サービス・プログラムの使い方は、本書で後述します。

第2章 Netfinity の始動

Netfinity を始動するには、次のようにします。

1. Netfinity のフォルダーまたはプログラム・グループをオープンします。

Netfinity クライアントサービス・プログラムのインストール中に、Netfinity フォルダー (OS/2、Windows 95、および Windows NT 4.0 の場合のみ) または Netfinity プログラム・グループ (Windows 3.1 および Windows NT 3.51 の場合のみ) が、デスクトップに追加されます。Netfinity のフォルダーまたはプログラム・グループには、「Netfinity サービス・マネージャー」オブジェクトが含まれています。



図 1. 「Netfinity フォルダー」

注: Netfinity のフォルダーまたはプログラム・グループには、「はじめに」というオブジェクトが入っています。この文書には、お手持ちのマニュアルには記載されていない Netfinity に関する情報が含まれていることがあります。Netfinity フォルダーは、ネットワーク・プロトコルとシステム・キーワードの再構成をするための「ネットワーク・ドライバ構成」オブジェクトも含んでいます。

2. Netfinity サービス・マネージャーを始動します。

Netfinity サービス・マネージャー を始動するには、マウス・ボタン 1 を使用して、Netfinity サービス・マネージャー・オブジェクトをダブルクリックします。

Netfinity サービス・マネージャー

システムでサポートされるすべての Netfinity サービス・プログラムは、「Netfinity サービス・マネージャー」ウィンドウから開始されます。使用可能なサービスは、インストール時に選択されたインストール構成によって異なります (177ページの付録 A、『インストール構成』を参照)。

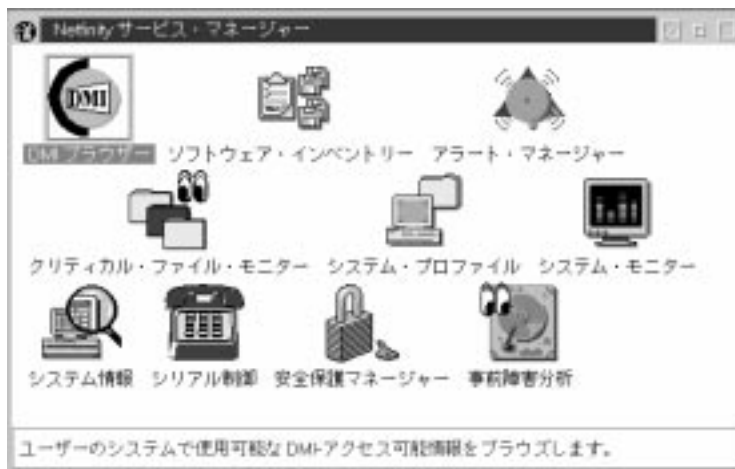


図 2. Netfinity サービス・マネージャー. インストール構成で“アクティブ・クライアント機能”を選択すると、上図のサービス・プログラムがインストールされます。

「Netfinity サービス・マネージャー」ウィンドウ内の Netfinity サービス・プログラムを始動するには、そのプログラムのアイコンをダブルクリックします。

Netfinity サービス・プログラムの説明

各 Netfinity サービス・プログラムは、基本プログラムとグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) で構成されます。サービス基本プログラムによって、リモートの Netfinity マネージャーから個々のサービス・プログラムにアクセスすることができますが、ローカル・アクセスはできません。ローカル・ユーザーは、サービス GUI プログラムが対応する基本プログラムと一緒に機能している場合に限り、Netfinity サービス・プログラムにアクセスすることができます。

サービスによっては、特定のシステム構成によるシステムでしか使用できないものがあります。このようなサービスには次のものがあります。

- DMI ブラウザー (DMI サービス・レイヤーがインストールされ、機能していることが必要)
- ECC メモリー・セットアップ (ECC メモリーが必要)
- 事前障害分析 (PFA) (PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブが必要)
- RAID マネージャー (RAID ハード・ディスク・ドライブ・サブシステムが必要)
- システム区画アクセス (組込み型のシステム区画が必要)

次に、各 Netfinity サービス・プログラムについて簡単に説明します。それぞれの詳細な使用方法については、本書で後述する各サービス・プログラムの章を参照してください。

アラート・マネージャー

アラート・マネージャーは、アプリケーションが生成したアラートを受信し、処理することのできる拡張可能な機能です。アラートの種類に応じて、さまざまなアクションをとることができます。アクションの例としては、アラートの記録、ユーザーへの通知、ほかのシステムへのアラートの転送、プログラムの実行、WAV ファイルの再生 (マルチメディア・システムだけで使用可能)、SNMP アラート・メッセージの生成、デジタル・ページャー・サービスへのメッセージ転送 (モデム付きのシステムだけで使用可能)、アプリケーションで定義されたアクションの実行などが挙げられます。ユーザーは、高度な柔軟性をもつアクション管理インターフェースを使って、アクションを定義することができます。

さらに、アラート・マネージャーで受信したすべてのアラートは、広範囲にわたる詳細なログとして保管されます。ログから得られる情報には、アラートを受信した日付と時刻、アラートのタイプと重大度、アラートを生成したアプリケーションの ID、アラート・マネージャーが生成したテキストやアラート・マネージャーがとったアクションなどが含まれます。アラートは、個々に、または複数個同時にログから選択して、将来の参照用に印刷したり、問題の解決後にログから削除することもできます。このサービス・プログラムは、Netfinity をスタンドアロンで使用する場合でも、ネットワークで使用する場合でも使用できます。

クリティカル・ファイル・モニター

クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、システム内の重要なシステム・ファイルが削除されたり変更される場合、警告を受けるようにすることができます。クリティカル・ファイル・モニターを使用すれば、重要なシステム・ファイル（たとえば、CONFIG.SYS ファイルなど）の日付、時刻、サイズが変更されるか、ファイルが削除または作成された場合に、Netfinity アラートを簡単に生成できます。また、クリティカル・ファイル・モニターを使用すれば、Netfinity システムに常駐するほかのファイルを監視することができます。

DMI ブラウザー

DMI（デスクトップ・マネージメント・インターフェース）ブラウザーを使用すると、システムにインストールまたは接続されている DMI 準拠のハードウェア製品とソフトウェア製品についての情報を調べることができます。

ECC メモリー・セットアップ

ECC メモリー・セットアップは、ECC メモリーのシングル・ビット・エラーを監視し、エラーが検出されると、その ECC メモリーを自動的に“スクラブ”（修正）します。また、シングル・ビット・エラーのカウントを続けてとることもできますし、ECC シングル・ビット・エラーのしきい値を設定して、カウントがそのしきい値を超えた場合に、マスク不能割り込み（NMI）を発生させるようにすることもできます。このサービス・プログラムは、ECC メモリーを搭載したシステムであれば、Netfinity をスタンドアロンで使う場合でも、ネットワークで使う場合でも使用できます。

事前障害分析

事前障害分析（PFA）サービスを使用すると、PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブを継続して監視し、管理できます。PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブは、ドライブの問題や損傷を、それらが発生する前に予測して検出するように設計されているので、データ損失やシステム・ダウンによるデータ脱落を防ぐために役立てることができます。

RAID マネージャー

RAID マネージャー・サービスを使用すると、保守のために RAID (Redundant Array of Independent Disks) システムをオフラインにすることなく、RAID アダプターや RAID アレイを、監視、管理、構成することができます。RAID マネージャーは、ご使用のシステムの RAID アレイや RAID アダプターについてのデータの収集、障害ドライブの再構築、ドライブの追加または削除、データ保全性テストの実行、そのほかのさまざまな RAID システムの作業ができます。このサービス・プログラムは、RAID アダプターが取り付けられているシステムであれば、Netfinity をスタンドアロンで使う場合でも、ネットワークで使う場合でも使用できます。

安全保護マネージャー

安全保護マネージャーによって、ユーザーの Netfinity サービス・プログラムの一部または全体への無許可のアクセスを防ぐことができます。このサービスは、着信ユーザー ID とパスワードを組み合わせて使用します。安全保護マネージャーは、Netfinity をネットワークで使う場合にしか使用できません。

注： システムが、ネットワーク操作用に構成されている場合（つまりアクティブ・クライアント・インストールまたはパッシブ・クライアント・インストールの構成を選択した場合）、画面上には表示されていないプログラム名の一部が安全保護マネージャーに表示されることがあります。これらは、リモート・システム管理用のサポート・プログラムです。この安全保護マネージャー・サービスに必要な着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定方法については、ネットワーク管理者にお尋ねください。

シリアル接続制御

シリアル接続制御サービスを使用すれば、リモートの Netfinity マネージャーから、電話回線とモデムを介して、ご使用のシステムにアクセスできます。シリアル接続制御サービスを使用すると、ご自分がネットワークに付きっきりになっていなくても、Netfinity のリモート・システム・アクセス機能、監視機能、および管理機能を使用できます。

注： シリアル接続制御サービスを作動させるには、システムに、少なくとも 9600 bps をサポートするモデムを正しく取り付け、構成しておく必要があります。

ソフトウェア・インベントリー

ソフトウェア・インベントリーを使用すると、ソフトウェア製品辞書を作成して管理できます。この辞書によって、システムにインストールされている全アプリケーション・プログラムの在庫 (手持ち) を容易に管理できます。

システム情報ツール

システム情報ツールを使用すると、システムのハードウェア構成とソフトウェアの構成についての詳細情報を素早く、かつ容易に取り出せます。システム情報ツールによって、ほとんどすべてのコンピューターに関する情報を収集できますが、IBM コンピューターを使用すれば、さらに詳細な情報が得られます。このサービス・プログラムは、Netfinity をスタンドアロンで使用する場合でも、ネットワークで使用する場合でも使用できます。

システム・モニター

システム・モニターを使用すると、プロセッサの使用率、ディスク・スペースの使用率、ECC メモリーのエラーなどの、システム内の多数の構成要素の活動を簡単に図式化して監視することができます。このモニターは非表示にしたり、サイズの変更ができるので、常に必要なモニターだけを表示できます。監視対象の構成要素のためのしきい値レベルを設定するには、システム・モニターのしきい値マネージャーを使用します。データの値がしきい値を超えると、ユーザーが定義した構成のアラートが生成されます。

データは、システムが始動してから継続して収集されます。この高精度なデータ処理技法は、個々の値に重みが付けられて、複数の並行するサンプルの平均値が算出され、長期間のシステムの活動を正確に反映する値が記録されます。この技法を使えば、膨大なデータ・ファイルを作成せずに、システムの活動記録を管理することができます。このサービス・プログラムは、Netfinity をスタンドアロンで使用する場合でも、ネットワークで使用する場合でも使用できます。

システム区画アクセス

システム区画アクセスを使用すると、システム区画のあるファイルを、ローカルにもリモートからでも、非常に簡単に処理できます。個々のファイルやディレクトリー全体でも、名前を変更したり、システム区画から削除されたりします。個々のファイルは、名前の変更、削除、またはシステム区画にコピーすることができます。また、システム区画全体も、バックアップ、復元、削除できます。このサービス・プログラムは、システム区画がサポートされるシステムであれば、Netfinity をスタンドアロンで使う場合でも、ネットワークで使う場合でも使用できます。

システム・プロファイル

システム・プロファイルは、特定のユーザーまたはシステムについてのデータを記載した便利なノートブックを提供します。ノートブックには、名前、住所、オフィスの部屋番号や位置、電話番号などを含む、広範囲なユーザー固有のデータ用フィールドが、あらかじめ定義されています。また、システム・プロファイルには、システム情報ツールでは扱えない場合もあるモデル、製造番号、購入年月日といったシステム固有のデータ用フィールドもあらかじめ定義されています。さらに、ユーザー自身が自由に定義できる“その他”フィールドも多数設けられており、ユーザーや管理者に必要なあらゆるデータを記録しておくことができます。

OS/2 システムでの Netfinity 始動の遅延

場合によっては、Netfinity ネットワーク・インターフェース (NETFBASE.EXE) の自動始動を遅らせなければならないことがあります。これは、制約を受けるほかのアプリケーションを正常に始動させたり、ネットワーク操作の開始に先立ってご使用のシステムを完全に構成したい場合です。NETFBASE.EXE には、WAIT というパラメーターが備えてあり、これによって始動前に NETFBASE.EXE を待たせる秒数を指定できます。

Netfinity クライアントサービス・プログラムのインストール中には、「Netfinity ネットワーク・インターフェース」オブジェクトは始動フォルダーにあります。始動前に指定された秒数の間、待機するようにするには、Netfinity を次のように構成します。

1. Netfinity ネットワーク・インターフェースが実行されている場合は、遮断します。
2. 「始動」フォルダーをオープンします。
3. マウス・ボタン 2 を使用して、「Netfinity ネットワーク・インターフェース」オブジェクトをクリックします。Netfinity ネットワーク・インターフェースのコンテキスト・メニューがオープンします。
4. 「設定」ウィンドウを選択して、Netfinity ネットワーク・インターフェースをオープンします。
5. 「パラメーター」フィールドに、次を入力します。

WAIT:x

x には、始動前に Netfinity ネットワーク・インターフェースが待機する秒数を指定します。

6. Netfinity ネットワーク・インターフェースの「設定」ウィンドウをクローズします。

WAIT パラメーターを x に設定すると、システムを始動するたびに、Netfinity ネットワーク・インターフェースは x 秒間待機します。

注: この機能が使用できるのは、OS/2 が稼働しているシステムの場合だけです。

第3章 アラート・マネージャー

Netfinity アラート・マネージャーを使用すると、アラート・マネージャー以外の Netfinity サービス・プログラムが生成したアラートを受信して自動的に応答することができます。Netfinity は、さまざまなアラート固有の情報 (アラートの重大度、アラートを生成した Netfinity サービス・プログラムの名前、アラートのタイプ、およびアラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスなど) を使用して、アラートを分類して、アラート・プロファイルに記録します。アラート・プロファイルを、アラートの記録、コマンドの実行など、1 つ、または複数のアラート・マネージャーのアクションに割り当てておくことができます。プロファイルをどれかのアクションに割り当てておくと、プロファイルと一致するアラートを受信するたびに、自動的にアクションが実行されます。

Netfinity アラート・マネージャーには、次のようなアクションがあります。

- アラートをファイルに記録する
- アラートをポップアップ・ウィンドウに表示する
- アラートを別のワークステーションに転送する
- コマンドを実行する
- 最小化されたコマンドを実行する
- *SNMP (Simple Network Management Protocol)* バージョンのアラートを送信する (これらは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼動しているシステムでは、ローカルには使用できません)。
- マップされた *SNMP* バージョンのアラートを送信する (アラートの *SNMP* 標準バージョンと同様です。ただし、各種アラート・タイプの各々に固有のエンタープライズ ID が付けられています。これらは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼動しているシステムでは、ローカルには使用できません)。
- WAV (waveform) サウンド・ファイルを再生する (マルチメディアのサポートが必要)
- モデムを介して数字ページャーにメッセージを送信する (システムにモデムが接続されていることが必要)
- モデムを介して英数字ページャーにアラート情報を送信する (システムにモデムが接続されていることが必要)
- TCP/IP SENDMAIL を使用して他のユーザーにアラートを送信する (OS/2 システムのみ使用可能。TCP/IP for OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以上が必要)
- VIM (Vendor Independent Messaging) を使用してアラートを E-Mail 形式で送信する (VIM サポートが必要)

- アラートを MAPI (Message Application Programming Interface) 形式で送信する (MAPI のサポートが必要)
- Netfinity データベースにアラート情報をエクスポートする
- Lotus Notes データベースにアラート情報をエクスポートする
- デスクトップ・マネージメント・インターフェース (DMI) イベントを生成して、DMI サービス・レイヤーに送信する (DMI のサポートが必要)
- アラートを PC サーバー 720 の前面パネルに表示する (IBM PC サーバー 720 システムの場合のみ)
- システムにエラー条件を追加する
- エラー条件をシステムから除去する

注: エラー条件は、問題を報告したりリモート・システムを迅速に識別するために、Netfinity マネージャー・プログラムで使用されます。エラー条件の説明については、*Netfinity マネージャー ユーザーズ・ガイド* を参照するか、ネットワーク管理者にお尋ねください。

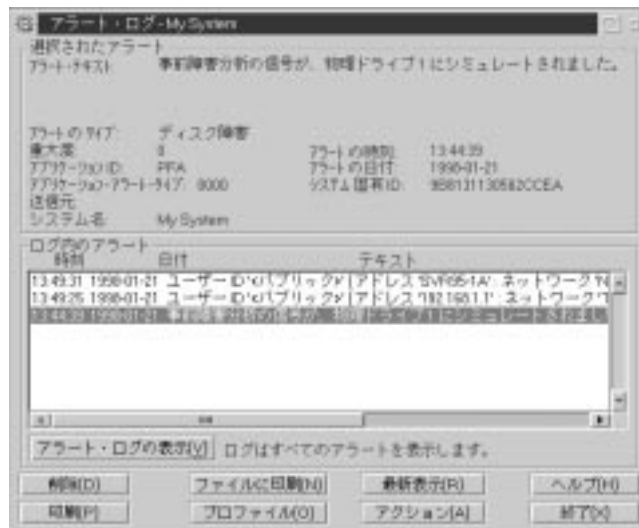


図 3. アラート・マネージャー・サービス

アラート・マネージャーは、次の 2 つの重要なシステム管理を行います。

1. 構成可能なフィルターによって選択表示できる、受信され、記録されたすべてのアラートのログを保守する。

アラート・ログは、アラート・ログ・ファイルに現在記録されているアラートがすべて一覧表示されます。アラート・ログは次に示すアラートを表示するように構成できます。

- 記録されている全アラート
- 指定した時間や日付の範囲内に受信され、記録されたアラート
- 受信され、記録されたアラートのうち、指定したアラート・プロファイルに一致するアラート
- 指定した時間または日付の範囲内に受信され、かつ指定されたアラート・プロファイルに一致するアラート

注: 受信されて、「アラートをログ・ファイルに追加」のアラート・アクションを使用してアラート・ログに記録されたアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。アラート・アクションについては、25ページの『Netfinity アラート・アクション』を参照してください。

アラート・ログの表示を構成する方法については、19ページの『アラート・ログの表示』を参照してください。アラート・プロファイルについては、37ページの『アラート・プロファイル』を参照してください。

2. ユーザーが指定したアクションを使って受信したアラートに自動的に応答する。

アラート・マネージャーを使用すると、1 つ、または複数のアラート・プロファイルを選択して、それらをアラート・マネージャーがとる 1 つのアラート・アクションに割り当てておくことができます。いったん、プロファイルをどれかのアラート・アクションに割り当てておくと、プロファイルと一致するアラートを受信するたびに、アクションを自動的に実行します。アラート・プロファイルについては、37ページの『アラート・プロファイル』を参照してください。アラート・プロファイルをアラート・アクションに割り当てる方法については、48ページの『アクションへのプロファイルの割り当て』を参照してください。

アラート・ログ

「アラート・ログ」ウィンドウは、アラート・マネージャー・サービスを始動すると最初に表示されるウィンドウです。「アラートをログ・ファイルに追加」アクションを使って記録されたアラートはすべて、「アラート・ログ」ウィンドウの下半分の「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

「ログ内のアラート」からどれかのアラートを選択すると、そのアラートに固有の詳細情報が、「アラート・ログ」ウィンドウの上半分に表示されます。

注: 複数のファイルを削除したり、報告書を印刷したりする場合は、複数のアラートを選択できますが、画面の上半分に詳細情報が表示されるのは、現在ログで強調表示されているアラートだけです。

選択したアラートに関して表示される情報には、次のものがあります。

- アラート・テキスト
- アラート・タイプ
- 重大度
- アプリケーション ID
- アプリケーション・アラート・タイプ
- 送信元システム
- システム名
- アラートの時刻
- アラートの日付
- システム固有の ID

アラート・テキスト

アラート・テキストには、アラートの名前と、そのアラートを生成したアプリケーションによって書かれた注釈テキストが入っています。

アラートのタイプ

アプリケーションで指定されたアラート・タイプです。アラート・タイプは、アラート送信元 ID とそれに続くアラート・タイプ値から構成されます。アラート送信元 ID にはアラートを生成した装置の種類を示し、アラート・タイプ値はアラートの内容を表します。

アラート送信元 ID には、次のものがあります。

- システム
- DASD
- ネットワーク
- オペレーティング・システム
- アプリケーション
- 装置
- 安全保護

アラート送信元が指定されていない場合もあります。そのときはアラート送信元 ID は表示されません。

アラート・タイプの値には、次のものがあります。

- 障害
- エラー
- 警告
- 通知

アラート・タイプが指定されていない場合もあります。そのときは、アラート・タイプ値は表示されません。

重大度

アラート重大度は 0 から 7 までの値で示され、0 が最も重大な値です。たとえば、ディスクの障害には重大度 0 を割り当て、一日の終わりにシステムがオフライン状態になるごとに重大度 7 を割り当てるといったことができます。アラート重大度は、そのアラートを生成するアプリケーションによって付けられます。

アプリケーション ID

アプリケーション ID は、指定されたアラートをログに送信したアプリケーションの名前です。

アプリケーション・アラート・タイプ

アプリケーション・アラート・タイプは、アラートを生成したアプリケーションによって個々のアラートに割り当てられた数値です。多くの場合、この値はそのアプリケーションによって使用されます。

送信元

送信元は、アラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスです。送信元は、ローカル・システムか、またはアラートをローカル・システムのエラー・ログに転送するよう指示されているリモート・システムの、どちらかです。

システム名

システム名は、アラートを生成したシステムの名前です。システム名は、Netfinity のインストール時にユーザーによって指定されます。

アラートの時刻

アラートの時刻は、アラートが生成、記録された時刻です。

アラートの日付

アラートの日付は、アラートが生成されたカレンダー日付です。

システム固有の ID

システム固有の ID は、16 文字の乱数からなる識別ストリングで、Netfinity のインストール時にシステムに割り当てられます。アラートを生成したシステムの Netfinity ディレクトリー内の NFUNIQUE.ID ファイルに格納されています。システム固有の ID が主として使用されるのは、ネットワーク・アドレスが頻繁に変更される (DHCP の使用時など) システムの識別および管理が目的です。

アラート・ログの表示

アラート・マネージャーは、アラートの中から「ログ内のアラート」フィールドに表示されるアラート・マネージャーだけをフィルターにかけ、選択するように構成できます。現在のアラート・ログの表示は、「アラート・ログの表示」ボタンの横に表示されます。選択できるアラート・ログの表示の種類には、次のものがあります。

- 全アラートを表示

アラート・ログ内の全アラートが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

- 時間でログを表示

指定された時間内に発生したアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

- プロファイルでログを表示

選択されたアラート・プロファイルに一致するアラートだけが、「ログ内のアラート」に表示されます。

- 時間とプロファイルでログを表示

選択されたアラート・プロファイルに一致し、かつ指定された時間内に発生したアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

注: 受信されたアラートで、「アラートをログ・ファイルに追加」のアラート・アクションを使ってアラート・ログに記録されたアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。アラート・アクションについては、25ページの『Netfinity アラート・アクション』を参照してください。

アラート・ログ表示を変更するには、次のようにします。

1. 「アラート・ログの表示」を選択します。

「アラート・ログの表示」ウィンドウがオープンします(20ページの図4を参照)。



図 4. 「アラート・ログの表示」ウィンドウ

2. 「アラート・ログの表示」フィルターを使用可能（または使用不可）にします。

「アラート・ログの表示」フィルターには、次の 2 種類があります。

- 時刻および日付別表示（を可能にするフィルター）
- プロファイル別表示（を可能にするフィルター）

「時刻および日付別表示」フィルターを使用可能にするには、次のようにします。

a. 「ログ内のアラート」フィールドに表示されるアラートの時刻と日付を記述するラジオ・ボタンを選択します。選択可能な値は、次のとおりです。

- 最後の 1 時間

アラートのうち、最後の 1 時間に記録されたアラートだけを、「ログ内のアラート」フィールドに表示します。

- 最後の (1 ~ 48) 時間

アラートのうち、指定した最後の 1 ~ 48 時間の間に記録されたアラートだけを、「ログ内のアラート」フィールドに表示します。

- 時刻の範囲

「開始日」フィールドで指定された日の「開始時刻」フィールドと「終了時刻」フィールドで指定された時間内に記録されたアラートだけを、「ログ内のアラート」フィールドに表示します。

- 日付の範囲

「開始日」フィールドと「終了日」フィールドで指定された期間内に記録されたアラートだけを、「ログ内のアラート」フィールドに表示します。

b. 「使用可能」を選択します。

「プロファイル別表示」フィルターを使用可能にするには、次のようにします。

a. 「非活動プロファイル」フィールドから、1 つ、または複数のアラート・プロファイルを選択します。

「ログ内のアラート」フィールドに表示したいアラートに対応するアラート・プロファイルだけを選択します。

b. 「活動化」を選択します。

選択したアラート・プロファイルが、「非活動プロファイル」フィールドから移動し、「活動プロファイル」フィールドに表示されます。

c. 不必要なアラート・プロファイルがある場合は、「活動プロファイル」フィールドから除去します。

「活動プロファイル」フィールドに不必要なアラート・プロファイルが含まれていたなら、それらを選択した後、「非活動化」を選択し、「活動プロファイル」から除去してください。すると、選択されたプロファイルが「非活動プロファイル」フィールドに表示されます。

d. 「使用可能」を選択します。

選択したプロファイルに一致するアラートのログが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

3. 「最新表示」を選択してこの変更を保管すると、「アラート・ログの表示」ウィンドウがクローズします。

変更を保管しないでこのウィンドウをクローズする場合は、ウィンドウの左上隅をダブルクリックします。

「時刻および日付別表示」フィルターや「プロファイル別表示」フィルターを使用不可にするには、フィルターのボタン・グループにある「使用可能」の選択を取り消します。

アラート・マネージャー機能

アラート・マネージャーの機能は、ウィンドウ内の押しボタンによってアクティブにされます。押しボタンには次のものがあります。

- 削除
- 印刷
- ファイルに印刷
- プロファイル
- 最新表示
- アクション
- ヘルプ
- 終了

次に、押しボタンで選択される アラート・マネージャー の各機能を説明します。

削除

アラート・ログから特定のアラートを削除する場合は、「削除」を選択します。この機能を使用するには、アラート・ログから削除したいアラートを選択してから、「削除」を選択します。

印刷

アラート・ログ内の選択されたすべてのアラート（および選択されたアラートに関するすべての情報）のハード・コピーを印刷するには、「印刷」を選択します。

ファイルに印刷

選択されたすべてのアラートを、ユーザーが指定したファイルに保管するには、「ファイルに印刷」を選択します。

プロファイル

アラート・プロファイルの構成、編集、削除を行う場合は、「プロファイル」を選択します。プロファイルの作成、編集、削除の詳細な手順については、37ページの『アラート・プロファイル』を参照してください。

最新表示

「アラート・ログ」ウィンドウが表示されたあとで、生成されたアラートを追加表示するには、「最新表示」を選択します。

アクション

構成済みのアラート・プロファイルに対してアラート・アクションを割り当てる場合は、「アクション」を選択します。また、アラート・アクションは、アラート・マネージャーのアラート・プロファイルに含まれない個々のアラートに対しても構成することができます。アラート・アクションをアラート・プロファイルに割り当てる方法については、48ページの『アクションへのプロファイルの割り当て』を参照してください。アラート・プロファイルに含まれないアラートに、アラート・アクションを対応させる構成方法については、51ページの『個々のアラートへのアクションの割り当て』を参照してください。アラート・アクションに関する詳細については、25ページの『Netfinity アラート・アクション』を参照してください。

ヘルプ

アラート・マネージャーに関するオンライン・ヘルプにアクセスする場合は、「ヘルプ」を選択します。アラート・マネージャーのすべての機能に関する詳しい説明を見ることができます。

終了

アラート・マネージャーを終了するには、「終了」を選択します。

Netfinity アラート・アクション

アラート・マネージャーは、次のようなアラート・アクションをとることができます。

- アラートをログ・ファイルに追加
アラートをアラート・ログに追加します。このアラート・アクションに指定する追加情報はありません。
- アラートをポップアップ・ウィンドウに表示する
アラート固有のすべての情報を小さなウィンドウに表示します。このアラート・アクションに指定する追加情報はありません。
- アラートを別のワークステーションに転送する
指定されたネットワークを介して、アラートを別のユーザーに送信します。受信されたアラートは、ローカルで生成されたアラートと同様に扱われます。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: ネットワーク・タイプ

アラートの転送に使用されるネットワーク・タイプです。ネットワーク・タイプは、NETBIOS、TCPIP、IPX、または SERIPC (シリアル接続) を指定する必要があります。

注: SERIPC (シリアル接続) を使用してアラートをリモート・システムに転送する場合は、シリアル接続が活動状態になっていなければなりません。リモート・システムへのシリアル接続が確立している場合に限って、このアラート・アクションは SERIPC を使用してアラートをリモート・システムに転送します。現在、活動状態にないシリアル接続を使用して、アラートをリモート・システムに転送する場合は、「シリアル接続制御を介してアラートをリモート・システムに送信する」というアラート・アクションをお使いください。

<P2>: ネットワーク・アドレス

アラートの転送先であるリモート・システムで使用されているネットワーク・タイプに固有のアドレスです。

リモート・システムのネットワーク・タイプやネットワーク・アドレスが分からない場合は、ネットワーク管理者にお尋ねください。

- コマンドを実行する

単一コマンドを実行します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: コマンドライン

システムで実行されるコマンドです。

このアクションには、アラート固有のデータをコマンドに組み込むための特別なコマンド文字列 (またはマクロ) が用意されています。このデータは、コマンドラインによって開始されるアプリケーションで使用できます。マクロには、次のものがあります。

マクロ	挿入される情報
%TXT	アラート・テキスト
%TIM	アラートの時刻
%DAT	アラートの日付
%SEV	アラートの重大度
%SND	アラート送信元 (たとえば、“NETBIOS::USER1”)
%TYP	アラート・タイプ
%APP	アラート・アプリケーション ID
%AT	アラートのアプリケーション固有のタイプ
%SYS	システム名
%P1-%P9	アラート・テキストに挿入されるアラート固有のテキスト文字列です。これらのパラメーターの内容は、アラートの種類によって決まります。詳細については、199ページの付録 F、『Netfinity アラート』を参照してください。

- 最小化されたコマンドを実行する

1 つの最小化されたコマンドを実行します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: コマンドライン

システムで実行されるコマンドです。

このアクションには、アラート固有のデータをコマンドに組み込むための特別なコマンド文字列 (またはマクロ) が用意されています。コマンドラインから開始されるアプリケーションで、アラート固有のデータが使用できるようになります。マクロには、次のものがあります。

マクロ	挿入される情報
%TXT	アラート・テキスト
%TIM	アラートの時刻
%DAT	アラートの日付
%SEV	アラートの重大度
%SND	アラート送信元 (たとえば、"NETBIOS::USER1")
%TYP	アラート・タイプ
%APP	アラート・アプリケーション ID
%AT	アラートのアプリケーション固有のタイプ
%SYS	システム名
%P1-%P9	アラート・テキストに挿入されるアラート固有のテキスト文字列です。これらのパラメーターの内容は、アラートの種類によって決まります。詳細については、199ページの付録 F、『Netfinity アラート』を参照してください。

- IBM TCP/IP を通して SNMP アラートを送信する

SNMP エージェントを使用して、SNMP バージョンのアラートを生成します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: コミュニティー・ストリング

ネットワーク内の SNMP アプリケーションで使用されるコミュニティ文字列名です。

注:

1. OS/2 環境においては、このアクションは、IBM TC/IP for OS/2 (バージョン 2.0 またはそれ以上のリリース) が必要です。
2. このアクションは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼働しているシステムでは、ローカルには使用できません。
3. SNMP 管理アプリケーション用の Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP_MIB ディレクトリーにあります。ファイル名は NETFIN.MIB です。SNMP ベースのシステム管理ソフトウェアで NETFIN.MIB を使用方法については、SNMP エージェント、またはシステム管理ソフトウェアに付属のマニュアルを参照してください。
4. OS/2 SNMP 管理アプリケーションで使用するための Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP_MIB ディレクトリーにあります。ファイル名は MIB2.TBL です。既存の MIB2.TBL ファイルにこのファイルを追加しても構いませんし、既存の MIB2.TBL をこのファイルに置き換えても構いません。

- SNMP トラップにアラートをマップする

SNMP ベースの管理アプリケーションで使用するために SNMP エージェントによってエンタープライズ OID 値を持った SNMP トラップを生成させます。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: コミュニティー・ストリング

ネットワーク内の SNMP アプリケーションで使用されるコミュニティ文字列名です。

注:

1. OS/2 環境においては、TCP/IP for OS/2 (バージョン 2.0 またはそれ以上のリリース) が必要です。
2. このアクションは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼働しているシステムでは、ローカルには使用できません。
3. SNMP 管理アプリケーション用の Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP_MIB ディレクトリーにあります。ファイル名は NETFIN.MIB です。SNMP ベースのシステム管理ソフトウェアで NETFIN.MIB を使用方法については、SNMP エージェント、またはシステム管理ソフトウェアに付属のマニュアルを参照してください。
4. OS/2 SNMP 管理アプリケーションで使用するための Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP_MIB ディレクトリーにあります。ファイル名は MIB2.TBL です。既存の MIB2.TBL ファイルにこのファイルを追加しても構いませんし、既存の MIB2.TBL をこのファイルに置き換えても構いません。

- Waveform ファイル '<P1>' を再生する (マルチメディアのサポートが必要)

アラートに応答して、指定された WAV (waveform) オーディオ・ファイルを再生します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: Waveform ファイル名

アラートに응答して再生する WAV (Waveform) ファイルの完全修飾された名前です。

- モデムを使用して数字ページャーを活動化する (Hayes 社のモデムと完全に互換性のあるモデムがシステムに接続されていることが必要)

システムに接続されたモデムを使用して、デジタル・ページャー・サービスにダイヤルします。モデムがページャー・サービスに接続されると、「デジタル・ページャー表示」フィールドに指定されたすべての数値データが送信されます。デジタル・ページャー・サービスでページを送信するときに # を押す必要がある場合は、数値データのあとの「デジタル・ページャー表示」フィールドに必ず記号 # を入力します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: モデム COM ポート

モデム用に構成されている使用する COM ポートです。COM ポートは、COM x と入力する必要があります。ここでの x とは、COM ポートの番号のことです。

<P2>: ページャー番号

ページャーに情報を転送する際に、モデムによってダイヤルされる電話番号です。

<P3>: デジタル・ページャー表示

ページャーに表示される数値データです。

注: ページャー・サービスによっては、このアラート・アクションが、<P2> フィールドの電話番号のダイヤル呼出した後、<P3> フィールドの数値データの送信までに待機する時間の長さを増やす必要がある場合があります。数値データの転送前の時間を増やすには、<P2> フィールドの電話番号の終わりに、1 個または複数のコンマ (",") を加えます。モデムは、コンマ 1 個につき 2 秒ずつ、数値データの転送前に待機します。

- モデムを使用する TAP (Telocator 英数字プロトコル) を通して、英数字ページャーにアラートを送信する (Hayes 社のモデムと完全に互換性のあるモデムがシステムに接続されていることが必要)

システムに接続されたモデムを使って、英数字ページャー・サービスにダイヤルします。モデムが英数字ページャー・サービスに接続されると、すべてのアラート情報が送信されます。

パラメーターの説明

<P1>: モデム COM ポート

モデム用に構成されている使用する COM ポートです。COM ポートは、COM x と入力する必要があります。ここでの x とは、COM ポートの番号のことです。

<P2>: TAP アクセス番号

ページャーに情報を転送する際に、モデムによってダイヤルされる電話番号です。

<P3>: ページャー ID

データの送信先ページャーの識別番号です。

<P4>: 送信する追加テキスト

アラート・データと共に送信する任意のテキストです。このパラメーターは省略しても構いません。

注:

1. このアクションは、Telocator英数字プロトコル (TAP) を使うページャー・サービスでだけ機能します。(TAP は日本ではサービスされていません。)
2. ページャーのページャー ID を指定する必要があります。

- TCP/IP メールとして '<P1>@<P2>' にアラートを送信 (OS/2 システムのみで使用可能。TCP/IP for OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以上が必要)

TCP/IP SENDMAIL プログラムを使用して、Netfinity アラートを、指定された E-Mail のアドレスにノートの形式で送信します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: ターゲット・ユーザー ID

アラートの送信先のシステムの TCP/IP ユーザー ID です。

<P2>: ターゲット・ホスト・アドレス

送信先ユーザーのシステムの TCP/IP ホスト・アドレスです。

- TCP/IP Web メールとして '<P1>@<P2>' にアラートを送信する (OS/2 システムのみで使用可能。TCP/IP for OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以上が必要)

TCP/IP SENDMAIL プログラムを使用して、Netfinity アラートを、指定された E-Mail のアドレスにノートの形式で送信します。アラート・テキストは、HTML タグでマークされます。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: ターゲット・ユーザー ID

アラートの送信先のシステムの TCP/IP ユーザー ID です。

<P2>: ターゲット・ホスト・アドレス

送信先ユーザーのシステムの TCP/IP ホスト・アドレスです。

- VIM インターフェース経由で E-Mail を送信する (VIM サポートが必要)

VIM (Vendor Independent Messaging) インターフェースを使って、32 ビットの VIM に準拠するシステムに送信可能な VIM 版のアラートを生成します (32 ビット VIM に準拠するシステムには、Lotus Notes があります)。

Lotus Notes が稼動するシステムの要件は、データを Lotus Notes のデータベースにエクスポートするシステムに対する要件と同様です。詳細については、*Netfinity マネージャー クイックガイド*の『Lotus Notes データベースのサポート』の章を参照してください。

このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: メール・システム・パスワード

VIM メール・システムへのアクセスに使用されるパスワードです。

<P2>: E-Mail アドレス

アラート情報の送信先のシステムの E-Mail アドレスです。

- MAPI インターフェースを介して E-Mail を送信する (MAPI サポートが必要)

MAPI インターフェースを使用して、MAPI に準拠するシステムに送信可能な MAPI アラートを生成します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: メール・システム・パスワード

MAPI メール・システムへのアクセスに使用されるパスワードです。

<P2>: E-Mail アドレス

アラート情報の送信先のシステムの E-Mail アドレスです。

<P3>: プロファイル名

MAPI 準拠アプリケーションによっては、MAPI データを正しく処理するためのプロファイル名が必要です。このアラートの送信先になる MAPI 準拠アプリケーションがプロファイル名を必要とする場合は、このフィールドにそれを入力します。MAPI 準拠アプリケーションがプロファイル名を必要としない場合、このフィールドは空白のままにします。

- DMI サービス・レイヤーを通して DMI イベントを送信する (DMI サポートが必要)

アラートを DMI イベントに変換して、さらにそれを DMI サービス・レイヤーに転送します。DMI サービス・レイヤーがそれを受け取ると、他の DMI 準拠の管理アプリケーションで使用できるようになります。このアラート・アクションに指定する追加情報はありません。

- PC サーバー 720 の前面パネルに表示する (IBM PC サーバー 720 システムの場合のみ)

アラートの固有情報を、PC サーバー 720 のフロント・パネルの LED 画面に表示します。このアラート・アクションに指定する追加情報はありません。

- 送信システムのエラー条件 '<P1>' をセットする

エラー条件を、送信元システムのエラー条件ログに追加します。システムのエラー条件ログには、Netfinity マネージャーのリモート・システム・マネージャーを使ってアクセスします。エラー条件は、問題を報告したりリモート・システムを迅速に識別するために、Netfinity マネージャー・プログラムで使用されます。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: エラー条件

エラー条件ログ内で、エラーを識別するための名前です。

エラー条件の説明については、*Netfinity マネージャー ユーザーズ・ガイド* を参照するか、ネットワーク管理者にお尋ねください。

- 送信システムのエラー条件 '<P1>' をクリアする

送信先システムのエラー条件ログから、以前に生成されたエラー条件を除去します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: エラー条件

エラー条件ログから除去するエラー条件の名前です。

エラー条件の説明については、*Netfinity マネージャー ユーザーズ・ガイド* を参照するか、ネットワーク管理者にお尋ねください。

- エラー条件をシステムから除去する

システムのエラー条件ログから、以前に生成されたエラー条件を除去します。システムのエラー条件ログには、Netfinity マネージャーのリモート・システム・マネージャーを使ってアクセスします。エラー条件は、問題を報告したりリモート・システムを迅速に識別するために、Netfinity マネージャー・プログラムで使用されます。エラー条件の説明については、*Netfinity マネージャー ユーザーズ・ガイド* を参照するか、ネットワーク管理者にお尋ねください。

- シリアル接続を介してリモート・システムにアラートを送信する

すでに定義したシリアル接続を使用して、Netfinity のシリアル接続制御サービスを使用してアクセスできる Netfinity システムに、アラートを送信します (105ページの第10章、『シリアル接続制御』を参照してください)。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

<P1>: 接続名

シリアル接続制御で定義されたシリアル接続の名前です。

- APPC を介してホストにアラートを送信する

ホスト・ベースの管理アプリケーション (NetView for OS/390 など) で使用できるように、Netfinity アラートをネットワーク管理ベクトル移送 (NMVT) のアラートに変換します。このアラート・アクションでは追加情報を提供する必要はありません。

注:

Netfinity ディレクトリーにある NMVT.INI ファイルには、標準の Netfinity アラートを NMVT 形式のアラートにマップするアラート記述が含まれており、APPC および「APPC を介してホストにアラートを送信」アラート・アクションを使用して、ホスト・システムに正しく渡すことができます。新しい Netfinity アラートを定義する場合 (たとえば、Netfinity の GENALERT コマンドを使用して) は、このファイルを変更して、アラートが正しく変換されるようにする必要があります。詳細については、191ページの『GENALERT アラート記述を NMVT.INI ファイルに追加する』を参照してください。

- Windows NT のイベント・ログにイベントを追加する (Windows NT システムのみ使用可能)

アラートに関する情報を Windows NT のイベント・ログに追加します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

- FFST/2 にアラートを転送する (OS/2 システムのみ使用可能)

Netfinity アラートのバージョンを FFST/2 に送信します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

アラート・プロファイル

アラート・プロファイルは、システムが受信したアラートをより効率よく管理するための簡単なフィルターです。アラート固有の情報を使って、プロファイルはアラートのクラスやクラスの集合体を記述します。アラート・プロファイルを使用すれば、サービス、アプリケーション、責任者、または単に緊急度別にアラートを区別することができます。アラート・プロファイルはアラート・マネージャー・アクションに割り当てられ、ネットワーク内で Netfinity システムが生成したアラートに対し、自動的にアクションをとるようになっています。また、アラート・プロファイルは、「アラート・ログ」に表示されるアラートのタイプのフィルターにも使用されます(19ページの『アラート・ログの表示』を参照)。

Netfinity アラート・マネージャーは、ほとんどのユーザーのニーズを満たす多数の定義済みアラート・プロファイルと共に提供されます。これらの定義済みアラート・プロファイルを使用すれば、受信アラートに自動的に対応および反応できるよう、アラート・マネージャーを迅速かつ容易に構成することができます。Netfinity の定義済みアラート・プロファイルに関する詳細については、44ページの『定義済みアラート・プロファイル』を参照してください。

「アラート・ログ」ウィンドウから「プロファイル」を選択して、「アラート・プロファイル」ウィンドウをオープンします(38ページの図5を参照)。「アラート・プロファイル」ウィンドウには、使用可能なすべてのプロファイルがリストされています。編集や削除のために個々のプロファイルを選択したり、まったく新しいプロファイルを作成したりすることができます。

- 新しくアラート・プロファイルを作成するには、39ページの『アラート・プロファイルの新規作成』を参照してください。
- アラート・プロファイルを編集するには、43ページの『アラート・プロファイルの編集』を参照してください。
- アラート・プロファイルを削除するには、43ページの『アラート・プロファイルの削除』を参照してください。

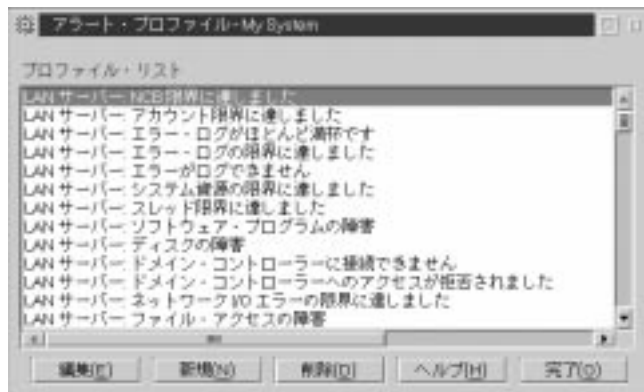


図 5. 「アラート・プロファイル」ウィンドウ

アラート・プロファイルの新規作成

新しくアラート・プロファイルを作成するには、次のようにします。

1. 「新規」を選択します。

「プロファイル・エディター」ウィンドウがオープンします (図6 を参照)。プロファイル・エディターを使って、受信アラートがアラート・プロファイルに一致するかどうかを決定するアラート固有の情報 (アラート条件と呼ばれる) を指定します。



図 6. 「プロファイル・エディター」ウィンドウ

2. 「アラート条件」を設定します。

アラート・プロファイル・アクションを作成するときは、最初に、受信アラートを指定されたアラート・プロファイルに適合させるアラート条件を指定する必要があります。アラートが受け取られると、アラート・マネージャーは、各条件をチェックして、アラートが定義済みアラート・プロファイルの仕様を満たしているかどうかを確認します。すべてのアラートが条件を満たしていれば、そのアラートが、アラート・プロファイルに適合しているものとされます。あるアラートがアラート・プロファイルに適合する場合、そのプロファイルに割り当てられたアクションが実行されます。アラート・アクションをアラート・プロファイルに割り当てる方法については、48ページの『アクションへのプロファイルの割り当て』を参照してください。

アラート・マネージャーが、アラートに対し、アラート・プロファイルに適合するかどうかを決定する際に使用する条件は、5 つあります。アラートがアラート・プロファイルに適合してアクションをとるようになるには、すべてのアラート条件を満たす必要があります。5 つのアラート条件は、次のとおりです。

- アラート・タイプ
- 重大度
- アプリケーション ID
- アプリケーション・アラート・タイプ
- 送信元 ID

このアラート・プロファイルでアラート条件を指定するには、次のようにします。

a. アラート・タイプを選択します。

アラート・タイプは、生成されたアラートの要旨を示すものです。これは、アラートの種類 (不明、障害、エラー、警告、通知) を記述し、またアラートの送信元 (システム、ディスク、ネットワーク、オペレーティング・システム、アプリケーション、装置、安全保護) の一般的な説明を含むこともあります。

着信アラートを特定のアラート・タイプに属するかどうかチェックする場合は、選択リストから 1 つ、または複数のアラート・タイプを選択します。

特定のアラート・タイプによる選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

b. 重大度を選択します。

重大度は 0 から 7 までの数値で、生成されたアラートがどの程度重大であるのかを示します。重大度 0 は極めて重大なアラートを示し、重大度 7 は比較的軽度のアラートを示します。

特定の重大度値によって着信アラートを選別する場合は、選択リストから 1 つ、または複数の重大度値を選択します。特定の重大度値による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択してください。

c. 「アプリケーション ID」を選択します。

アプリケーション ID は、アラートを生成したアプリケーションを表す英数字の識別子です。

特定のアプリケーション ID によって着信アラートを選別する場合は、「アプリケーション ID」選択リストから 1 つ、または複数の ID を選択します。希望するアプリケーション ID がリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して **Enter** キーを押せば、アプリケーション ID をリストに追加できます。特定のアプリケーション ID による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

d. アプリケーション・アラート・タイプを選択します。

アプリケーション・アラート・タイプは、アラートを生成したアプリケーションによって個々のアラートに割り当てられた数値です。この値は、多くの場合、そのアプリケーション自身で使われます。

注: アプリケーション・アラート・タイプは、16 進数値で、最大 4 桁です。

特定のアプリケーション・アラート・タイプによって着信アラートを選別するには、アプリケーション・アラート・タイプ選択リストから 1 つ、または複数のタイプを選択します。希望するアプリケーション・アラート・タイプがリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにそのアラート・タイプを入力して **Enter** キーを押せば、アプリケーション・アラート・タイプをリストに追加することができます。特定のアプリケーション・アラート・タイプによる選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

e. 「送信元 ID」を選択します。

送信元 ID は、アラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスです。

特定の送信元IDによって着信アラートを選別する場合は、「送信元 ID」選択リストから 1 つ、または複数の ID を選択します。必要な送信元 ID がリストにない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して **Enter**キーを押せば、送信元 ID をリストに追加することができます。

特定の送信元 ID による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

3. アラート・プロファイルの名前を指定します。

アラート・プロファイルの名前は、「アラート・プロファイル」ウィンドウの「プロファイル・リスト」フィールドに表示される名前です。「プロファイル名」フィールドに、そのアラート・プロファイル名を入力します。名前は、64 バイト以内です。

4. アラート・プロファイルを保管します。

「保管」を選択して、アラート・プロファイルを保管します。アラート・プロファイルが、「アラート・プロファイル」ウィンドウの「プロファイル・リスト」フィールドに表示されます。

アラート・プロファイル情報を保管せずにこのウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

アラート・プロファイルの編集

すでに定義したアラート・プロファイルを編集するには、次のようにします。

1. 「プロファイル・リスト」から、編集したいアラート・プロファイルの名前を選択します。
2. 「編集」を選択します。

「プロファイル・エディター」ウィンドウがオープンします (39ページの図6を参照)。

3. 必要に応じて、アラート条件を変更します。

受信アラートをアラート・プロファイルに一致させるようにアラート・プロファイルを編集するには、必要に応じて、該当する新規アラート・タイプ、重大度、アプリケーション ID、アプリケーション・アラート・タイプ、送信元 ID を選択します。

4. 必要に応じて、プロファイル名を変更します。

アラート・プロファイルに新しい名前を付ける場合は、「プロファイル名」フィールドに新しいプロファイル名を入力します。

5. アラート・プロファイルを保管します。

「保管」を選択して、アラート・プロファイルに加えた変更を保管します。

アラート・プロファイル情報を変更せずに、ウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

アラート・プロファイルの削除

アラート・プロファイルを削除するには、削除するプロファイルを「プロファイル・リスト」で選択して、「削除」を選択します。

定義済みアラート・プロファイル

アラート・マネージャーには、多くの定義済みアラート・プロファイルが組み込まれています。すべての Netfinity システムにインストールされる定義済みアラート・プロファイルのリスト、およびそれぞれのプロファイルに該当するアラート固有の情報の要旨説明を以下に挙げてあります。

プロファイル名 アラートの説明

電源オン・エラー検出アラート

Netfinity システムで、電源オン・エラー検出によって POST エラーが検出されました。

電源オン・エラー検出情報アラート

Netfinity システムで、電源オン・エラー検出によって、起動時でのシステム区画アクセスが検出されました。

事前障害分析アラート 事前障害分析で、PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブに緊急の障害が検出されました。

ファイル変更アラート クリティカル・ファイル・モニターは、監視対象のファイルが変更されたことを検出しました。

ファイル削除アラート クリティカル・ファイル・モニターは、監視対象のファイルが削除されたことを検出しました。

ファイル作成アラート クリティカル・ファイル・モニターは、監視対象のファイルが作成されたことを検出しました。

プロセス終了アラート プロセス・マネージャーは、監視対象のプロセスが終了したことを検出しました。

プロセス開始アラート プロセス・マネージャーは、監視対象のプロセスが開始したことを検出しました。

プロセス開始の失敗アラート

プロセス・マネージャーは、監視対象のプロセスの開始が失敗したことを検出しました。

システム・オンライン・アラート

リモート・システム・マネージャーは、特定のリモート・システムがオンラインまたは作動中と通知しました。

システム・オフライン・アラート

リモート・システム・マネージャーは、特定のリモート・システムがオフラインまたはアクセス不可と通知しました。

アクセス付与アラート セキュリティー・マネージャーが、ユーザー ID とパスワードの組合せを提示したリモート・ユーザーに対し、システムへのアクセスを許可しました。

パブリック・アクセス付与アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対し、システムへのパブリック・アクセスを許可しました。

システム・アクセス拒否アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対し、システムへのアクセスを拒否しました。

システム再始動開始アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーからのシステム再始動開始要求を検出し、許可しました。

システム再始動リジェクト・アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーからのシステム再始動要求を検出し、拒否しました。

サービス開始要求アラート

Netfinity サービス・マネージャーが、リモート・ユーザーによる Netfinity サービスの使用を許可しました。

サービス開始リジェクト・アラート

Netfinity サービス・マネージャーが、リモート・ユーザーによる Netfinity サービスの使用を拒否しました。

しきい値エラー・アラート

システム・モニターが、しきい値の状態がエラーに相当することを検出しました。

しきい値警告アラート システム・モニターが、しきい値の状態が警告に相当することを検出しました。

しきい値の標準への復帰アラート

以前に記録された、システム・モニターによるしきい値の警告またはエラーの状態が、正常に戻ったことが検出されました。

物理 RAID ドライブ・オンライン・アラート

システムに接続されている物理 RAID ドライブの状態が、「オンライン」に変わりました。

物理 RAID ドライブ・スタンバイ・アラート

システムに接続されている物理 RAID ドライブの状態が、「待機」に変わりました。

物理 RAID ドライブ停止アラート

システムに接続されている物理 RAID ドライブの状態が、「停止」に変わりました。

論理 RAID デバイス・オンライン・アラート

システムに接続されている論理 RAID デバイスの状態が、「オンライン」に変わりました。

論理 RAID デバイス重大アラート

システムに接続されている論理 RAID デバイスの状態が、「重大」に変わりました。

論理 RAID デバイス・オフライン・アラート

システムに接続されている論理 RAID デバイスの状態が、「オフライン」に変わりました。

物理 RAID ドライブ PFA アラート

システムに接続されている物理 RAID ドライブが、RAID アレイ内の PFA利用可能ハード・ディスク・ドライブで緊急の障害を検出しました。

重大度 0 アラート	重大度 0 のアラートが受信されました。
重大度 1 アラート	重大度 1 のアラートが受信されました。
重大度 2 アラート	重大度 2 のアラートが受信されました。
重大度 3 アラート	重大度 3 のアラートが受信されました。
重大度 4 アラート	重大度 4 のアラートが受信されました。
重大度 5 アラート	重大度 5 のアラートが受信されました。
重大度 6 アラート	重大度 6 のアラートが受信されました。
重大度 7 アラート	重大度 7 のアラートが受信されました。
すべてのアラート	アラートが受信されました。

システムで、たとえばコミュニケーション・マネージャー、LAN サーバーなどの特定のソフトウェアまたは通信製品を使用する場合は、多数の追加アラート・プロファイルがインストールされます。

新しくアラート・プロファイルを作成する場合は、39ページの『アラート・プロファイルの新規作成』を参照してください。既存のアラート・プロファイルを編集する場合は、43ページの『アラート・プロファイルの編集』を参照してください。

アクションへのプロファイルの割り当て

アラート・マネージャーが自動的に受信アラートに対応するには、アラート・プロファイルをアラート・アクションに割り当てておく必要があります。プロファイルがアクションに割り当てられると、プロファイルに一致したアラートを受信するたびに、アラート・アクションを実行します。複数のプロファイルを1つのアラート・アクションに割り当てたり、1つのアラート・プロファイルを複数のアクションに割り当てることもできます。

アラート・プロファイルをアラート・アクションに割り当てるには、次のようにします。

1. 「アラート・ログ」ウィンドウから「アクション」を選択します。

「アラート・アクション」ウィンドウがオープンします (図7 を参照)。このウィンドウには、現在構成されているすべてのアラート・アクションの一覧が表示されています。



図 7. 「アラート・アクション」ウィンドウ

2. 「新規」を選択します。

「アクション・エディター」ウィンドウがオープンします (49ページの図8 を参照)。



図 8. 「アクション・エディター」ウィンドウ

3. 「バインド方法」プルダウン・メニューで「プロファイル」を選択します。「アクション・エディター」ウィンドウが「プロファイル」ビューに切り替わります。
4. 1 つ、または複数のアラート・プロファイルを、1 つのアラート・アクションに割り当てます。

アラート・プロファイルをアラート・アクションに割り当てるには、まず、アクションをトリガー（起動）するプロファイルを選択してから、アラート・アクションを選択して、必要な定義情報を指定します。

- a. 1 つ、または複数のアラート・プロファイルを選択して、1 つのアクションに割り当てます。

現在使用可能で、かつ未使用のアラート・プロファイルは、すべて「その他のプロファイル」フィールドにリストされています。この中から、1 つ、または複数のアラート・プロファイルを選択してから、「トリガーする」を選択します。選択したすべてのプロファイルが、「トリガー・プロファイル」フィールドに表示されます。「トリガー・プロファイル」フィールドに表示されるプロファイルのどれかに一致するアラートを受信すると、アラート・マネージャーはアラート・アクションを実行します。

注: 「トリガー・プロファイル」フィールドからアラート・プロファイルを削除するには、削除したいプロファイルを選択してから、「トリガーしない」を選択します。選択したプロファイルは「その他のプロファイル」フィールドに移動します。

b. アラート・アクションを選択します。

「アクション」フィールド右のスピン・ボタンで、利用可能なアラート・アクションを表示させます。

c. 必要に応じて、追加情報を入力します。

アラート・アクションによっては、アラートをだれに送信するか、どのコマンドを実行するかなどの追加情報を指定する必要があります。追加情報が必要な場合には、「アクション定義」パラメーター・フィールドに <P#> の形式でパラメーターが表示されます。# は、パラメーターの番号です。「アクション定義」パラメーター・フィールドには、必要なパラメーター、および必要な情報の要旨が表示されます。各フィールドに必要な情報を入力します。

5. このアクションにラベルを付けます。

「アクション・ラベル」フィールドに、このアラート・プロファイルとアラート・アクションの組み合わせの要旨を入力します。この要旨は 32 バイト以内です。アラート・プロファイルとアラート・アクションの割り当てが完了すると、「アラート・アクション」ウィンドウの「利用可能なアクション」フィールド内のアラート・アクションの名前の前にアクション・ラベルが表示されます。

6. 選択したアラート・アクションへのアラート・プロファイルの割当てを終了します。

「保管」を選択して、選択したアクションへのアラート・プロファイルの割当てを終了します。「アクション・エディター」ウィンドウがクローズし、選択したアラート・アクション名の前にアクション・ラベルを付けて「アラート・アクション」ウィンドウの「利用可能なアクション」フィールドに表示されます。

情報を保管せずにこのウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

個々のアラートへのアクションの割り当て

アラート・マネージャーに、定義済みアラート・プロファイルの一部ではない個々のアラートに自動的に応答させるようにするには、起動したいアクションを特定のアラート条件に割り当てておく必要があります。一度アラート・プロファイルが特定のアラート条件に割り当てられると、指定されたすべての条件をもったアラートをアラート・マネージャーが受信するたびにアラート・アクションが自動的に実行されます。

アクションの構成手順は、次の 2 つのステップからなります。最初に、アラート・マネージャーに応答させるアラート条件を設定する必要があります。次に、受信したアラートに対応してアラート・マネージャーがとるアクションを定義する必要があります。次に、この手順について詳しく説明します。

1. 「アラート・ログ」ウィンドウから「アクション」を選択します。

「アラート・アクション」ウィンドウがオープンします (48ページの図7 を参照)。このウィンドウには、現在構成されているすべてのアラート・アクションが表示されます。

2. 「アラート・アクション」ウィンドウから「新規」を選択します。

「アクション・エディター」ウィンドウがオープンします。

3. 「バインド方法」プルダウン・メニューで「アラート条件」を選択します。

4. 「アラート条件」を設定します。

アクションを定義するには、まず、アラート・マネージャーに定義されたアクションを実行するために、満たすべき「アラート条件」を設定する必要があります。アラートが受信されると、アラート・マネージャーはこれらの条件をチェックして、アクションが定義されたアクションの指定内容に一致するかどうかを検査します。すべてのアラート条件が満たされると、定義されたアクションが実行されます。

アラート・マネージャーが、とるべきアクションの応答を判別するのに使用するアラート条件は、5 つあります。アラートがアクションをトリガーするには、そのアラートが、対応するアラート条件をすべて満たす必要があります。5 つのアラート条件は、次のとおりです。

- アラート・タイプ
- 重大度
- アプリケーション ID
- アプリケーション・アラート・タイプ
- 送信元 ID

「アラート条件」を指定するには、次のようにします。

a. アラート・タイプを選択します。

アラート・タイプは、生成されたアラートの要旨を示すものです。これは、アラートの種類 (不明、障害、エラー、警告、通知) を記述し、またアラートの送信元(システム、ディスク、ネットワーク、オペレーティング・システム、アプリケーション、装置、安全保護) の一般的な説明を含むこともあります。

特定のアラート・タイプによって着信アラートを選別する場合は、選択リストから1つ、または複数のアラート・タイプを選択します。特定のアラート・タイプによる選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

b. 重大度を選択します。

重大度は 0 から 7 までの数値で、生成されたアラートがどの程度重大であるのかを示します。重大度 0 は極めて重大なアラートを示し、重大度 7 は比較的軽度のアラートを示します。

特定の重大度値によって着信アラートを選別するには、選択リストから 1 つ、または複数の重大度値を選択してください。特定の重大度値による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択してください。

c. 「アプリケーション ID」を選択します。

アプリケーション ID は、アラートを生成したアプリケーションを表す英数字の識別子です。

特定のアプリケーション ID によって着信アラートを選別する場合は、「アプリケーション ID」選択リストから 1 つ、または複数の ID を選択してください。希望するアプリケーション ID がリストにない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して、**Enter** キーを押せば、アプリケーション ID をリストに追加することができます。特定のアプリケーション ID による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択してください。

d. アプリケーション・アラート・タイプを選択します。

アプリケーション・アラート・タイプは、アラートを生成したアプリケーションによって個々のアラートに割り当てられた数値です。この値は、多くの場合、そのアプリケーション自身で使われます。

注: アプリケーション・アラート・タイプは、16 進数値で、最大 4 桁です。

特定のアプリケーション・アラート・タイプによって着信アラートを選別するには、アプリケーション・アラート・タイプ選択リストから 1 つ、または複数のタイプを選択します。希望するアプリケーション・アラート・タイプがリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにそのアラート・タイプを入力して、**Enter** キーを押せば、アプリケーション・アラート・タイプをリストに追加することができます。特定のアプリケーション・アラート・タイプによる選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

e. 「送信元 ID」を選択します。

送信元 ID は、アラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスです。

特定の送信元 ID によって着信アラートを選別する場合は、「送信元 ID」選択リストから 1 つ、または複数の ID を選択してください。希望する送信元 ID がリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して、**Enter** キーを押せば、送信元 ID をリストに追加することができます。特定の送信元 ID による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

5. 「アクション定義」を設定します。

特定のアクションを選択して、そのアクションを完了に必要な情報を入力する必要があります。

a. 「アクション」を選択します。

アクションは、ユーザーが指定したアラート条件を満たすアラートに対応して実行されるプログラムです。使用可能なアクション・ハンドラーを見るには、「アクション」フィールドの右のスピン・ボタンを使用します。

b. 必要に応じて、追加情報を入力します。

追加情報が必要な場合には、「アクション定義」パラメーター・フィールドに <P#> の形式でパラメーターが表示されます。# はパラメーターの番号です。「アクション定義」パラメーター・フィールドには、必要なパラメー

ター、および必要な情報の要旨が表示されます。各フィールドに適切な情報を入力します。

6. 定義したアクションを保管します。

すべてのアラート条件とアクション定義情報をすべて入力した後で、「保管」を選択して構成済みアクションを保管してください。このアクションは、「アラート・アクション」ウィンドウの「利用可能なアクション」フィールドに表示されます。「完了」を選択すると、「アラート・アクション」ウィンドウは自動的にクローズします。

第4章 クリティカル・ファイル・モニター

クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、ネットワーク内のシステム上の重要なシステム・ファイルの削除または変更時には、必ず警告を受けることができます。クリティカル・ファイル・モニターによって、重要なシステム・ファイル (CONFIG.SYS ファイルなど)の日付、時刻、サイズが変更されるか、削除または作成された場合に、NetFinity アラートを簡単に生成することができます。また、クリティカル・ファイル・モニターを使用すれば、Netfinity システムに常駐するその他のどんなファイルでも監視することができます。



図 9. クリティカル・ファイル・モニター

システム・ファイルの監視

クリティカル・ファイル・モニターによって監視できるシステム・ファイルは、オペレーティング・システムによって異なります。アクセス中のシステムで使用中のオペレーティング・システムの名前は、「システム・ファイル」フィールド・グループのタイトル域に表示されます。監視可能なシステム・ファイルの名前は、チェック・ボックスの隣に表示されます。

注:

1. クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、システム上のすべてのファイルを監視することができます。「クリティカル・ファイル・モニター」ウィンドウの一番上に表示されるシステム・ファイルは、監視の必要性が最も高い重要なファイルです。他のファイルを監視する方法については、58ページの『別のファイルの監視』を参照してください。
2. ネットワーク・ドライブ上にあるファイルは、監視できません。

OS/2 のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される OS/2 のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- CONFIG.SYS
- STARTUP.CMD
- AUTOEXEC.BAT

Windows 3.1、Windows for Workgroups、および Windows 95 のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される Windows のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- CONFIG.SYS
- AUTOEXEC.BAT
- WIN.INI
- SYSTEM.INI

Windows NT のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される Windows NT のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- WIN.INI
- SYSTEM.INI

NetWare のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される NetWare のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- AUTOEXEC.NCF
- STARTUP.NCF
- VOL\$LOG.ERR
- SYS\$LOG.ERR

1 つ、または複数のシステム・ファイルを監視するには、次のようにします。

1. 監視したいシステム・ファイルを選択します。

監視したいシステム・ファイル名の隣にあるチェック・ボックスを選択します。チェック・マークがボックス内に表示されます。

2. 重大度を選択します。

「システム・ファイル」フィールド・グループ内の各システム・ファイルの名前の隣には、「重大度」フィールドがあります。スピン・ボタンで、監視したい各システム・ファイルの重大度値を選択します。この重大度値は、システム・ファイルが作成、削除、または変更されたときに生成される Netfinity のアラートに割り当てられます。重大度値は、0 (最も重大) から 7 (最も軽微) の値から選択することができます。

3. 「保管」を選択して、このクリティカル・ファイル・モニターに対する設定を保管します。

加えた変更を保管せずにクリティカル・ファイル・モニターをクローズするには、「取消」を選択します。

別のファイルの監視

クリティカル・ファイル・モニターは、現在使用中の Netfinity システムにあるどのファイルでも監視できます。「追加モニターするファイル」フィールドには、現在監視中の他のすべてのファイルのリストが示されます。

監視したいファイルを選択するには、次のようにします。

1. 「追加モニターするファイル」フィールドで、「別のファイルをモニターする」を選択します (55ページの図9 を参照)。

「モニター」ウィンドウがオープンします (図10 を参照)。



図 10. クリティカル・ファイル・モニター - 「モニター」ウィンドウ

2. 「ドライブ」リストから、監視したいファイルがあるドライブ名を選択します。
3. 「ディレクトリー」フィールドで、監視したいファイルが入っているディレクトリーを選択します。
4. 「ファイル」リストから、監視したいファイルの名前を選択します。
5. 「アラート重大度」フィールドの隣にあるスピン・ボタンで、選択したファイルが変更または削除されると生成されるアラートの重大度を設定します。
6. 「モニター」を選択して、選択したファイルの監視プロセスを開始します。

加えた変更を保管せずにクリティカル・ファイル・モニター・サービスをクローズするには、「取消」を選択します。

注: クリティカル・ファイル・モニターは、システムに存在しない特定のファイルが作成された場合に、アラートを出すよう設定することができます。詳細については、60ページの『ファイル作成の監視』を参照してください。

ファイル作成の監視

指定されたファイルが作成されたときに、クリティカル・ファイル・モニターによってアラートを生成することもできます。アラートを生成するようにクリティカル・ファイル・モニターを構成するには、次のようにします。

1. 「ドライブ」フィールドで、ファイル作成を監視したいディスク・ドライブ名を選択します。
2. 「モニター・ファイル名」フィールドに、監視したいファイルの完全修飾パスと名前を入力します。

たとえば、PROGRAM という名前のディレクトリー内に ERROR.LOG という名前のファイルが作成されたときに、クリティカル・ファイル・モニターにアラートを生成させるには、「モニター・ファイル名」フィールドに次のように入力します。

```
PROGRAM\ERROR.LOG
```

3. 「アラート重大度」フィールドの隣にあるスピン・ボタンで、選択したファイルが作成されると生成されるアラートの重大度を設定します。
4. 「モニター」を選択して、指定したファイルの監視プロセスを開始します。

Netfinity デスクトップ・マネージメント・インターフェース (DMI) ブラウザー・サービスを使用すると、システムにインストール、または接続されている DMI 準拠のハードウェア製品やソフトウェア製品 (DMI 構成要素) についての情報を調べることができます。

DMI ブラウザーによって、次のことができます。

- DMI 構成要素についての情報の表示
- DMI サービス・レイヤーから、製品の問題またはエラーについての通知の受信
- DMI 構成要素に関連する問題またはエラーのログの表示

注:

1. このサービスが使えるのは、DMIサービス・レイヤーがインストールされていて活動中のシステムだけです。DMI サービス・レイヤーは、Netfinity でサポートされているオペレーティング・システムのほとんどで使用可能です。Netfinity のインストール時に、システムに DMI サービス・レイヤーがインストールされ、活動中になっていなければ、DMI ブラウザーも、Netfinity 固有の DMI 構成要素も、システムにインストールできません。Netfinity のインストール後に DMI サービス・レイヤーをインストールする場合は、Netfinity の DMI 構成要素インスツルメンテーション (動作状況の表示) をインストールして使用するためには、Netfinity を再インストールする必要があります。
2. Netfinity DMI ブラウザー・サービスは、DMI サービス・レイヤーと共に提供される DMI ブラウザーの特殊バージョンです。DMI ブラウザーで使用できる機能には、Netfinity の DMI ブラウザー・サービスでは使用できないものがあります。

DMI について

デスクトップ・マネージメント・インターフェース (DMI) は、コンピューター・システムに接続またはインストールされた、ハードウェア製品およびソフトウェア製品の管理を容易にする業界標準の管理システムです。コンピューター・システムとは、スタンドアロンのデスクトップ・システム、ネットワーク上のノード、またはネットワーク・サーバーのいずれかをいいます。DMI は、デスクトップのオペレーティン

グ・システム、環境、ハードウェア・プラットフォーム、およびアーキテクチャーで機能するように設計されています。

DMI は、ハードウェア製品とソフトウェア製品についての情報を標準のフォーマットで提供し、または入手する方法を備えています。このデータが入手されれば、デスクトップとネットワークのソフトウェア・アプリケーションでそのデータを使用して、それらのコンピューター製品を管理することができます。高度な DMI テクノロジーによって、デスクトップ・コンピューターでの製品のインストールと管理がさらに容易になるため、ネットワーク内でのデスクトップ・コンピューターの管理も容易になります。

DMI の動作

完全な DMI の構造は、次の 3 つの独立した要素からなっています。

- DMI 構成要素
- DMI サービス・レイヤー
- DMI に準拠する管理アプリケーション

DMI 構成要素

各 DMI 構成要素には、その構成要素が関連している製品についての情報が入っています。この情報は、製品固有のグループに編成されます。この情報は、管理情報ファイル (MIF) に含まれています。MIF は、DMI 構成要素または製品の管理可能な属性を記述するものです。

各グループは、さまざまなグループ固有の属性を持っています。1 つのグループにある属性は、完全にそのグループに依存しています。たとえば、ソフトウェア製品の構成要素 ID グループには、次の属性を持つ場合があります。

- 製造元
- 製品
- バージョン
- シリアル番号
- インストール
- 検査

ただし、PC システム構成要素内のプロセッサ・グループは、次のような属性を持つ場合があります。

- タイプ
- プロセッサ・ファミリー
- バージョン情報
- 最大速度
- 現行速度
- プロセッサ・アップグレード

グループの各属性は、一連のデータ項目によって完全に定義されます。グループに使えるデータ項目は、製品のタイプによって異なりますが、ほとんどの属性には、次のようなデータ項目があります。

ID 属性の **ID** は、その属性のグループに固有のシーケンス番号です。

タイプ	<p>データのタイプは、DMI によって定義されている次の 8 つのうちのいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 整数 • 64 ビット整数 • カウンター • 64 ビット・カウンター • ゲージ • 表示文字列 • オクテット文字列 • 日付
アクセス	<p>データにアクセスする方法です。アクセス値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 読取専用 • 読取り/書込み • 書込み専用 <p>注: 読み取り/書き込み、または書き込み専用のアクセスの値を持つ属性については、ほかの属性の一部を変更することができます。詳細については、69ページの『属性情報の変更』を参照してください。</p>
名前	<p>属性の名前は、DMI 標準から取り出されるか、またはメーカーから提供されます。</p>
値	<p>値は、属性の特定のオカレンスのことをいいます。たとえば、2.1 という属性値は、アプリケーションのバージョン番号として設定することができます。場合によっては、値が読み取り専用であり、変更できない場合があります。そのような値は、MIF ファイルで直接指定することができます。ただし、ほとんどの値は時間が経つと変化します。通常、更新は自動的に行われ、構成要素のメーカーが提供するプログラムによって管理されます。</p> <p>値は、列挙型 (ENUM) にすることもできます。これは、MIF ファイルで定義されている使用可能ないくつかの値のテーブルに指標付けするためです。</p>
記述	<p>構成要素の記述とは、その構成要素のメーカーが提供する技術情報です。</p>

Netfinity DMI 構成要素インストールメンテーション

Netfinity DMI 構成要素インストールメンテーションでは、Netfinity のリモート・システム・マネージャー、システム・モニター、およびシステム情報ツールからの情報が、DMI ベースの管理アプリケーションに提供されます。DMI ベースの管理アプリケーションが必要とする MIF ファイルは、Netfinity のインストール時に、Netfinity の DMI インストールメンテーションの一部としてインストールされます。

注:

1. Netfinity のインストール時に、システムに DMI サービス・レイヤーがインストールされ、活動中になっていなければ、DMI ブラウザーも、Netfinity 固有の DMI 構成要素も、システムにインストールできません。
2. DMI ベースの Netfinity データは、Netfinity サポート・プログラムが実行中の場合にだけ、他の DMI ベースのアプリケーションで使用できます。

DMI サービス・レイヤー

DMI サービス・レイヤーは、DMI 構成要素の情報を収集して、標準のフォーマットに編成するプログラムです。この情報を編成して利用可能にすると、DMI 準拠の構成要素エージェント (たとえば、Netfinity の DMI ブラウザー・サービスなど) は、DMI サービス・レイヤーにアクセスして、任意の DMI 構成要素についての情報を要求することができます。

注: Netfinity の DMI ブラウザーが機能するためには、システムに DMI サービス・レイヤーがインストールされて、活動中になっている必要があります。

DMI サービス・レイヤーは、インストールされている MIF ファイルから構成情報を収集して、データベースを作成し、要求に応じて、管理アプリケーションに情報を渡します。管理アプリケーションとは、DMI サービス・レイヤーからデータを受信して、ユーザーがこれらのデータをデスクトップまたはネットワークの管理のために使用できるようにするプログラムのことをいいます。

DMI サービス・レイヤーは、MIF データを収集して構成するだけでなく、各種の DMI 構成要素で生じた問題やエラーに関する情報を収集することもできます。Netfinity DMI ブラウザーを使用すると、DMI 構成要素に関する問題やエラーの通知を受信して、DMI 構成要素に関する問題やエラーのログを表示することができます。

Netfinity DMI ブラウザーは、以下に挙げる DMI サービス・レイヤーで機能します。

オペレーティング・システム	サポートされる DMI サービス・レイヤー
OS/2 Warp 3.0 またはそれ以降	IBM SystemView Agent (バージョン 1.4.2 またはそれ以降)
Windows NT (バージョン 3.51 Service Pack 5 またはそれ以降)	WIN32 版 IBM SystemView Agent (バージョン 1.3.2)、Intel DMI Service Provider 2.0
Windows 95	WIN32 版 IBM SystemView Agent (バージョン 1.3.2)、Intel DMI Service Provider 2.0
Windows 3.1	Intel® DMI SDK (バージョン 2.0 またはそれ以降)

管理アプリケーション

管理アプリケーションとは、DMI サービス・レイヤーとインターフェースをとって、DMI 構成要素の情報を収集して利用できる、DMI 準拠のシステム管理アプリケーションのことをいいます。

DMI ブラウザーの使用

Netfinity の DMI ブラウザーを使用すると、次のことができます。

- インストールされている DMI 準拠製品の DMI 構成要素、グループ、属性についての情報の表示
- DMI サービス・レイヤーからの、製品に関する問題またはエラーについての通知の受信
- DMI 構成要素に関連する問題またはエラーのログを表示する

DMI ブラウザーの機能にアクセスするには、メニュー・バーからメニュー項目を選択するか、ファースト・パス・アイコン・バーから、その機能を表すオブジェクトを選択します。

メニュー・バーには、次の機能が表示されます。

- オプション: イベント・ログの表示または DMI ブラウザー・サービスの終了
- 情報: サービス・レイヤーのバージョン情報と DMI ブラウザーの製品情報の表示



図 11. 「DMI ブラウザー」ウィンドウ

操作を効率的に行うには、マウスを使用して、「メニュー・バーのアイコン」から必要なアイコンを選択します。または、メニュー項目を選択してから、プルダウン・メニューからを選択することもできます。アイコンの意味が分からない場合は、マウス・ポインターをその上に移動します。そのアイコンの簡単な説明が、ウィンドウの一番下に表示されます。

DMI 構成要素情報の表示

マウス・ボタン 1 で、オープンしたい DMI 構成要素をダブルクリックします。「構成要素情報」ウィンドウがオープンします。

終了したら、「クローズ」を選択して、「構成要素情報」ウィンドウをクローズします。

グループ情報の表示

DMI 構成要素のグループのいずれかについての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 1 で、表示したいグループ・データが入っている DMI 構成要素の左側にあるプラス符号 (+) をクリックします。
2. マウス・ボタン 1 で、表示したいグループの名前をダブルクリックします。そのグループの属性のリストを表示したウィンドウがオープンします。

属性情報の表示

ある 1 つのグループの 1 つの属性だけについての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 1 で、表示したいグループ・データを持っている DMI 構成要素の左側にあるプラス符号 (+) をクリックします。
2. マウス・ボタン 1 で、表示したいグループの名前をダブルクリックします。そのグループの属性のリストを表示したウィンドウがオープンします。
3. マウス・ボタン 1 で、表示したい属性の名前をダブルクリックします。「属性情報」ウィンドウがオープンします。

属性情報の変更

読み書き または *書込み専用* のアクセス値を持つ属性は構成することができます。属性情報を変更するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン1を使用して、変更したい特定の属性をダブルクリックします。「属性情報」ウィンドウがオープンします。
2. 新しい属性情報を入力します。すべての属性情報項目を変更できるわけではないことに注意してください。
3. 「適用」を選択して、属性情報を変更します。

変更を中断する場合は、「リセット」を選択して、属性情報を前回保管されていた値に復元します。

変更内容を保管せずにウィンドウをクローズするには「取消」を選択します。

問題またはエラーの通知の受信

サービス・レイヤーは、必要に応じて管理アプリケーションに対し、問題またはエラーのオカレンスを通知します。これらの問題およびエラーに関するメッセージは、イ

イベントと呼ばれます。これらのイベントは、イベント・ログに保管されて、あとで問題またはエラーを修正するために使用されます。

DMI ブラウザー・サービスは、DMI サービス・レイヤーから、DMI 構成要素のイベントの通知を自動的に受信します。DMI ブラウザー・サービスがイベント・メッセージを受信すると、電話オブジェクトが、DMI ブラウザーのアイコン・バーに表示されます。この電話アイコンを選択 (または「オプション」プルダウン・メニューから「イベント・ログの表示」を選択) して「DMI ブラウザー・イベント・ログ」をオープンします。

第6章 ECC メモリー・セットアップ

Netfinity ECC メモリー・セットアップを使用すると、ECCメモリーを監視および管理することができます。ユーザーが選択できるオプションは次のとおりです。

- シングル・ビット・エラー修正
- シングル・ビット・エラー・カウント
- シングル・ビット・エラーしきい値マスク不能割り込み (NMI)

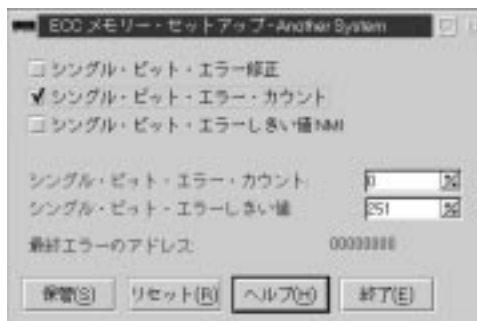


図 12. ECC メモリー・セットアップ

ECC メモリー・セットアップを構成するには、次のようにします。

1. ECC メモリー・セットアップで実行したいアクションを選択します。

- シングル・ビット・エラーが発生した場合に自動的にエラーを訂正するには、「シングル・ビット・エラー修正」オプションをアクティブにします。このオプションを選択すると、システムによってはパフォーマンスが若干低下することがありますが、データ安全性は大幅に向上します。詳細については、システムの説明書を参照してください。
- 発生したすべての ECC メモリー・エラーのカウントを実行させるには、「シングル・ビット・エラー・カウント」オプションをアクティブにします。
- シングル・ビット・エラーの数が、ユーザーが指定したしきい値を超えた場合にマスク不能割り込み (NMI) を発生させるには、「シングル・ビット・エラーしきい値 NMI」オプションをアクティブにします。

注: NMI が発生すると、システムが停止することがあります。

2. 必要に応じて、シングル・ビット・エラー・カウントを変更します。

「シングル・ビット・エラー・カウント」フィールドには、現行セッション中に ECC メモリー・セットアップによって検出されたシングル・ビット・エラーの数が表示されます。

注: ビット・エラー・カウントは、現行セッションだけを対象としています。このカウントは、コンピューターの再始動時に 0 にリセットされます。前セッションのカウントを繰り越したい場合には、構成画面から手動でエラー・カウントを入力する必要があります。

3. 「シングル・ビット・エラーしきい値 NMI」オプションを選択した場合は、シングル・ビット・エラーのしきい値を設定します。

「シングル・ビット・エラーしきい値」フィールドには、ECC メモリー・セットアップがマスク不能割り込み (NMI) を起動する (発生させる) までに許される、ユーザーが指定した ECC のシングル・ビット・エラーの数が表示されます。

注: NMI が発生するのは、「シングル・ビット・エラーしきい値 NMI」オプションをアクティブにした場合だけです。

4. 選択した内容に誤りがないことを確認したうえで、「保管」を選択します。
5. ECC メモリー・セットアップの構成を終了したら、「終了」を選択します。

事前障害分析 (PFA) サービスを使用すると、システムにローカルにインストールされているすべての PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブを監視することができます。PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブによって PFA メッセージが生成されたときには、このサービスによってすぐに通知を受けることができます。また、このサービスを構成して、PFA メッセージを受け取ったときに Netfinity アラートが自動的に生成されるようにすることもできます。

注: RAID アレイの一部として使用中の PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブによって生成された PFA メッセージは、事前障害分析サービスでは検出できません。ただし、PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブのためにシステム・モニター・サービスの属性モニターを使用すれば、PFA メッセージを監視および報告させることができます。詳細については、160ページの『属性モニター』を参照してください。

「事前障害分析」ウィンドウ

PFA 利用可能な各物理ドライブは、「事前障害分析」ウィンドウのオブジェクトによって表されます。事前障害分析サービスを利用すると、2 種類のオブジェクトによって各ディスク・ドライブの状況を迅速に判別することができます。これらのオブジェクトには、次のものがあります。

オブジェクト	説明
正常なディスク・ドライブ	正常: このドライブについては、どのような事前障害分析メッセージも報告されていません。
壊れたディスク・ドライブ	警告: このドライブについては、1 つまたは複数の事前障害分析メッセージが報告されており、障害が発生している恐れがあります。



図 13. 「事前障害分析」サービス. この図に示されている PFA ドライブにおいては、特に事前障害分析メッセージは報告されていません。

このドライブを識別するための情報が、アイコンの隣にリストされます。この情報は、次のものを含んでいます。

- アダプター

「アダプター」とは、ディスク・ドライブが接続されているアダプター・カードの値番号です。

事前障害分析はシステム内の PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブを検出したときに、システムをスキャンして SCSI ハード・ディスク・ドライブ・コントローラーも探します。アダプターの値は、PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブが接続されている SCSI アダプターの番号です。たとえば、システムに 2 枚の SCSI ハード・ディスク・ドライブ・アダプターがインストールされていて、各 SCSI アダプターに 1 つの PFA 利用可能ディスク・ドライブが接続されている場合、「PFA サービス」ウィンドウには、2 つの PFA 利用可能ディスク・ドライブ・オブジェクトが表示されます。最初の PFA ドライブ・オブジェクトにはアダプター値 1 が示されます。これは、事前障害分析で検出される最初の SCSI ハード・ディスク・ドライブ・アダプターだからです。2 つ目の PFA ドライブ・オブジェクトにはアダプター値 2 が示されます。これは、事前障害分析で検出される 2 番目の SCSI ハード・ディスク・ドライブ・アダプターだからです。

- PUN と LUN

物理装置番号 (PUN) と論理装置番号 (LUN) は、ハード・ディスク・ドライブをシステム内で固有のものとして識別するために割り当てられる値です。

注: 1 台の物理ドライブが 2 つ以上の論理ドライブに区画分けされている場合は、各論理ドライブの PUN、LUN、および物理ドライブの値は、すべて同じになります。

- 物理ドライブ値

「物理ドライブ」値は、システム内の各ハード・ディスク・ドライブに割り当てられた数値のことをいいます。これらの値は 0 から始まり、追加のハード・ディスク・ドライブがインストールされるたびに大きくなります。(たとえば、システムに 2 台のハード・ディスク・ドライブがインストールされている場合、それらの物理ドライブ値は 0 と 1 になります)。

- 論理ドライブ値

「論理ドライブ」値は、各ハード・ディスク・ドライブに割り当てられる、またはハード・ディスク・ドライブに設けられた各区画に割り当てられる文字です。たとえば、1GB*のドライブがある場合に、このドライブを 200 MB の 5 区画に分割すると、論理ドライブ値は C、D、E、F、および G になります。ただし、各論理ドライブは同じ PUN、LUN、および物理ドライブ値を共用します。

- サイズ

サイズ値は、物理ドライブのサイズです。

注: サイズは、各ドライブに残っているスペースを表すものではありません。

各 PFA 利用可能ドライブについてさらに詳しい情報を得たり、各ドライブの事前障害分析サービス・オプションを構成するには、「事前障害分析」ウィンドウからそのドライブのアイコンを選択します。「ドライブの PFA オプション」ウィンドウがオープンします (76ページの図14 を参照)。

* ハード・ディスク・ドライブの容量を意味する場合、GB は約 10 億バイトに相当しますが、ユーザーのアクセス可能容量は、オペレーティング環境によって異なります。

「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ

選択した PFA 利用可能ドライブについての追加情報を表示するか、または選択されたドライブ固有の事前障害分析サービス・オプションを構成するには、「ドライブの PFA オプション」ウィンドウを使います。



図 14. 「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ

詳細なディスク・ドライブ情報

「ドライブの PFA オプション」ウィンドウは、ドライブ固有の情報を「事前障害分析」ウィンドウからコピーし、さらに次の追加情報を表示します。

- ベンダー ID

「ベンダー ID」は、ディスク・ドライブによって報告されたドライブの製造元の名前です。

- プロダクト ID

「プロダクト ID」は、ディスク・ドライブによって報告されたドライブ固有の製品番号です。

- プロダクト・リビジョン

「プロダクト・リビジョン」は、ディスク・ドライブによって報告された製品の改訂レベルを表します。

- 状況

「状況」は、ディスク・ドライブによって報告された最新の情報を表示します。ディスク・ドライブによって PFA メッセージが生成されると、その PFA メッセージが生成された曜日、日付、および時刻が状況データとして表示されます。

事前障害分析オプション

「ドライブの PFA オプション」ウィンドウを使うと、詳細なドライブ情報が得られるほか、次のことができます。

- このドライブ用に事前障害分析のアラート生成オプションを構成する。
- このドライブ用に事前障害分析の警告メッセージをシミュレートする。
- ドライブの状況を“警告”から“正常”にリセットする。

アラートの生成

このディスク・ドライブで事前障害分析メッセージが生成されたときに、事前障害分析に Netfinity アラートを生成するには、「アラートの生成」のチェック・ボックスを選択します。いくつかのアラート固有情報をカスタマイズすることができます。

- アラート・テキスト

生成されるアラートに含まれる標準のアラート・テキストは、ウィンドウの中央に表示されています。このテキストに情報を追加したい場合には、「アラート・ログの追加テキスト」フィールドにその情報を入力します。

- 重大度

アラート重大度の値を設定する場合には、「重大度」フィールドの横のスピン・ボタンを使用します。値は、0 (最も重大) から 7 (最も軽微) までの整数で指定することができます。

事前障害分析メッセージのシミュレート

このドライブの事前障害分析の警告メッセージをシミュレートするには、「シミュレート」を選択します。事前障害分析サービスは、実際の警告メッセージを受け取った場合とまったく同様の動作を示します（「事前障害分析」ウィンドウと「ドライブの PFA オプション」ウィンドウのドライブ状況を変更し、また、「アラートの生成」が選択されている場合にはアラートを生成します）。ただし、ユーザーに対しては、この PFA メッセージがシミュレートされたものであり、実際の PFA メッセージによるものではないことが、「ドライブの PFA オプション」ウィンドウで報告される状況とアラート・テキストの両方によって、知らされます。

ドライブの状況のリセット

ドライブの状況を“警告”から“正常”に切り替える場合は、「リセット」を選択します。

RAID (*Redundant Array of Independent Disks*) は、何台かの物理記憶装置を、オペレーティング・システムにとって 1 台または複数台の物理ドライブとして認識できるように、アレイにグループ化する技術です。RAID 技術を使用すると、RAID アレイ・ドライブを各種のデータ構成に構成することができます。これらの構成 (*RAID レベル*と呼ばれる) には、データ保全性保護と記憶容量の各種のレベルがあります。RAID レベルの中には、データ・ミラーリングの使用によって、より高いデータ保全性を提供するものがあります。

通常の場合、ほとんどの RAID 管理作業をするには、RAID システムをオフラインにする必要があります。しかし、Netfinity の RAID マネージャー・サービスを使用すると、システムの RAID アダプター、アレイの物理ドライブ、およびアレイによって定義された仮想ドライブに関する情報を簡単に収集することができます。また、各種の重要な RAID 管理作業を、迅速かつ容易に実行することができます。これらの作業には、次のものを含んでいます。

- 仮想ドライブの同期
- RAID 物理ドライブのフォーマットと再構築
- すべての RAID アダプター、装置、仮想ドライブ、および筐体についてのデータの収集

注:

1. RAID マネージャーを不用意に使用すると、システムおよびそのデータに重大な被害を与えるおそれがあります。RAID マネージャーを使用するには、RAID アレイおよび RAID システム管理に精通していることが必要です。
2. RAID マネージャーは、他の RAID 管理ユーティリティと同時に動作する設計にはなっていません。RAID マネージャーの実行中に他の RAID 管理ユーティリティを実行すると、システムが不安定になることがあります。
3. このサービスは、サポートされている RAID アダプターを取り付けたシステムでだけ使用できます。サポートされている RAID アダプターの一覧については、183ページの付録C、『サポートされる RAID アダプター』を参照してください。

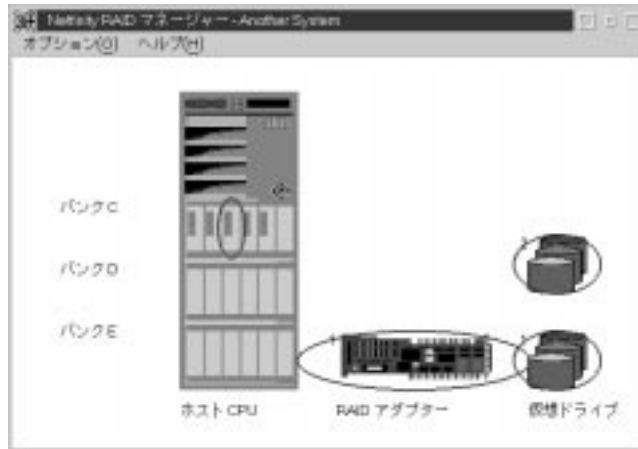


図 15. RAID マネージャー・サービス

「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウのオプション

「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウには、RAID システムの筐体、RAID アダプター、および仮想ディスク・ドライブがグラフィックスで表示されます。次のことを実行できます。

- グラフィック表示のスケールの変更
- 各列に表示される仮想ドライブ数の変更
- 筐体構成の変更
- 情報の最新表示

表示スケールの変更

「Netfinity RAID サービス」ウィンドウに表示されるグラフィックスのスケールを変更するには、次のようにします。

1. 「オプション」プルダウン・メニューから「スケールの表示」を選択します。
2. スピン・ボタンで、RAID マネージャーのグラフィックスのスケールを選択します。
3. 「了解」を選択して、この変更を有効にします。

RAID マネージャーのグラフィックスは、指定されたスケールに従ってサイズ変更されます。

仮想ドライブ表示の変更

列単位で表示される仮想ドライブの数を変更するには、次のようにします。

1. 「オプション」プルダウン・メニューから「仮想ドライブの表示」を選択します。
2. スピン・ボタンで、各列に表示される仮想ドライブの数を選択します。
3. 「了解」を選択して、この変更を有効にします。

各列の仮想ドライブの数は、選択された値に従って調整されます。

筐体構成の変更

「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択して、「筐体の構成」ウィンドウをオープンします (図16を参照)。このウィンドウで、次のことができます。

- 筐体の追加
- 筐体の削除
- 筐体のバンクとアダプターの構成
- 筐体の各バンクごとの装置番号の構成

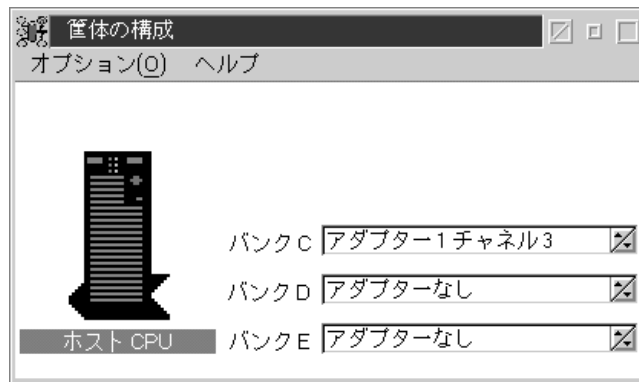


図 16. 「筐体の構成」ウィンドウ

筐体の追加

筐体を追加するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. 「筐体の構成」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから、「筐体の追加」を選択します。
「筐体の選択」ウィンドウがオープンします (図17 を参照)。

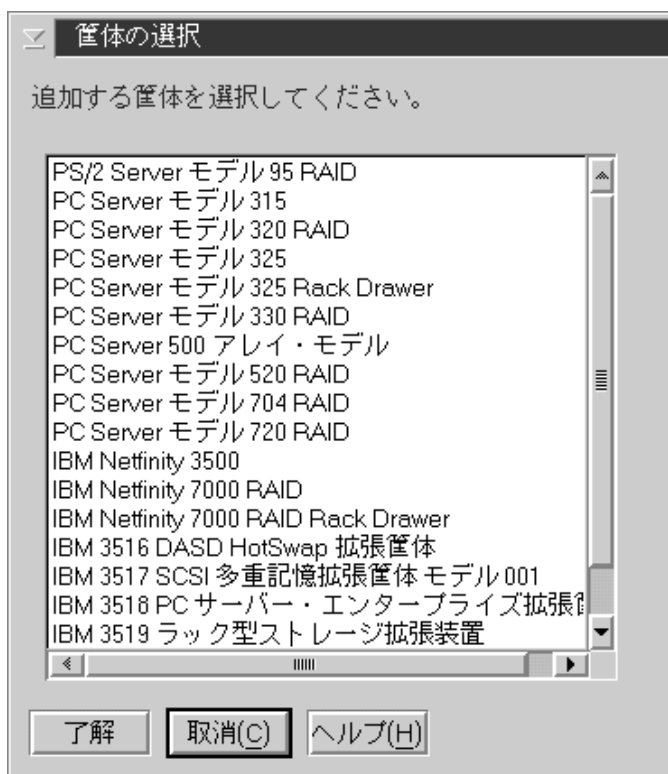


図 17. 「筐体の選択」ウィンドウ

3. 追加する筐体の名前を選択します。
4. 「了解」を選択します。

筐体の削除

筐体を削除するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. マウス・ボタン 2 で、削除したい筐体を選択します。
選択された筐体のコンテキスト・メニューがオープンします。
3. コンテキスト・メニューから「筐体の削除」を選択します。

RAID の構成

使用している筐体で、どの RAID アダプターが、RAID ドライブのどのバンクを制御するかを指定するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. 各「バンク」フィールドの横にあるスピン・ボタンで、どのアダプターとチャンネルに、そのバンクを制御させるかを指定します。
3. 筐体のバンクの構成が完了したら、「筐体の構成」ウィンドウをクローズして、新しい設定を保管します。

RAID バンク装置番号の構成

選択されたバンク内の各 RAID 装置の装置番号を指定するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. 装置番号の構成を指定したい装置を持つバンクの「バンク」フィールドを選択します。
3. 「オプション」プルダウン・メニューから「装置番号の構成」を選択します。
「装置番号の構成」ウィンドウがオープンします (図18 を参照)。



図 18. 「装置番号の構成」ウィンドウ

4. バンク内の各装置に対応するスピン・ボタンで、装置の装置番号を指定します。
5. 装置番号の指定が終了したら、「装置番号の構成」ウィンドウをクローズして、新しい設定を保管します。

RAID 情報の最新表示

「RAID マネージャー」ウィンドウに表示された、すべての情報を更新するには、「オプション」プルダウン・メニューから「最新表示」を選択します。

RAID 情報の表示

RAID マネージャーを使用して、RAID システム装置の一般情報を表示できます。装置には RAID 筐体、物理 RAID 装置、RAID アダプター、論理 RAID ドライブがあります。

筐体情報の表示

RAID マネージャーを使用して、システムに接続されているすべての RAID 筐体に関する情報を迅速に収集できます。入手できる情報には、次のものがあります。

- 筐体モデル
- 筐体の製造元
- RAID アダプターの数
- 筐体機能

RAID 筐体についての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 で、調べたい筐体を選択します。筐体のコンテキスト・メニューがオープンします。
2. 筐体のコンテキスト・メニューから「筐体の表示」を選択します。

「了解」を選択して、「筐体情報」ウィンドウをクローズします。

物理装置情報の表示

RAID マネージャーを使用して、RAID アレイの一部である物理装置についての各種の情報を収集することができます。入手できる情報には、次のものがあります。

- 装置の状況
- 装置番号
- チャンネル
- 装置タイプ
- 装置サイズ
- セクター
- 製造元
- モデル、バージョン
- シリアル番号

物理 RAID 装置についての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 で、調べたい装置を選択します。アダプターのコンテキスト・メニューがオープンします。
 2. 装置のコンテキスト・メニューから「装置の表示」を選択します。
- 「了解」を選択して、「標準装置情報」ウィンドウをクローズします。

一般アダプター情報の表示

RAID マネージャーを使用して、インストールされているすべての RAID アダプターに関する情報を迅速に収集できます。入手できる情報には、次のものがあります。

- アダプター識別子
- アダプター・スロット
- 使用可能なバス
- 構成されたドライブ
- デバイス入出力
- ホスト・バス
- アダプター状況
- 製造元
- モデル
- シリアル番号 (利用可能な場合)

RAID アダプターについての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 で、調べたいアダプターを選択します。アダプターのコンテキスト・メニューがオープンします。
 2. 「アダプターの表示」を選択します。
 3. 「一般情報」を選択します。
- 「了解」を選択して、「アダプター情報」ウィンドウをクローズします。

アダプター固有情報の表示

RAID マネージャーを使用して、インストールされているすべての RAID アダプターに関するより詳細な情報を迅速に収集できます。入手できるアダプター固有情報には、次のものがあります。

- ストライプ・サイズ
- 再構築制御
- パリティ記憶域
- 先行読み取り

アダプター固有情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 で、調べたいアダプターを選択します。アダプターのコンテキスト・メニューがオープンします。
 2. 「アダプターの表示」を選択します。
 3. 「特定情報」を選択します。
- 「了解」を選択して、「アダプター特定情報」ウィンドウをクローズします。

仮想ドライブ情報の表示

RAID マネージャーを使用して、RAID アダプターで定義されているすべての仮想ドライブに関する情報をすばやく収集できます。入手できる情報には、次のものがあります。

- 仮想ドライブ番号
- 仮想ドライブ・サイズ
- 仮想ドライブ状況
- 仮想ドライブ RAID レベル
- 仮想ドライブ書き込みポリシー

仮想ドライブについての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 で、調べたい仮想ドライブを選択します。仮想ドライブのコンテキスト・メニューがオープンします。
2. 「仮想ドライブ情報の表示」を選択します。

「了解」を選択して、「仮想ドライブ情報」ウィンドウをクローズします。

RAID 装置の管理

RAID マネージャーを使用すると、RAID アレイを構成している記憶装置を管理することができます。RAID マネージャーを使用して、次のことを行うことができます。

- 装置の追加
- 装置の除去
- 装置の置換
- 装置の再構築
- 別の装置への再構築
- 装置の停止
- 装置のスタンバイに設定
- 装置をホット・スペアに設定

上記の RAID 装置管理機能のいずれかを実行するには、マウス・ボタン 2 で、「Netfinity RAID マネージャー」ウィンドウから RAID 装置を選択した後、選択した装置のポップアップ・メニューから RAID 管理機能を選択します。

RAID アダプター構成のバックアップ

RAID マネージャーを使用すると、RAID アダプターの構成のバックアップをとることができます。RAID アダプターの構成のバックアップをとるには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 で、バックアップを取りたいアダプターを選択します。
2. アダプターのコンテキスト・メニューから「アダプターの機能」を選択し、「構成のバックアップ」を選択します。
3. フォーマット済みの空のディスクを挿入し、「了解」を選択します。

RAID 仮想ドライブの管理

RAID マネージャーを使用すると、各種仮想ドライブ・パラメーターを変更することができます。次の論理ドライブ管理オプションが使用可能です。

- 仮想ドライブの同期

仮想ドライブの同期

RAID レベル 1 または RAID レベル 5 の仮想ドライブのパリティ情報を再計算する場合は、「仮想ドライブの同期」を選択します。ドライブ上のデータは変更されません。

第9章 安全保護マネージャー

Netfinity 安全保護マネージャーは、システムにインストールされている Netfinity サービス・プログラムの一部または全部へのリモート・アクセスを制限する目的で設計されています。不用意に Netfinity サービス・プログラムを使用すると、データの損失やシステムの損傷を起こすおそれがあります。これを避けるためには、システム上のサービスの一部または全部に対するリモート・アクセスを制限する必要があります。

注: 以下に挙げる Netfinity サービス・プログラムは、不用意な使用によって最も重大な障害を起こしやすいものです。

- リモート・システム・マネージャー
- システム区画アクセス
- ファイル転送
- リモート・セッション
- プロセス・マネージャー
- RAID マネージャー

サービスの中には、Netfinity クライアントサービス・プログラムで使えないものがあり、本書ではそれらの使用方法は記述していません。ただし、リモートの Netfinity マネージャーは、ユーザーのシステムにアクセスして、これらのサービスを使用することができます。

Netfinity 安全保護マネージャーは、ユーザー ID とパスワードの組み合わせを使って、システムの安全保護を解除するかどうかを判別します。着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせによって、ご使用のシステムにリモートからアクセスしようとしている他の (Netfinity マネージャーを使用している) ユーザーが使える Netfinity サービスが決められます。

安全保護マネージャーには、デフォルトの着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせが設定されています。これは <パブリック> 設定と呼ばれ、ユーザーが選択した任意のサービスに対するアクセスを自動的に許可するものです。<パブリック> 着信ユーザー ID とパスワードの詳細については、95ページの『着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定』を参照してください。

システムで着信と発信のユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定しておく、安全保護は受動的に作動します。リモート・ユーザーが Netfinity サービス・マネージャーを使用してユーザーのシステムにアクセスを試みると、リモート・ユーザーの発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせと、構成済みの着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせが自動的に照合されます。発信と着信のユーザー ID とパスワードの組み合わせが一致している場合にかぎり、リモート・ユーザーは、システムへのアクセスが許可されます。

Netfinity 安全保護マネージャーは、ユーザーのシステムにアクセスしたりアクセスを試みたりした人の記録を保管できるようにするために、アラートの生成も行います。安全保護マネージャーによって生成されるアラートの詳細については、98ページの『安全保護アラート』を参照してください。

着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定

安全保護マネージャーがあらかじめ構成されていない場合は、<パブリック> というユーザー ID が設定されます。これは、汎用の安全保護アクセスのデフォルト設定値になります。この設定値を使用すれば、<デフォルト> の発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを使用しているシステムであれば、いずれもご使用のシステム上のすべての Netfinity サービス・プログラムにアクセスすることができます。

あるリモート・システムのユーザーが、他のシステムに対してリモート・システム・マネージャーの「システムへのログイン」アクションをしようとしたときに、対応する着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせとの一致が得られなかった場合でも、そのユーザーは、<パブリック> 構成内にあるサービスへのアクセスが許されます。

最初は、すべての Netfinity サービスが<パブリック> アクセスで使用できるようになっています。<パブリック> ユーザー ID とパスワードの組み合わせで使えるサービスのリストを編集するには、次のようにします。

1. 「着信パスワードの編集 / 表示」をダブルクリックし、「着信パスワード」ウィンドウをオープンします。
2. 「ユーザー ID」選択リストから「<パブリック>」を選択します。
3. パブリック・アクセスを許可したくないサービスに対しては、選択を取り消します。
4. 安全保護マネージャーに対するパブリック・アクセスを制限するには、「安全保護マネージャー・アクセス」のチェック・ボックスの選択を取り消します。
5. 「設定」を選択して、構成を保管します。

注: <パブリック> デフォルトを着信ユーザー ID とパスワード安全保護構成の一部として構成していない場合は、ご使用のシステム上の Netfinity サービス・プログラムにアクセスできるのは、発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせが有効なユーザーだけです。

あるユーザーがご使用のシステムにアクセスしようとしたときに無効なユーザー ID とパスワードの組み合わせが使用されると、安全保護マネージャーによってアラートが生成されます。ただし、そのシステムがデフォルトとして <パブリック> が設定された状態になっていると、無効な発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせでシステムにアクセスを試みたユーザーには、<パブリック> サービスへのアクセスが自動的に認められます。この場合にもアラートは生成されます。安全保護マネージャーによって生成されるアラートの詳細については、98ページの『安全保護アラート』を参照してください。



図 19. 着信ユーザー ID とパスワードの構成

新しく着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定して、サービスへのアクセスの可否を決めるには、次のようにします。

1. 安全保護マネージャーを始動します。
2. 「着信パスワードの編集 / 表示」を選択します。
3. 「ユーザー ID」を入力します。

アクセスを許可するユーザー ID を入力します。「ユーザー ID」選択リストから ID を選択することも、新しい ID を入力フィールドに入力することもできます。

4. パスワードを入力します。

「パスワード」フィールドに、指定されたのユーザー ID と組み合わせて使用し、選択された Netfinity サービスへのアクセスを許可するパスワードを入力します。パスワードの長さは、1 から 8 文字以内です。このパスワードは表示されません。

5. パスワードを確認します。

「確認のためのパスワード」フィールドに、「パスワード」フィールドに入力したものと同一パスワードを入力します。着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを正しく作成するには、これら 2 つのパスワードが一致する必要があります。

6. アクセス可能なサービスを選択します。

「サービス」選択リストから、1 つまたは複数のサービスを選択します。選択したサービスは、それらのサービスのフィールドに、ユーザー指定のユーザー ID とパスワードを入力したユーザーが使用できます。

7. 安全保護マネージャーへのアクセスの可否を決めます。

安全保護マネージャーへのアクセスを許可するには、「安全保護マネージャーのアクセス」チェック・ボックスを選択します。

注： 安全保護マネージャーへのアクセスを許可すると、リモート・システムから、現在ご使用の着信と発信両方のユーザー ID とパスワードの組み合わせを変更することができ、またご使用のシステムに対して、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」アクションが使用できるようになります。これでリモート・ユーザーは、要求によってご使用のシステムを再始動できます。

8. 着信の安全保護構成を保管します。

「設定」を選択して、構成を保管します。

着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの削除

すでに設定されているユーザー ID とパスワードの組み合わせを削除するには、次のようにします。

1. 安全保護マネージャーを始動します。
2. 「着信パスワードの編集/表示」を選択します。
3. 削除するユーザー ID を選択します。
4. 「削除」を選択します。選択したユーザー ID と、それと組み合わせられているパスワードが、着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの構成から削除されます。

安全保護アラート

安全保護マネージャーは、アクセス試行に対応して、さまざまなアラートを自動的に生成します。これらのアラートは、どのユーザーがどのシステムにアクセスしているのかを記録するための援助として、また、無効なユーザー ID とパスワードの組み合わせによって、ほかのシステムへのアクセスを試みたユーザーを記録するために生成されるものです。また、リモート Netfinity マネージャーが、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」アクションを使用してユーザーのシステムを再始動しようとした場合にも (再始動が正常に行われたか、どうかにかかわらず)、アラートが生成されます。

これらのアラートは Netfinity アラート・マネージャーによって受信されます。アラートを受信した Netfinity アラート・マネージャーは、それに対応して特定の処置を取るように構成されます。アラートの詳細については、16ページの『アラート・ログ』を参照してください。

安全保護マネージャーによって生成された各アラートには、アラート・テキストに挿入された、追加のマクロ・パラメーター文字列が入っています。これらのパラメーター文字列は、後述の各アラートの説明の下に記載します。

安全保護アクセス・アラート

安全保護マネージャーは、特定の安全保護アクセス条件に対応して次の3つのアラートが生成できます。

- アクセス付与アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対してパブリック以外のアクセスを許可した場合に生成されます。

- パブリック・アクセス付与アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対して、1つまたは複数のサービスへのパブリック・アクセスを許可した場合に生成されます。

- システム・アクセス拒否アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーのシステムへのアクセスを拒否した場合に生成されます。

これらの各アラートの詳細について、次に説明します。

アクセス付与アラート

説明	アクセスのためにユーザー ID とパスワードの組み合わせを使ったリモート・ユーザーに、1 つまたは複数のサービスに対するアクセスが許可されたときに、安全保護マネージャー・サービスが生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') がシステム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	7
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	20

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザーの ID
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していなければ、アクセス付与アラートには、何のアクションもとられません。ただし、このアラートに対して、とりたいアクションを新しく定義しておくことはできます。

パブリック・アクセス付与アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、1 つまたは複数のサービスへのパブリック・アクセスが許可されたときに、安全保護マネージャー・サービスが生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス) ('%P2' : ネットワーク '%P3') がパブリック・システム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	6
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	21

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザーの ID
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していない場合、このアラートはアクションをトリガーしません。ただし、このアラートに対して、とりたいアクションを新しく定義しておくことはできます。

システム・アクセス拒否アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、システムへのアクセスが拒否されたときに、安全保護マネージャー・サービスが生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス) ('%P2': ネットワーク '%P3') によるログオンが拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護警告
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	22

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザーの ID
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していなければ、このアラートは、アラート・マネージャーのログ・ファイルに追加されます。ほかに、このアラートに対してとりたいアクションがあれば、定義しておくことができます。

システム再始動アラート

安全保護マネージャーは、システムの再始動の試みに対して次の 2 つのアラートを生成することができます。

- システム再始動開始アラート
- システム再始動要求リジェクト・アラート

これらの各アラートの詳細について、次に説明します。

システム再始動開始アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー・プログラムが、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」オプションを使ってシステムを再始動しようとしたとき、安全保護マネージャー・サービスが生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2':ネットワーク '%P3') によってシステム再始動が開始されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	41

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム再始動を要求したユーザーの ID
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していなければ、このアラートは、アラート・マネージャーのログ・ファイルに追加されます。ほかに、このアラートに対してとりたいアクションがあれば、定義しておくことができます。

システム再始動要求リジェクト・アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー・プログラムが、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」オプションを使ってシステムを再始動しようとしたが、必要な安全保護アクセスの資格を持っていなかったときに、安全保護マネージャー・サービスが生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') によるシステム再始動要求は、拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護エラー
重大度	3
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	40

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム再始動を要求したユーザーの ID
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していなければ、システム再始動リジェクト・アラートはアラート・マネージャーのログ・ファイルに追加され、さらに、システムの再始動が試みられたことを通知するポップアップ・ウィンドウが生成されます。ほかに、このアラートに対してとりたいアクションがあれば、定義しておくことができます。

第10章 シリアル接続制御

Netfinity のシリアル接続制御サービスを使用すると、Netfinity マネージャーは、ご使用のシステムのモデムにダイヤルし、システムにアクセスし、システムを管理することができます。シリアル接続制御サービスを正しく構成すると、リモートの Netfinity マネージャーのユーザーが LAN に接続されたシステムと同じようにご使用のシステムにアクセスし、管理することができます。

注: シリアル接続制御サービスを作動させるには、システムに、少なくとも 9600 bps をサポートするモデムを正しくインストールし、構成しておく必要があります。



図 20. シリアル接続制御サービス

モデムの構成

モデムを介してリモート・システムにアクセスするには、シリアル接続制御サービスを使用する前に、ご使用のモデムが正しく構成されていることを確認する必要があります。

システムのモデムを構成するには、次のようにします。

1. 「Netfinity シリアル接続制御」ウィンドウから「モデム設定」を選択します。
構成する「Netfinityモデム設定」ウィンドウがオープンします (107ページの図 21 を参照)。
2. 構成するモデム用の「**COM** ポート」を選択します。
「構成する **COM** ポート」フィールドのスピン・ボタンで、モデムの **COM** ポートを選択します。
3. 「モデム名」を選択するか、または新しいモデムの名前を入力します。
「モデム名」フィールドから、システムで使用しているモデムの名前を選択するか、または新しい名前を入力します。Netfinity には、いくつかの一般的なモデムの設定値があらかじめ構成されています。ただし、モデムが「モデム名」フィールドにリストされていない、またはシステムで使用しているモデムの種類が分からない場合は、「**Default**」を選択します。「**Default**」設定を使用したときに、モデムが正しく機能しない場合は、109ページの『初期設定ストリングのガイドライン』を参照してください。

注: あらかじめ構成されているモデム名、または「Default」を選択すると、他のモデム構成情報も自動的に記入されます。

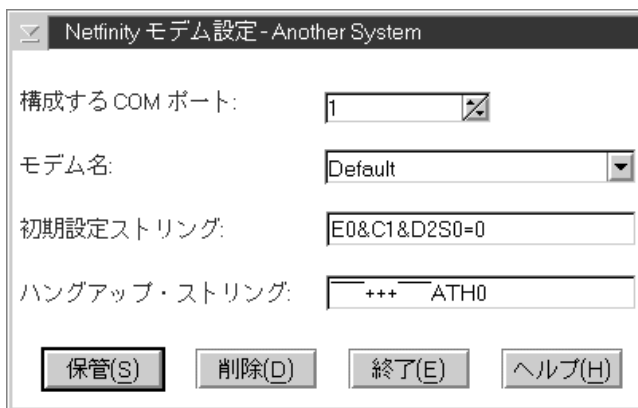


図 21. シリアル接続制御 - 「Netfinity モデム設定」ウィンドウ

4. システムのモデムに適した「初期設定ストリング」を入力します。

すでに構成されているモデム名を選択した場合、このフィールドは自動的に記入されます。ただし、使用するモデムの設定値があらかじめ構成されていない場合、このフィールドを編集する必要があります。詳細については、109ページの『初期設定ストリングのガイドライン』を参照してください。

5. ご自分のシステムのモデムに合った「ハンガアップ・ストリング」を入力します。

「ハンガアップ・ストリング」フィールドには、電話回線の接続のクローズを指示するためにモデムに送るコマンドを指定します。デフォルトのハンガアップ・ストリングは、シリアル接続制御に備えられています。このストリングは、ほとんどのモデムで正常に使えます。ご使用のモデムがデフォルトのハンガアップ・ストリングに正しく応答しない場合は、ご使用のモデムに付属の説明書で詳細を確認してください。

6. 「保管」を選択してこれらの設定を保管し、ご使用のモデムをシリアル接続制御サービスで使えるようにします。

リモート・アクセスの使用可能化

シリアル接続制御の使用に合わせてモデムを構成したら、ネットワーク管理者、またはほかの許可ユーザーに、ご使用のシステムへのアクセスを許可する必要があります。これによって、許可ユーザーは、シリアル接続制御を使用して、システムにアクセスできます。システムへのアクセスを許可するには、次のようにします。

1. シリアル接続制御サービスを自動応答モードに設定します。
2. 安全保護マネージャーを使用して、システムのログオン時に使用する許可ユーザーのユーザー ID とパスワードの組み合わせを構成します。

ユーザー ID とパスワードの組み合わせを構成して、ご使用のシステムへのリモート・アクセスを可能にする方法の詳細については、95ページの『着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定』を参照してください。

シリアル接続制御サービスを自動応答モードに設定するには、次のようにします。

1. Netfinity シリアル接続制御サービスを始動します。
「シリアル接続制御」オブジェクトをオープンします。
2. 「シリアル接続制御」ウィンドウの「名前」フィールドで、「自動応答」を選択します。
「自動応答」を設定すると、シリアル接続制御サービスは、電話（着信呼び出し）がくると、モデムを介して自動的に応答できます。シリアル接続制御サービスは、電話に応答した後、呼び出し側のシステムとリンクを確立しようとしません。
3. シリアル接続制御の「ユーザー ID」と「パスワード」を設定します。

リモート・システムから、シリアル接続制御を使ってシステムにアクセスする際に必要となるユーザー ID とパスワードを、それぞれ「ユーザー ID」フィールドと「パスワード」フィールドに入力します。

4. 「開始」を選択します。

「開始」を選択すると、シリアル接続制御サービスは、着信呼び出しの待機を始めます。「Netfinity シリアル接続制御」ウィンドウの状況フィールドに“接続までお待ちください”が表示された後であれば、いつでも「終了」が選択できるようになります。シリアル接続制御は、バックグラウンドで、着信呼び出しを待機し続けます。

注: Netfinity の始動時に、シリアル接続サービスに着信呼び出し待ちを自動的に開始させたい場合は、「自動応答」を選択して、「自動開始」チェック・ボックスを選択します。

初期設定ストリングのガイドライン

ほとんどのモデムは、類似の初期設定ストリング・コードを共用していますが、モデム間で若干の違いがあります。したがって、すべてのモデムに適した初期設定ストリングを提供することは非常に困難です。場合によっては、ユーザーのモデム用に、独自の初期設定ストリングを作成する必要があります。この場合は、ご使用のモデムに付属のマニュアルを参照して、適切な初期設定ストリング・コードを確認します。

• 必要な初期設定コード

Netfinity シリアル接続制御サービスでモデムを正しく作動させるには、初期設定ストリングで次のようにモデムを構成する必要があります。

- コマンド・エコーを「OFF」
- オンライン文字エコーを「OFF」
- リザルト・コードを使用する
- 単語形式の結果コードをイネーブルする
- 全てのコードおよび CONNECT メッセージに話中音およびダイヤル・トーン検出を含める
- プロトコル・インディケータ追加 - LAPM/MNP/NONE V42bis/MNP5
- 標準 CD 操作
- DTR ON/OFF でハングアップし、「自動応答を使用不可」にしてコマンド・モードへ
- CTS ハードウェア・フロー制御
- コンピューターに対する受信データの RTS 制御

- キューイングありの非破壊 BREAK 信号、エスケープ状態なし
- 自動応答を「OFF」

例：U.S. Robotics 社の Sportster モデムで正しい操作に必要な設定だけをする
と、初期設定ストリングは次のようになります。

```
E0F1Q0V1X4&A3&C1&D2&H1&R2&Y3S0=0
```

- 追加の初期設定コード

必須の初期設定コードだけでなく、次の設定を追加してモデムを構成すれば、
Netfinity のシリアル接続制御サービスの操作を最適化できます。

- キャリアが検出されるまでスピーカーを「ON」
- ソフトウェア・フロー制御を「使用不可」
- 自動エラー制御
- データ速度可変

例：U.S. Robotics Sportster 社のモデムで必須の設定と追加の設定をすべて
使用すると、初期設定ストリングは次のようになります。

```
E0F1M1Q0V1X4&A3&C1&D2&H1&I0&K1&M4&  
N0&R2&Y3S0=0
```

第11章 ソフトウェア・インベントリー

ソフトウェア・インベントリーを使用すると、どの Netfinity システムについてもすばやくかつ容易にスキャンして、インストール済みソフトウェア製品の有無を調べることができます。このサービス・プログラムのスキャン方式は柔軟性があるので、それを使用すれば、特定の製品でも、製品のタイプ（たとえば、ワード・プロセッサまたはグラフィックス・ビューアー）でも検索できるし、システム上で認識されているすべてのソフトウェアを 1 つのレコードにまとめて載せることもできます。報告書はファイルに保管したり、プリンターで印刷したり、Netfinity データベースにエクスポートすることもできます。

注： ソフトウェア・インベントリーは、収集されたデータを Netfinity データベースにエクスポートすることもできます。ただし、データベースにエクスポートできるのは、Netfinity マネージャーによってだけです。Netfinity クライアントサービス・プログラムが稼動しているシステム上でローカルに、データベース・エクスポート機能を使うことはできません。

ソフトウェア・インベントリーは、あらかじめ定義された多数のソフトウェア製品のプロファイル（製品定義と呼びます）が記載されている辞書ファイルを持っているので、ネットワーク接続されたご自分のシステムにインストールされているソフトウェアの検索を、ただちに開始することができます。

ソフトウェア・インベントリーは、シンプルなグラフィカル・インターフェースを取り入れて設計されているので、製品定義を素早く容易に追加し、編集できます。検索する製品は、ファイル名を指定して定義され、識別されます（これらのファイル名には、ソフトウェアの特定のバージョンだけを容易に検索できるように、ファイルのサイズと作成日付を加えることができます）。また、検索される製品は、SYSLEVEL ファイルに記載されている ID によっても定義され、識別されます。

ソフトウェア・インベントリーは、IBM または他社の、ほかのシステム管理ソフトウェア・アプリケーションとともに作動するよう設計されています。ソフトウェア・インベントリーには、NetView DM エージェント・ソフトウェアがワークステーション上にインストールされている場合に、ワークステーションがもつ既存のソフトウェアのインベントリー情報を NetView DM/6000 または NetView DM (NetWare 版) ソフトウェア配布データベースに統合するためのメカニズムがあります。この統合は、NetView DM FNDSWINV ソフトウェアの変更活動記録インポート・ファイルを作成することによって実行されます。このファイルは、ソフトウェア・インベントリー・サービスによってそのワークステーション上で検索された NVDM (NetView 配布管理プログラム) 変更オブジェクトの名前のリストが入っています。

ソフトウェア・インベントリーは、ソフトウェア辞書をインポートする機能を備えています。インポートできる辞書は、既存の QSoft 辞書ファイル (IBM の Network Door/2 製品用)、NetView DM インベントリー・リスト・ファイル (INVSCAN コーティリティー)、SPAudit 辞書 (米国ソフトウェア出版社協会の SPAudit ツールとともに使用される、一般に入手できる辞書。これは WWW の URL <http://www.spa.org> から入手できます)、およびその他のソフトウェア・インベントリー辞書です (複数のソフトウェア・インベントリー辞書を容易に合成できます)。

ソフトウェア・インベントリーは、リモート・システム・マネージャーと共に使用することもできます。ソフトウェア・インベントリーを用いて、特定のアプリケーションにキーワードを割り当てることができます。定義されたアプリケーション・キーワードをもつアプリケーションが、辞書の検索中に見付かった場合は、そのアプリケーション・キーワードは、このシステムに関して現在定義されている他のキーワードのリストに追加することができます。アプリケーション・キーワードがシステム・キーワードのリストに追加されると、Netfinity マネージャーはリモート・システム・マネージャーのディスカバリー・フィーチャーを使用して、指定されたキーワードをもつシステムだけをシステム・グループに追加することができます。たとえば、Netfinity マネージャーは、アプリケーション・キーワードを使用して、アップグレードを必要とする特定のワード・プロセッサ・プログラムを持つシステムだけを 1 つのグループにすることができます。キーワード割り当てとディスカバリー・プロセスの詳細については、*Netfinity マネージャー ユーザーズ・ガイド*を参照するか、ネットワーク管理者にお尋ねください。

製品名	ベンダー名	バージョン	リビジョン	状態
WinOS2	IBM Corp.	3.81	WPU00L	DISCOVERED
WinOS2 32-bit Graphics Engine	IBM Corp.	3.81	WPU00L	DISCOVERED
WinOS2 First Failure Support Tech	IBM Corp.	1.00	WPU00L	DISCOVERED
WinOS2LAN Adapter and Protocol	IBM Corp.	3.80	WPU00L	DISCOVERED
WinOS2LAN Registrar	IBM Corp.	3.80	WPU00L	DISCOVERED
WinOS2LAN Server	IBM Corp.	3.80	WPU00L	DISCOVERED
WinOS2 User Profile Management	IBM Corp.	3.80	WPU00L	DISCOVERED
WinOS2 User Profile Management	IBM Corp.	3.80	WPU00L	DISCOVERED
Media Player	Microsoft			DISCOVERED

図 22. ソフトウェア・インベントリー・サービス

ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイル

ソフトウェア・インベントリーは、ソフトウェア製品データのファイル(辞書ファイルと呼びます)を使用して、システムにソフトウェア製品があるかないかを判別します。辞書ファイルは、多数のソフトウェア製品の名前と突き合わせ属性を含んでいます。突き合わせ属性とは、ソフトウェア・インベントリーが、指定の属性の検出時にソフトウェア製品を識別するために使用する、そのソフトウェア製品の特性のことをいいます。ソフトウェア・インベントリーは、次の 2 種類の突き合わせ属性を使用します。

- ファイル名 (ファイル・サイズとファイル作成日付を含めても構いません)
- SYSLEVEL ファイル (SysID と構成要素 ID を含めても構いません)

ソフトウェア・インベントリーは、ハード・ディスク・ドライブを検索して、指定のファイルまたは SYSLEVEL ファイルがないかを調べます。またはロードされた辞書ファイルに突き合わせ属性として指定された SYSLEVEL ファイルやほかのファイルが見つかったら、その製品がシステムにインストールされているものとして報告します。

辞書ファイルのロード

ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルをロードするには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューから「オープン」を選択します。
「既存辞書のオープン」ウィンドウがオープンします。
2. 「オープンするファイル名」フィールドに、オープンしたい辞書ファイルの完全修飾パスとファイル名を入力するか、またはその辞書ファイルを含むドライブとディレクトリーを該当するフィールドから選択して、辞書ファイル名を選択します。
3. 「了解」を選択します。

新規の辞書ファイルの作成

新しく辞書ファイルを作成するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューで、「新規」を選択します。
「新規辞書」ウィンドウがオープンします。
2. 「保管ファイル名」フィールドに新規の辞書ファイルの名前を入力します。
3. 「ドライブ」と「ディレクトリー」の各フィールドで、新規の辞書ファイルを作成したいドライブとディレクトリーを選択します。
4. 「了解」を選択します。

辞書ファイルの編集

現在ロードされているソフトウェア・インベントリ辞書ファイルを編集する場合は、「辞書」プルダウン・メニューで「編集」を選択します。「辞書の編集」ウィンドウ (図23 を参照) がオープンします。このウィンドウで、次のことができます。

- 辞書記述の変更

辞書ファイルの記述は、「ソフトウェア・インベントリ」ウィンドウの一番下に表示され、現在ロードされている辞書ファイルの内容を識別する上で役立ちます。この記述はご自分専用ですから、どのようなように変更しても構いません。

辞書ファイルの記述を変更するには、「記述」フィールドに新しい辞書ファイルの記述を入力して、「終了」を選択します。



図 23. 「辞書の編集」ウィンドウ

- 製品定義の追加

製品定義を追加する方法については、117ページの『製品定義の追加』を参照してください。

- 製品定義の編集

製品定義を編集する方法については、130ページの『製品定義の編集』を参照してください。

- 製品定義の削除

辞書ファイルから製品定義を削除するには、「製品定義」選択リストから、削除する製品定義名種類を選択して、「削除」を選択します。

製品定義の追加

現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに、新しい製品定義名、種類を追加するには、「追加」を選択します。「新規製品定義タイプ」ウィンドウがオープンします (図24 を参照)。製品定義は、次のどちらかの基準に基づいて追加することができます。

- 1 つまたは複数の要求ファイルによって定義される製品

選択した 1 つまたは複数のファイルをチェックすることによって、システムに製品がインストールされているかどうかを判別するソフトウェア・インベントリーの製品定義を構成するには、「1 つ以上の要求ファイルによって定義された製品」を選択します。ソフトウェア・インベントリーが検索するファイルの名前だけでなく、最小 (または最大) ファイル・サイズ、およびファイルの正確な作成日または作成日付の期間を追加しても構いません。

1 つまたは複数の要求ファイルの定義によって、製品定義を追加する方法については、118ページの『ファイル・リスト製品定義』を参照してください。

- SYSLEVEL ファイルによって定義される製品

指定の SYSLEVEL ファイルをチェックすることによって、製品がシステムにインストールされているかどうかを判別するソフトウェア・インベントリーの製品定義を構成するには、「SYSLEVEL ファイルによって定義された製品」を選択します。SYSLEVELファイルの名前には、SysID 値 や構成要素 ID を追加しても構いません。

特定の SYSLEVEL ファイルの作成を要求することによる製品定義を追加する方法については、125ページの『SYSLEVEL ファイル製品定義』を参照してください。

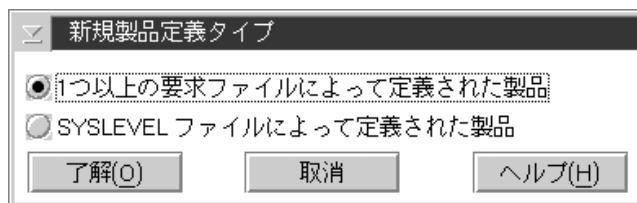


図 24. 「新規製品定義タイプ」ウィンドウ

ファイル・リスト製品定義

ファイル・リスト製品定義を使用すると、ソフトウェア・インベントリーでシステムのドライブを検索して、特定の製品の特定のファイルがあるかどうかを調べることができます。このファイルが見つければ、ソフトウェア・インベントリーは、そのファイルを持つソフトウェア・パッケージがシステムにインストールされているということ報告します。

ファイル・リスト製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに追加するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューで、「編集」を選択します。
2. 「辞書の編集」ウィンドウで「追加」を選択します。
3. 「新規製品定義タイプ」ウィンドウで「1 つ以上の要求ファイルによって定義された製品」を選択してから、「了解」を選択し、「ファイル・リスト製品定義の追加」ウィンドウをオープンします (図25 を参照)。

図 25. 「ファイル・リスト製品定義の追加」ウィンドウ

4. 製品データのフィールドに入力して、「製品タイプ」を選択します。

この情報は、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウと、検索中に製品が見つかったときにソフトウェア・インベントリーで生成されるすべての報告書に記録されます。「製品タイプ」は、製品タイプによる検索が実行されるときに、ソフトウェア・インベントリーで使用されます。製品タイプによる検索の詳細については、133ページの『製品タイプによる検索』を参照してください。

製品データのフィールドには、次のものがあります。

- 製品名

ソフトウェア製品の名前です。

- ベンダー名

ソフトウェア製品の製造元の名前です。

- 記述

ソフトウェア製品の簡単な説明です。

- 製品タイプ

ソフトウェア製品が持っている機能のタイプです。選択可能な項目は、次のとおりです。

- デフォルト
- ネットワーク
- 通信
- ワープロ
- デスクトップ・パブリッシング
- データベース
- メール
- サーバー
- 表計算
- 財務
- エンターテイメント
- マルチメディア
- グラフィックス・ビューア/エディター
- 教育
- オペレーティング・システム

- ソフトウェア開発
 - 図形表示
 - システム・マネージメント
 - ドキュメンテーション
 - CAD/CAM
- バージョン
ソフトウェア製品のバージョン番号です。
 - リビジョン
ソフトウェア製品のリビジョン番号です。
 - NetView DM (配布管理プログラム) 変更オブジェクト (NetView DM ユーザーの場合のみ)

NetView 配布管理プログラムの変更オブジェクトであり、ワークステーションのインストール活動記録に追加されます。NetView DM サーバーのデータベース内にある既存の変更オブジェクトと一致する必要はありませんが、変更オブジェクトに関する命名規則に従う必要があります。ワークステーション上でソフトウェア・インベントリーを呼び出した後で、この変更オブジェクト名がまだ NetView DM カタログに存在しない場合は、このカタログに追加されます。

注: このトークンは、「**NetView DM** インベントリーの更新」機能だけで使用されます。NetView DM 変更オブジェクトの詳細については、135ページの『NetView 配布管理プログラム・インベントリーの更新』を参照するか、NetView DM のマニュアルを参照してください。

- NetView DM 位置トークン (NetView DM ユーザーの場合のみ)

NetView 配布管理機能の位置トークン文字列のことをいい、定義中のソフトウェア製品に使用されます。通常、ワークステーション上でのアプリケーションのインストール場所を表すために使用されます。たとえば、Netfinity の製品定義を作成する場合は、NETFINDIR という位置トークンを入力します。使用できる最大長は 11 文字です。このフィールドは任意選択です。

注: このトークンは、「**NetView DM** インベントリーの更新」機能だけで使用されます。NetView DM 変更オブジェクトの詳細については、135ページの『NetView 配布管理プログラム・インベントリーの更新』またはお持ちの NetView DM のマニュアルを参照してください。

- アプリケーション・キーワード

アプリケーション・キーワードをリモート・システム・マネージャーと共に使用すると、指定されたアプリケーションがインストールされているシステムだけを、Netfinity マネージャーで検出することができます。アプリケーション・キーワードの使用の詳細については、137ページの『アプリケーション・キーワードの使い方』を参照してください。

これらすべてのフィールドに入力する必要はありませんが、ソフトウェア・インベントリーが多くの情報を使って容易に製品を検索できるように、できるだけ多くのフィールドに記入するようにします。

5. 突合せ属性を指定します。

突合せ属性は、ユーザーが定義しようとするソフトウェア製品がシステムにインストールされているかどうかを調べるために、ソフトウェア・インベントリーのサービス・プログラムが使ういくつかのデータ項目です。ファイル・リスト製品定義を作成する場合、突合せ属性は、1 つ (または複数) の指定ファイルです。ファイルの追加、編集、削除は、「突合せ属性」フィールドで行うことができます。

ファイルを追加するには、次のようにします。

- 定義したい製品がシステムにある場合
 - a. 「ファイルの使用」を選択します。
 - b. ソフトウェア・インベントリーで検索するファイルが存在する「ドライブ」と「ディレクトリー」を選択します。次に、「ファイル」を選択してから、「了解」を選択します。

選択されたファイルがこれで「突合せ属性」フィールドに追加されてから、「突合せファイルとしてのファイルの使用」ウィンドウを再オープンすれば、このディレクトリーから他のファイルを追加することができます。必要なファイルの追加が完了したら、「取消」を選択します。

- c. 任意選択: 個々の製品のリリースまたはバージョンを区別するために、特定ファイルがある日付、またはその日付より後に作成されたと指定したり、あるいはあるサイズ、またはあるサイズの範囲内であると指定することが必要な場合もあります。ソフトウェア・インベントリーに、指定のサイズまたはある範囲内のサイズであるファイルや、ある特定の日か特定の期間内に作成されたファイルを検索したい場合は、「突合せ属性」フィールドからそのファイルを選択した後、「編集」を選択して、「突合せファイルの編集」ウィンドウ (図26 を参照) をオープンします。「ファイル・サイズ (任意指定)」と「ファイル日付 (任意指定)」を指定してから「保管」を選択して、作業を続けます。

突合せファイルの編集

ファイル名: NETBASE.NLM

ファイル・サイズ(任意指定):

正確なまたは最小サイズ(バイト):

最大サイズ(バイト):

ファイル日付(任意指定):

年 月 日

正確なまたは最も早い日付:

最新の日付:

保管(S) 取消 ファイルの使用(F)... ヘルプ(H)

図 26. 「突合せファイルの編集」ウィンドウ

- d. 「作成」を選択して、この製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに保管します。

- 定義したい製品がシステムに ない 場合
 - a. 「追加」を選択して、「突合せファイルの追加」ウィンドウをオープンします。
 - b. 「ファイル名 (任意指定)」、「ファイル・サイズ (任意指定)」、「ファイル日付 (任意指定)」を入力します。

個々の製品のリリースまたはバージョンを区別するために、特定ファイルがある日付、またはその日付より後に作成されたと指定したり、あるいはあるサイズまたはあるサイズの範囲内であると指定することが必要な場合もあります。ソフトウェア・インベントリーによって、指定されたサイズまたはまたはサイズ範囲内のファイル、または特定の日付または特定の日付範囲内に作成されたファイルを探索したい場合は、「ファイル・サイズ」および「ファイル日付」情報を指定します。
 - c. 「保管」を選択して、このファイルを「突合せ属性」リストに追加します。

この手順を繰り返して、追加したい突合せ属性をすべて追加します。
 - d. 「作成」を選択して、この製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに保管します。

SYSLEVEL ファイル製品定義

SYSLEVEL ファイル製品定義を使用すると、システムのドライブに、特定の製品に含まれている特定の SYSLEVEL ファイルが存在しているかどうかをソフトウェア・インベントリで検索することができます。SYSLEVEL ファイルが見つかった場合、ソフトウェア・インベントリは、その SYSLEVEL ファイルをもつソフトウェア・パッケージがシステム上にインストールされているということを報告します。

SYSLEVEL ファイル製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリの辞書ファイルに追加するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリ」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューで、「編集」を選択します。
2. 「辞書の編集」ウィンドウで「追加」を選択します。
3. 「新規製品定義タイプ」ウィンドウで「**SYSLEVEL** ファイルによって定義された製品」を選択してから「了解」を選択し、「SYSLEVEL 製品定義の追加」ウィンドウをオープンします (図27 を参照)。

図 27. 「SYSLEVEL 製品定義の追加」ウィンドウ

4. 製品データのフィールドに入力して、「製品タイプ」を選択します。この情報は、「ソフトウェア・インベントリ」ウィンドウと、検索中に製品が見つかったときにソフトウェア・インベントリで生成されるすべての報告書に記録されます。「製品タイプ」は、製品タイプによる検索が実行されるときに、ソフトウ

エア・インベントリーで使用されます。製品タイプによる検索の詳細については、133ページの『製品タイプによる検索』を参照してください。

製品データのフィールドには、次のものがあります。

- 製品名
ソフトウェア製品の名前です。
- ベンダー名
ソフトウェア製品の製造元の名前です。
- 記述
ソフトウェア製品の簡単な説明です。
- 製品タイプ
ソフトウェア製品が持っている機能のタイプです。選択可能な項目は、次のとおりです。
 - デフォルト
 - ネットワーク
 - 通信
 - ワープロ
 - デスクトップ・パブリッシング
 - データベース
 - メール
 - サーバー
 - 表計算
 - 財務
 - エンターテイメント
 - マルチメディア
 - グラフィックス・ビューアー/エディター
 - 教育
 - オペレーティング・システム
 - ソフトウェア開発
 - 図形表示

- システム・マネージメント
 - ドキュメンテーション
 - CAD/CAM
- NetView DM (配布管理プログラム) 変更オブジェクト (NetView DM ユーザーの場合のみ)

ワークステーションのインストール活動記録に追加される NetView 配布管理機能の変更オブジェクトです。NetView DM サーバーのデータベース内にある既存の変更オブジェクトと一致する必要はありませんが、変更オブジェクトに関する命名規則に従う必要があります。ワークステーション上でソフトウェア・インベントリを呼び出した後で、この変更オブジェクト名がまだ NetView DM カタログに存在しない場合は、このカタログに追加されます。

注: このデータは、「**NetView DM** インベントリの更新」機能でだけ使用されます。NetView DM 変更オブジェクトの詳細については、135ページの『NetView 配布管理プログラム・インベントリの更新』を参照するか、NetView DM のマニュアルを参照してください。

- NetView DM 位置トークン (NetView DM ユーザーの場合のみ)

NetView 配布管理機能の位置トークン文字列のことをいい、定義中のソフトウェア製品に使用されます。通常、ワークステーション上でのアプリケーションのインストール場所を表すために使用されます。たとえば、Netfinity の製品定義を作成する場合は、NETFINDIR という位置トークンを入力します。使用できる最大長は 11 文字です。このフィールドは任意選択です。

注: このトークンは、「**NetView DM** インベントリの更新」機能でだけ使用されます。NetView DM 変更オブジェクトの詳細については、135ページの『NetView 配布管理プログラム・インベントリの更新』を参照するか、NetView DM のマニュアルを参照してください。

- アプリケーション・キーワード

アプリケーション・キーワードをリモート・システム・マネージャーと共に使用すると、指定されたアプリケーションがインストールされているシステムだけを、Netfinity マネージャーで検出することができます。アプリケーション・キーワードの使用の詳細については、137ページの『アプリケーション・キーワードの使い方』を参照してください。

これらすべてのフィールドに入力する必要はありませんが、ソフトウェア・インベントリーが多くの情報を使って容易に製品を検索できるように、できるだけ多くのフィールドに記入するようにします。

5. 突合せ属性を指定します。

突合せ属性は、ユーザーが定義しようとするソフトウェア製品がシステムにインストールされているかどうかを調べるために、ソフトウェア・インベントリーのサービス・プログラムが使ういくつかのデータ項目です。SYSLEVEL ファイルの製品定義を作成する場合、突合せ属性は、SYSLEVEL ファイル名、SysID 値、および構成要素 ID になります。

SYSLEVEL ファイルに突合せ属性を追加するには、次のようにします。

- 定義しようとする製品の SYSLEVEL ファイルがシステムにある場合
 - a. 「ファイルの使用」を選択します。
 - b. SYSLEVEL ファイルが格納されている「ドライブ」と「ディレクトリー」を選択し、「ファイル」を選択してから「了解」を選択します。
 - c. 「作成」を選択して、この製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに保管します。
- 定義しようとする製品の SYSLEVEL ファイルがシステムにない場合
 - a. 「ファイル名」フィールドに、その製品の SYSLEVEL ファイルの名前にある 3 文字の拡張子を入力します。
 - b. 「SysID 値」と「構成要素 ID」があれば、それらも入力します。

注: これらの値は SYSLEVEL ファイルに保管されているため、SYSLEVEL ファイルがないと入手しにくい場合があります。
 - c. 「作成」を選択して、この製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに保管します。

製品定義の編集

ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルの製品定義は、追加を行う場合と同様に編集することができます。製品定義を編集するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューで、「編集」を選択します。
2. 「製品定義」フィールドで、定義を編集したい製品の名前を選択し、「編集」を選択します。
 - 選択した製品定義がファイル・リスト製品定義である場合は、「ファイル・リスト製品定義の編集」ウィンドウがオープンします。
 - 選択した製品定義が SYSLEVEL ファイル製品定義である場合は、「SYSLEVEL 製品定義の編集」ウィンドウがオープンします。
3. 必要に応じて、製品情報と突合せ属性を編集します。

製品情報と突合せ属性を編集する手順は、新規製品定義を追加する際の手順と同じです。詳細については、118ページの『ファイル・リスト製品定義』と125ページの『SYSLEVEL ファイル製品定義』を参照してください。

4. 「保管」を選択して、この製品定義への変更を保管します。

検索の実行

ソフトウェア・インベントリーは、システムで4つのタイプのソフトウェア検索を実行できます。それらの検索は、次のとおりです。

- 全辞書の検索
- ドライブによる検索
- 選択された製品の検索
- 製品タイプによる検索

全辞書の検索

ソフトウェア・インベントリー的全辞書の検索を使用すると、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに定義されているソフトウェア製品のすべてを検索することができます。システムの数、システム上のファイル数、システムにインストールされている製品、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに定義されている製品数によって、全辞書の検索には、数秒から数分を要します。検索が完了すると、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに結果が表示されます。

全辞書の検索を実行するには、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューで、「全辞書の検索」を選択します。

報告書の生成と、この情報をデータベースにエクスポートする方法については、134ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

ドライブによる検索

ソフトウェア・インベントリーでは、ハード・ディスク・ドライブを指定して全辞書検索を実行することができます。システム上の特別なハード・ディスク・ドライブだけにある製品を検索したい場合は、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューで、「ドライブによる検索」を選択してから、検索したいディスク・ドライブを示す文字を選択します。これで、ソフトウェア・インベントリーは、現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書に定義されている製品で、指定されたディスク・ドライブにあるものだけを検索します。

検索が完了すると、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに結果が表示されます。報告書の生成または情報をデータベースにエクスポートする方法については、134ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

選択された製品の検索

ネットワークに接続されているシステムにある特定のソフトウェア製品を検索する必要がある場合もあります。1 つまたは複数の特定の製品を検索するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューで、「選択された製品の検索」を選択します。

「選択インベントリー」ウィンドウがオープンします (132ページの図28 を参照)。



図 28. 「選択インベントリー」ウィンドウ

2. 「使用可能な製品定義」ウィンドウで、検索したい製品すべての名前を選択します。
3. 「了解」を選択して、選択した製品の検索を開始します。

検索が完了すると、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに結果が表示されます。報告書の生成または情報をデータベースにエクスポートする方法については、134ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

製品タイプによる検索

ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルで製品を定義する場合、製品タイプを指定することができます。製品タイプとはその製品の主な機能を示す簡単な略称です。たとえば、Netfinity の製品タイプはシステム管理です。ソフトウェア・インベントリーを使用すると、ネットワーク上のシステムで同じ製品タイプのすべての製品を検索できます。

指定した製品タイプだけを検索するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューで「製品タイプによる検索」を選択します。

「製品タイプによる検索」ウィンドウがオープンします。

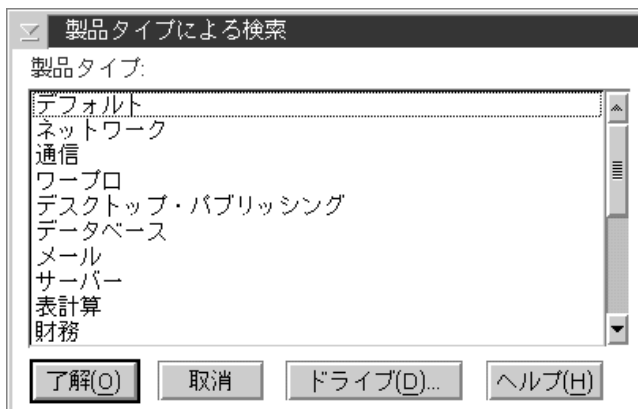


図 29. 「製品タイプによる検索」ウィンドウ

2. 「製品タイプ」リストから、1 つまたは複数の製品タイプを選択します。
3. 「了解」を選択して、検索を開始します。

検索が完了すると、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに結果が表示されます。報告書の生成と、この情報をデータベースにエクスポートする方法については、134ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

報告書の生成とデータのエクスポート

ソフトウェア・インベントリーで収集された情報に対しては、次のことができます。

注: ソフトウェア・インベントリーは、収集されたデータを Netfinity データベースにエクスポートすることもできます。ただし、データベースにエクスポートできるのは、Netfinity マネージャーによってだけです。Netfinity クライアントサービス・プログラムが稼動しているシステム上でのローカルに、データベース・エクスポート機能を使うことはできません。

- ファイルに印刷 (保管)
- プリンターに印刷
- Netfinity データベースにエクスポート

ファイルに印刷

ソフトウェア・インベントリーが収集した情報をファイルに印刷 (保管) するには、次のようにします。

1. ソフトウェア・インベントリーによる検索を開始します。
2. 検索が完了したら、「インベントリー」プルダウン・メニューで「ファイルに印刷」を選択します。
3. ファイル名を指定し、保管先のドライブとディレクトリーを選択してから、「了解」を選択します。

プリンターに印刷

ソフトウェア・インベントリーが収集した情報を、システムに接続されたプリンターで印刷するには、次のようにします。

1. ソフトウェア・インベントリーによる検索を開始します。
2. 検索が完了したら、「インベントリー」プルダウン・メニューで「プリンターに印刷」を選択します。

情報は、システムに接続されたデフォルトのプリンターに送信されます。

データベースにエクスポート

ソフトウェア・インベントリーが収集した情報を Netfinity データベースにエクスポートする、またはサポートされているデータベースの形式のファイルに保管するには、次のようにします。

注: ソフトウェア・インベントリーは、収集されたデータを Netfinity データベースにエクスポートすることもできます。ただし、データベースにエクスポートできるのは、Netfinity マネージャーによってだけです。Netfinity クライアントサービス・プログラムが稼働しているシステム上でのローカルに、データベース・エクスポート機能を使うことはできません。

1. ソフトウェア・インベントリーによる検索を開始します。
2. 検索が完了したら、「インベントリー」プルダウン・メニューで「データベースにエクスポート」を選択します。
3. 実行するデータベース・エクスポートのタイプ (データをデータベースにエクスポートするか、またはデータベースのファイルに保管するか) を選択します。
4. 「了解」を選択して、データをエクスポートまたは保管します。

NetView 配布管理プログラム・インベントリーの更新

ソフトウェア・インベントリーを使って、NetView 配布管理プログラム(*NetView DM* と略記します) のソフトウェア・インベントリー用のインポート・ファイルを作成することができます。システムで NetView DM エージェント・ソフトウェアが稼働している場合は、「インベントリー」プルダウン・メニューで「**NetView DM** インベントリーの更新」を選択します。ソフトウェア・マネージャーは、現在ロードされている辞書ファイルをスキャンして、NetView DM 変更オブジェクトが組み込まれている製品定義を探索し、NetView DM ソフトウェア・インベントリーのインポート・ファイル (FNDSWINV) に追加します。位置トークン情報は、NetView DM エージェント・ソフトウェア基本パスを介して、FNDTKINV という名のファイルに書き込まれます。

これによって、ユーザー作成の exit ルーチンは、適切な NetView DM INV コマンドと NetView DM UPDTG コマンドを呼び出し、インポート・ファイル内のデータを、ワークステーションの NetView DM ソフトウェア変更活動記録データベースに移すことができます。

注: これができるのは、NetView DM エージェント・ソフトウェアがシステムにインストールされ、実行されている場合に限りです。

ソフトウェア辞書のインポート

ソフトウェア・インベントリーは、ソフトウェア辞書をインポートする機能を備えています。インポートできるのは、既存の QSoft 辞書ファイル (IBM の Network Door/2 製品で使用)、NetView DM インベントリー・リスト・ファイル (INVSCAN ユーティリティ用)、SPAudit 辞書 (一般に入手できる辞書であり、米国ソフトウェア出版社協会の SPAudit ツールとともに使われます。この辞書は、WWW の URL <http://www.spa.org> から入手できます)、および他のソフトウェア・インベントリー辞書です。複数のソフトウェア・インベントリー辞書を容易に合成できます)。

ソフトウェア辞書のファイルをインポートするには、次のようにします。

1. インポートされる新しいデータを受け入れるソフトウェア・インベントリー辞書ファイルを開きます。

ソフトウェア・インベントリー辞書ファイルを開く場合は、「辞書」プルダウン・メニューで「オープン」を選択し、辞書ファイルを選択してから、「了解」を選択します。

2. 「辞書」プルダウン・メニューでインポート機能を 1 つ選択します。

選択できるインポート機能は、次のとおりです。

- ソフトウェア・インベントリー辞書からのインポート

別のソフトウェア・インベントリー辞書ファイルから、すべてのデータを現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにインポートするには、「ソフトウェア・インベントリー辞書からのインポート」を選択します。

- SPAudit 辞書からのインポート

SPAudit 辞書ファイルから現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルに、すべてのデータをインポートする場合は、「**SPAudit** 辞書からのインポート」を選択します。

- QSoft 辞書からのインポート

QSoft 辞書ファイルから、すべてのデータを現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにインポートするには、「**QSoft** 辞書からのインポート」を選択します。

- NetView DM インベントリー・リストのインポート

NetView DM インベントリー・リストから、すべてのデータを現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにインポートするには、「**NetView DM** インベントリー・リストからのインポート」を選択します。

注:

1. システムの速度とインポートする辞書ファイルのサイズによって、インポート機能の完了にはかなりの時間がかかることがあります。
2. インポート機能では、選択したファイル内のすべてのデータがインポートされるので、現在すでにロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにあるエントリー (特記事項) まで、インポートされるデータに入ってしまう場合があります。同一製品定義が何回もインポートされると、辞書ファイル内に製品に関して複数の同一項目ができる結果になり、単一製品が複数回検出される結果にもなります。ソフトウェア・インベントリー辞書ファイルから同一項目を除去するには、ソフトウェア・インベントリー辞書編集機能を使用して、辞書ファイルを編集します (詳細については、115ページの『辞書ファイルの編集』を参照してください)。

アプリケーション・キーワードの使い方

ソフトウェア・インベントリーでは、特定のソフトウェア・アプリケーションに、アプリケーション・キーワードを付けることができます。アプリケーション・キーワードが定義されると、リモート・システム・マネージャーはそれらのキーワードを使ってアプリケーションをグループ分けし、インストールされているアプリケーションごとに、いくつかのシステム・グループをつくります。

ソフトウェア・インベントリー辞書ファイル内の製品定義にアプリケーション・キーワードを付けるには、次のようにします。

1. ソフトウェア・インベントリー辞書ファイルをロードします。

辞書ファイルをロードするには、「辞書」プルダウン・メニューで「オープン」を選択して、ロードしたい辞書ファイルを選び、「了解」を選択します。

2. ソフトウェア・インベントリー辞書ファイルを編集します。

現在ロードされている辞書ファイルを編集するには、「辞書」プルダウン・メニューで「編集」を選択します。

3. 製品定義を編集します。

アプリケーション・キーワードを割り当てたい製品を「製品定義」フィールドで選択して、「編集」を選択します。

4. アプリケーション・キーワードを割り当てます。

製品に割り当てたいキーワードを、「アプリケーション・キーワード」フィールドに入力します。アプリケーション・キーワードは、12 バイトまでです。

5. 「保管」を選択して、キーワードを辞書ファイルに保管します。

辞書検索中にシステム上で検出されるアプリケーション・キーワードを持つ製品は、辞書検索後の、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに、アプリケーション・キーワードが他のソフトウェア製品情報とともに表示されます。アプリケーション・キーワードが定義されている製品がシステム上で検出されると、そのアプリケーション・キーワードをシステムのキーワード・リストに追加することができます。検出および定義された製品のアプリケーション・キーワードで、システム・キーワード・リストを更新するには、「インベントリー」プルダウン・メニューで「アプリケーション・キーワードの更新」を選択します。

注:

1. アプリケーション・キーワードを、ほかのシステム・キーワードと区別するため、キーワードの前に、文字 APP: を付ける必要があります。リモート・システム・マネージャーが扱うシステム・グループで、アプリケーション・キーワードによって検索されるものに対しては、それらが円滑に検索できるように、「アプリケーション・キーワード」フィールドに入力するテキストの前に、APP: を付けておく必要があります。

たとえば、ある製品定義でアプリケーション・キーワードを SOFTWARE とすると、このキーワードを持つ製品を使っているシステムを検索するのにリモート・システム・マネージャーが使うキーワードは、APP:SOFTWARE にします。

2. 「アプリケーション・キーワードの更新」機能は、現在「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに表示されているアプリケーション・キーワードだけを、システムのキーワード・リストに追加します。システムにインストールされているアプリケーションの製品定義に新しくアプリケーション・キーワードを付けると、次回の辞書検索が行われて「アプリケーション・キーワードの更新」が選択されるまで、そのキーワードはキーワード・リストに追加されません。

システム情報ツールは、システムのハードウェアの構成とソフトウェアの構成について、広範囲の情報を収集して表示するように設計されています。システム情報ツールは、主として IBM システムで使用するよう設計されていますが、多くの機能は他社製のシステムでも使用することができます。

システム情報ツールの機能

システム情報ツールは、ハードウェア構成情報とソフトウェアの構成情報を収集します。この情報は、オンラインで表示することも、ファイルまたはプリンターに送ることもできます。

注： システム情報ツールは、収集されたデータの Netfinity データベースにエクスポートをすることもできます。ただし、データベースにエクスポートできるのは、Netfinity マネージャーによってだけです。Netfinity クライアントサービス・プログラムが稼働しているシステム上でのローカルに、データベース・エクスポート機能を使うことはできません。

システムのハードウェア、ソフトウェア、またはオペレーティング・システムの構成に従って、システム情報ツールでは、以下に挙げるシステム・フィーチャーの一部または全部に関する情報を収集します。

- Pentium®プロセッサの情報。欠陥のある Pentium プロセッサの自動検出も含まれます。
- マイクロチャンネル、EISA、PCI の各アダプターの識別情報、さらに一般に使用される多数のアダプターで使える構成情報。
- ドライブ情報。ファイル・システムの種類、ディスク・ドライブの使用可能スペース、ディスク・ドライブ・サイズ、および区画レイアウトなどです。
- エラー・ログの表示と解釈。
- キーボード情報。
- メモリー構成。物理メモリーの総容量、インストールされている SIMM (シングル・インライン・メモリー・モジュール) の識別、サポートされている増設用メモリーなどです。
- マウスのタイプと設定。

- オペレーティング・システム情報。(バージョン、DOS サポート、セッション・リミット、現在のタスク・リスト、および CONFIG.SYS 情報などです)。
- モデルとマイクロプロセッサ情報。モデル名、プロセッサのタイプと速度、BIOS 日付などです。
- パラレル・ポートの構成とシリアル・ポートの構成。
- ビデオ・システム情報。アダプターのタイプ、画面解像度、およびビデオ・ディスプレイ識別子などです。
- プリンター構成。インストールされているプリンター・ドライバーについてのデータも含まれます。
- SCSI、ESDI、IDE/ST506、またはその他のディスク・アダプター情報。接続されている装置、装置サイズ、およびアダプター・データなどです。
- システムの安全保護機能。パワーオン・パスワード、2 次安全保護機能などです。
- RAID サブシステム。
- VPD データ。
- PCMCIA 装置。
- プラグ・アンド・プレイ構成。
- ネットワーク (NDIS) デバイスとデータ (OS/2 が稼動しているシステムのみ)。



図 30. システム情報ツール

システム情報ツールの使用

システム情報ツールによって収集された情報を表示させるには、「システム情報ツール」ウィンドウからその構成要素のオブジェクトまたは名前を選択します。このアクションによって、選択された構成要素についてより詳細な情報が表示されるウィンドウがオープンされます。

さらに利用可能な情報がある場合は、新たにオープンしたウィンドウで 1 つまたは複数のトピックまたはオブジェクトが強調表示されます。そこからどれかを選択すると、さらに装置に固有な情報を示すウィンドウをオープンできます。さらに使える情報がない場合、ウィンドウ内の項目は強調表示されません。

システム情報ツールでは、収集および表示されたデータを出力するのに、3 つのオプションのどれかを選択できます。これらのオプションにアクセスするには、「システム情報ツール」ウィンドウ上部の「ファイル」プルダウン・メニューを選択してから、次のことを行います。

- システム情報ツールによって収集されたすべてのシステム構成データのテキスト報告書を生成して、ユーザーが選択したファイルにその報告書を保管するには、「全システム・データをファイルにプリント」を選択します。標準のファイル・ウィンドウが表示され、ファイル名を選択できるようになります。
- システム情報ツールによって収集されたすべてのシステム構成データのテキスト報告書を生成して、デフォルトのプリンターにその報告書を送信するには、「システム・データをプリンターに印刷」を選択します。
- プログラムによって表示されたすべての情報と、現在の日付と時刻が記載されたバイナリー・ファイルを作成するには、「履歴ファイルの生成」を選択します。後でコマンドラインからシステム情報ツールを始動するときに、**IF** コマンドライン・パラメーターを使用すると、履歴ファイルを表示できます。システム情報ツールのコマンド行機能の詳細については、192ページの『システム情報ツールのコマンドライン操作』を参照してください。

機密システム・データの保護

システム情報ツールでは、広範囲にわたるハードウェア構成情報に加えて、詳細なオペレーティング・システム情報も収集します。収集の対象となるデータには、オペレーティング・システムによって異なりますが、一般的には、システムの CONFIG.SYS ファイルや AUTOEXEC.BAT ファイルの内容も含まれます。システムの構成によって異なるとはいえ、これらのファイルには機密情報が含まれている場合があります。たとえば、CONFIG.SYS ファイルには、ネットワーク・アクセス可能ディスク・ドライブにログオンする場合に使用する、次のようなコマンドが入っていることがあります。

```
LOGON MY_USER_ID /D:MY_DRIVE /P:MY_PASSWORD
```

重要な、または機密のシステム・データを自動的に保護するためには、Netfinity ディレクトリーに SIKEYWD.INI という名前の ASCII ファイルを作成します。このファイルには、1 つまたは複数の英数字文字列が入ります。このファイルが表示される場合は、システム情報ツールは、SIKEYWD.INI ファイルに指定されているキーワードの 1 つが入っている行上の (キーワード自体以外の) 自動的にすべての英数字をアスタリスクで置き換えます。

上に挙げた例を使用して説明すれば、SIKEYWD.INI ファイルにキーワード LOGON が入っている場合は、上記の CONFIG.SYS 情報は次のように表示されま

```
LOGON*****
```

注:

1. SIKEYWD.INI ファイルには、必要な数のキーワードを入れることができません。キーワードは、相互間をスペースで区切る必要があります。
2. SIKEYWD.INI スtring項目は、大文字小文字を区別します。SIKEYWD.INI 項目に正確に一致するStringだけが、システム情報ツール・データ内で置き換えられます。
3. 追加処理を実行する必要があるため、SIKEYWD.INI ファイルにキーワードを追加すると、システム情報ツールのパフォーマンスが低下する可能性があります。したがって、SIKEYWD.INI ファイルへのキーワードの追加には、注意が必要です。

第13章 システム・モニター

システム・モニターを使用すると、システム内の複数の構成要素の活動を簡単に図式化して監視することができます。標準的な機能として、次のものがあります。

- システムの連続的な監視。次の事項を監視します。
 - ロック・メモリーの使用率
 - 仮想メモリーの使用率
 - マイクロプロセッサの使用率
 - 使用可能な DASD スペースとスペース残量
 - DASD の使用率
 - TCP/IP プロトコル機能
 - 実行中のプロセス
 - 実行中のスレッド
 - Pentium プロセッサの計算
 - RAID 装置属性
 - 読み出し/書き込みエラー (Netfinity マネージャー・プログラムのみ)
- 非表示化、サイズ変更、およびユーザーによる構成ができる監視機能
- 設定値を超えたときに Netfinity アラートが生成される、ユーザー定義のしきい値
- しきい値の範囲外から、許容範囲または正常状態に戻ったときに生成されるアラート
- 折れ線グラフ、テキスト、リアルタイムの図形のどれを使ってシステム活動を表示するかを選択

注: システム・モニターは、収集されたデータの Netfinity データベースへのエクスポートをサポートしています。ただし、データベースへのエクスポートは、Netfinity マネージャーによってだけ実行されます。Netfinity クライアントサービス・プログラムが稼働しているシステムでは、データベース・エクスポート機能をローカルに使うことはできません。

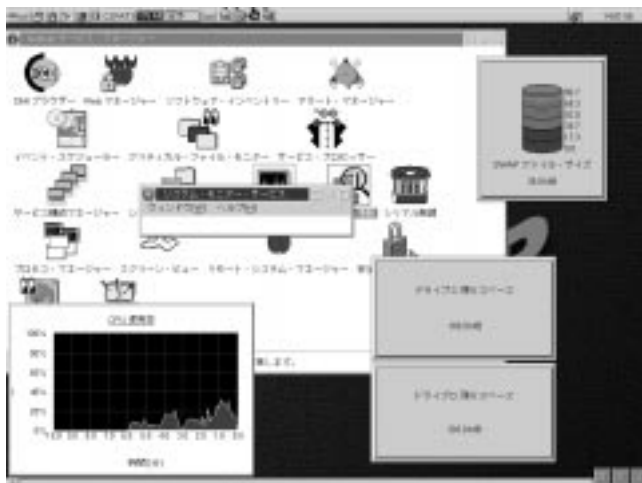


図 31. システム・モニター・サービス

注: システム・モニターで使っているデータ処理技法は、長期のシステム活動のプロファイルにも、短期の高精度のシステム活動の監視にも利用できます。

システム活動のサンプルが取られると、それらのサンプルが記録され、表示されます。ただし、多数のサンプルが取られた後では、個々の値に重みづけされ、いくつかの同時に採取されたサンプルの平均値が算出されて、1つの長期的な値として記録されます。

これは、主としてシステム・モニターのデータ・ファイルがシステム内で大量のスペースを占有しないようにするためです。また、このデータ処理技法により、短期の監視能力を犠牲にせず、長期にわたるシステム負荷の平均値を適切に測定することもできます。システム・モニターが起動したときに折れ線グラフで初期“スパイク”が見られるのは、このデータ処理技法によるものです。

モニターのそれまでの活動の記録が必要でない場合、または記録保持のためにディスク・ドライブ・スペースを使用したくない場合には、システム・モニターの「データの記録」オプションを選択して、記録を保持しないようにすることができます。

「システム・モニター・サービス」ウィンドウ

システム・モニターが始動されると、現在表示可能に設定されているすべてのモニターが、「システム・モニター・サービス」ウィンドウと共に表示されます。

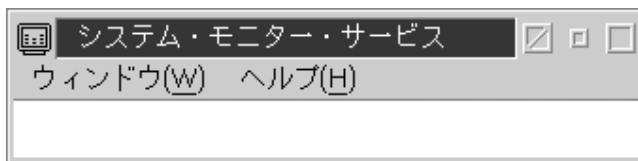


図 32. 「システム・モニター・サービス」ウィンドウ

「システム・モニター・サービス」ウィンドウは、サービス全体を制御します。「システム・モニター・サービス」ウィンドウをクローズすると、すべてのモニターも、それに伴ってクローズされます。

「システム・モニター・サービス」ウィンドウの「ウィンドウ」プルダウン・メニューに表示される選択項目を使用して、次のことを行うことができます。

- 使用できるモニターを表示する

「モニターの表示」を選択して、「表示モニターの選択」ウィンドウをオープンします。このウィンドウを使用して、デスクトップで表示したいシステム・モニターを選択します。

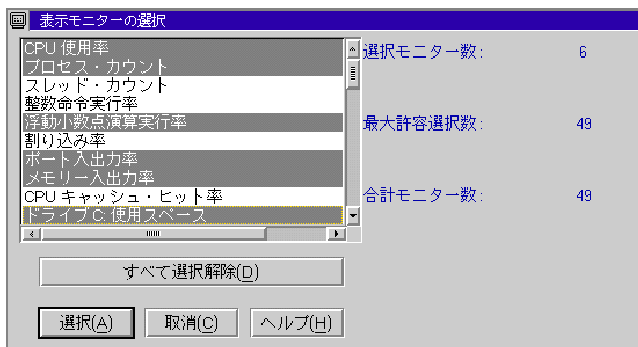


図 33. 「表示モニターの選択」ウィンドウ

デスクトップに表示するモニターを選択するには、次のようにします。

1. デスクトップに表示したいモニターを選択します。

表示できるすべてのモニターを選択するには、「すべて選択」をクリックします。その時点ですべてのモニターが選択されており、モニターの選択をすべて解除したい場合は、「すべての選択を解除」をクリックします。

一度に表示できるモニター数に対する制限はありません。ただし、システムの制限により、一度に表示できる最多モニター数のデフォルトは、50 に設定されています。表示可能なモニター数の最大値は、次のように、システム環境変数を変更して、設定しなおすことができます。

```
SET NF_MAX_MON_DISP=n
```

n には、ゼロより大きな整数を入力してください。環境変数の設定方法は、ご使用のオペレーティング・システムによって異なります。

- この環境変数を、OS/2 または Windows 95 システムに設定するには、CONFIG.SYS ファイルに変数を追加してから、システムを再起動します。
- NT システムの場合は、次のようにします。
 - a. Windows NT の「コントロール パネル」をオープンしてから、「システム」をダブルクリックします。
 - b. 「環境」タブをクリックします。
 - c. 「システム環境変数」フィールドの任意の場所をクリックします。
 - d. 変数フィールドに次のように入力します。

```
NF_MAX_MON_DISP
```
 - e. 「値」フィールドの「*n*」値にゼロより大きい整数を入力します。
 - f. 「設定」を選択します。
 - g. 「適用」を選択します。
 - h. 「OK」を選択します。
 - i. 電源をオフにしてから、Netfinity サポート・プログラムを再起動します。

注：一度に表示できるモニター数を増やした場合、システムの資源が不足することがあります。この問題を避けるために、必要なモニターだけを表示してください。

2. デスクトップに表示したくないモニターが選択されている場合は、その選択を解除します。
3. 「選択」を選択すると、指定どおりにモニターが表示されたり、隠されたりします。

- 特定のモニターを前面に移動します。

前面に移動したいモニターの名前を選択します。現在隠されていないモニターについては、そのモニターの名前を選択して前面に移すことができます。モニターが隠れている場合には、その名前はグレーになっています。隠れているモニターは、前面に移すことはできません。

モニター・ポップアップ・メニュー

各モニターには、そのモニターのポップアップ・メニューからアクセスすることのできる、モニター固有のオプションが複数あります。モニターのポップアップ・メニューをオープンするには、マウス・ボタン 2 を使用してそのモニターをクリックします。モニターのポップアップ・メニューがオープンします。各モニターのポップアップ・メニューから項目を選択すると、次のことができます。

- システム・モニターのしきい値を設定します。

「オープン」を選択して「しきい値」を選択すると、各モニターのノートブックの「しきい値」ページがオープンします。詳細については、152ページの『しきい値の設定』を参照してください。

- システム・モニターの設定を変更します。

「オープン」を選択して、「設定」を選択すると、各モニターのノートブックの「設定」ページがオープンします。詳細については、156ページの『モニターの設定』を参照してください。

- 表示されるシステム・モニターを変更します。

「表示」を選択して、表示されたモニターのタイプを選択します。選択可能なモニター・タイプは次のとおりです。

- 折れ線グラフ
- リアルタイム
- テキスト表示

使用できるモニター・タイプの詳細については、157ページの『モニター表示の変更』を参照してください。

- 「メイン・メニュー」を前面に移動します。
「メイン・メニュー」を選択すると、「システム・モニター・サービス」ウィンドウが前面に移動します。
- データの記録を利用可能または利用不可にします。
「データの記録」を選択すると、システム・モニターは、このモニターの前の活動を記録し続けるようになります。このオプションを選択しないと、モニターのデータは保管されず、折れ線グラフ・モニターは使えなくなります。使用頻度の低いモニター、または長期のデータが不要なモニターでデータの記録を不可にすると、ディスク・ドライブのスペースを節約することができます。
- オンライン・ヘルプにアクセスします。
「ヘルプ」を選択すると、システム・モニターのオンライン・ヘルプを表示できます。
- モニターを移動します。
「移動」を選択すると、選択されたモニターをデスクトップ上で移動させることができます。選択されたモニターを新しい位置に移動してから、再びそのモニターをクリックしてドロップします。また、モニターの移動は、新しい位置にモニターをドラッグして行うこともできます。
- モニターのサイズを変更します。
「サイズ」を選択すると、選択したモニターのサイズを変更することができます。「サイズ」を選択したあとで、選択したモニターを表示したいサイズになるまで、マウスを使用してウィンドウの輪郭を動かします。次に、もう一度クリックしてモニターのサイズを確定します。また、モニター・ウィンドウの四辺あるいは隅をドラッグしても、モニターのサイズを変更できます。

注: モニターを小さくしすぎてモニターのテキストが完全に収まらなくなった場合、そのテキストは表示されなくなります。ただし、これによってそのモニターの機能が影響されることはありません。
- モニターを隠します。
「隠す」を選択すると、選択されたモニターが表示されなくなります。このモニターは引き続き機能し、データを収集しますが、デスクトップには表示されません。すでに隠されているモニターを再び表示させるには、「システム・モニター・サービス」ウィンドウをオープンしてから、「モニターの表示」を選択し、「表示モニターの選択」ウィンドウをオープンします。「表示モニターの選択」ウィンドウの詳細については、147ページの『「システム・モニター・サービス」ウィンドウ』を参照してください。

「システム・モニター」ノートブック

各モニターの「システム・モニター」ノートブックを使用すると、次のことができます。

- アラートを生成するしきい値を設定します。
しきい値設定の詳細については、152ページの『しきい値の設定』を参照してください。
- モニター固有の設定値を構成します。モニターの設定の構成の詳細については、156ページの『モニターの設定』を参照してください。

「システム・モニター」ノートブックをオープンするには、次のようにします。

1. モニターのコンテキスト・メニューをオープンします (マウス・ボタン 2でモニターをクリックします)。
2. 「オープン」を選択します。
3. オープンしたいノートブックのページを選択します。
 - 「しきい値」を選択すると、ノートブックの「しきい値」ページがオープンします。
 - 「設定」を選択すると、ノートブックの「設定」ページがオープンします。

しきい値の設定

「システム・モニター」ノートブックの「しきい値」ページを使用すると、そのモニターで監視されるシステム構成要素のしきい値を設定することができます。このシステム構成要素を監視した値が、構成されたしきい値の範囲外になると、システム・モニターは Netfinity アラートを生成します。また、しきい値の範囲外から正常または許容範囲の状態に戻った場合にも、アラートが生成されるよう、システム・モニターを構成することもできます。

システム・モニターは、システムにしている RAID (*Redundant Arrays of Independent Disks*) サブシステムについても、自動的に監視します。RAID サブシステムやほかの属性ベースの装置は、システム・モニターの属性モニターによって監視することができます。RAID の詳細については、160ページの『属性モニター』を参照してください。

システム・モニターは、RAID システムに問題が検出されると、自動的にアラートを生成します。RAID アラートの詳細については、185ページの付録D、『RAID アラート』を参照してください。



図 34. 「システム・モニター」ノートブックの「しきい値」ページ

システム構成要素のしきい値を設定 (または編集) するには、次のようにします。

1. 「システム・モニター」ノートブックの「しきい値」ページをオープンします。

マウス・ボタン 2 で、しきい値を設定したいモニターを選択します。モニターのポップアップ・メニューから、まず「オープン」を選択し、次に「しきい値」を選択します。

2. しきい値に名前を付けます (または、編集する「しきい値名」を選択します)。

しきい値の名前を「しきい値名」フィールドに入力して、Enter キーを押します。既存のしきい値を編集する場合は、「しきい値名」選択リストからしきい値を選択してください。

3. しきい値の持続期間を設定します。

持続期間の値を設定するには、数値を入力して測定単位 (たとえば“秒”) を選択します。これによって、モニターのしきい値を超える状態がその期間続いたときに、アラートが生成されます。

4. 「再送遅延」を設定します。

数値を入力し、測定単位 (たとえば、“秒”) を選択して、再送遅延値を作成します。これにより、アラート送信後にしきい値を超過した状態がこの期間続くと、システム・モニターが同じアラートを再送するようになります。

5. 「レベル」値を設定します。

このモニターに設定する 1 つまたは複数のしきい値を入力します。異なるしきい値は 4 つまで設定して、それぞれに異なる Netfinity アラートを生成させるようにすることができます。

- 以上をエラーとする

「以上をエラーとする」フィールドに入力されたしきい値は、アラートを生成させるための最小値です。監視対象のパラメーターがこの値に等しくなるか、または越えると、システム・モニターは、“エラー”のアラートを生成します。このしきい値は、システム構成要素に決められた最大値 (たとえば、CPU 使用率の場合は 100.0、214 メガバイトの論理ドライブの場合は 214.0) 以下で、「以上を警告とする」、「以下を警告とする」、または「以下をエラーとする」に値が設定されている場合は、その値以上である必要があります。入力した値がこれらの要件に合っていないければ、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

- 以上を警告とする

「以上を警告とする」フィールドに入力されたしきい値は、アラートを生成させるための最小値です。監視対象のパラメーターがこの値に等しくなるか、または超えると、システム・モニターは、“警告”のアラートを生成します。このしきい値は、システム構成要素に決められた最大値 (たとえば、CPU モニターの場合は 100.0) 以下、「以上をエラーとする」に値が設定されている場合はその値以下であり、また、「以下を警告とする」と、「以下をエラーとする」に値が設定されている場合は、その値以上である必要があります。入力した値がこれらの要件に合っていないければ、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

- 以下を警告とする

「以下を警告とする」フィールドに入力するしきい値は、アラートを生成するための最大値です。監視されているパラメーターがこの値以下になると、システム・モニターは、“警告”のアラートを生成します。このしきい値は、システム構成要素に決められている最大値 (たとえば、CPU モニターの場合には 100.0) 以下、「以上をエラーとする」および「以上を警告とする」に値が設定されている場合は、その値以下、また、「以下をエラーとする」に値が割り当てられている場合はその値以上である必要があります。入力した値がこれらの要件に合っていないければ、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

- 以下をエラーとする

「以下をエラーとする」フィールドに入力するしきい値は、アラートを生成するための最大値です。監視対象のパラメーターがこの値に等しくなるか、この値よりも小さくなると、システム・モニターは、“エラー”のアラートを生成します。このしきい値は、このシステム構成要素に決められている最大値 (たとえば、CPU モニターの場合は、100.0) 以下であり、「以上をエラーとする」に「以上を警告とする」および「以下を警告とする」に値が設定されている場合は、その値以下であることが必要です。入力した値がこれらの要件に合っていないければ、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

6. しきい値の「重大度」を設定します。

それぞれのしきい値ごとにデフォルトの重大度が設定されています。これらの値は、フィールドの右にあるスピン・ボタンを選択して調整ができます。

7. 「通知」を選択します (任意選択)。

しきい値が範囲を超えるたびに、システムにポップアップ・ウィンドウを表示させる場合は、「通知」を選択します。「通知」を選択しなくても、しきい値は保管されてアクティブになりますが、しきい値を超えたことを知らせるポップアップ・ウィンドウは、自動的に表示されません。

8. 「通常に戻る時にアラート」を選択します (任意選択)。

しきい値の範囲を超えていた値が許容値に戻った場合に、ユーザー指定の重大度とともにアラートを生成するよう、システム・モニターを構成するには、「通常に戻る時にアラート」を選択します。

9. 「しきい値」を保管します。

新規のしきい値を構成した場合は、「作成」を選択してそのしきい値を保管します。すでに構成されているしきい値を編集した場合は、「変更」を選択して、新しいしきい値を保管します。

モニターの設定

「システム・モニター」ノートブックの「設定」ページを使用すると、このモニター用のタイトル・バーを使用可能または使用不可にする、表示されるモニターのタイプを選択する、モニターの折れ線グラフを設定する、リアルタイム表示で使用する背景と色を設定する、モニターで使うフォントを選択する、といったことができます。

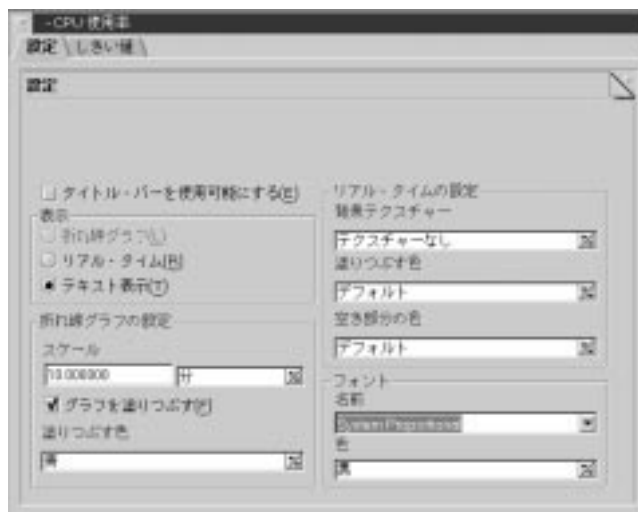


図 35. 「システム・モニター」ノートブック「設定」ページ

タイトル・バーを使用可能または使用不可にする (OS/2 の場合のみ)

このモニターのタイトル・バーをアクティブにしたい場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。このタイトル・バーには、モニターの名前（たとえば「CPU 使用率モニター」）が表示されます。タイトル・バーが不要の場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスの選択を解除します。

新しい設定を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

モニター表示の変更

表示するモニターのタイプを「表示」ボタン・グループから選択します。選択可能なモニター・タイプは次のとおりです。

- 折れ線グラフ

「折れ線グラフ」を選択すると、ユーザー指定の折れ線グラフ設定を使って折れ線グラフの長さや測定単位が決定され、システム構成要素の活動に関する“心拍図スタイル”の図が表示されるようになります。折れ線グラフ・モニターの詳細については、158ページの『折れ線グラフの設定値の構成』を参照してください。

注： 「データの記録」オプション（モニターのポップアップ・メニュー内）を使用不可にすると、折れ線グラフ・モニターは使えません。

- リアルタイム

「リアルタイム」を選択すると、システムの構成要素の現在の状況がグラフィック表示されます。表示されるリアルタイム・モニターは、監視対象となるシステム構成要素によって異なります。たとえば、CPU モニターでは、CPU 使用率が速度計スタイルのリアルタイム・モニターによって示され、ハード・ディスク・ドライブの使用スペース・モニターでは、そのディスク・ドライブの使用スペースがどの程度いっぱいかが円柱で示されます。

- テキスト表示

「テキスト表示」を選択すると、システム構成要素の現在の活動が、グラフィック表示のない文字だけで表示されます。

新しい設定を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

折れ線グラフの設定値の構成

「折れ線グラフの設定」フィールド・グループで選択できる項目を使って、構成要素の折れ線グラフ・モニターを構成します。このフィールド・グループでの選択で、次のことができます。

- 折れ線グラフのスケールを設定します。

「スケール」フィールドを使用して、このモニターの折れ線グラフを表示する際にグラフで扱う時間の長さを指定します。左の「スケール」フィールドに数値を入力して、右の「スケール」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、構成要素の活動をグラフ化する際に折れ線グラフで採用する時間単位を選択します。選択できる時間の単位は、次のとおりです。

- 秒
- 分
- 時
- 日
- 週

- 折れ線グラフの塗りつぶしを使用可能または使用不可にします。

このモニターの折れ線グラフを特定の色で塗りつぶす場合は、「グラフを塗りつぶす」を選択します。「グラフを塗りつぶす」を選択しない場合、折れ線グラフは、黒の背景に白の線で表示されます。「グラフを塗りつぶす」を選択した場合は、そのあとで、「塗りつぶす色」フィールドから、その折れ線グラフを塗りつぶすために使用する色を選択することができます。

- 折れ線グラフを塗りつぶす色を選択します。

「塗りつぶす色」フィールドの右のスピン・ボタンで、折れ線グラフを塗りつぶす色を選択します。

新しい設定を保管する場合は、左上隅をダブルクリックして、ノートブックをクローズします。

リアルタイム設定の構成

「リアルタイムの設定」フィールド・グループで選択できる項目を使用して、構成要素のリアルタイム・モニターを構成します。このフィールド・グループでの選択で、次のことができます。

- 「背景テキストチャター」を選択します (OS/2 の場合のみ)。

「背景テキストチャター」フィールドの右側にあるスピン・ボタンで、モニターで背景テキストチャターとして使うビットマップを選択します。

- 「塗りつぶす色」を選択します。

「塗りつぶす色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンで、リアルタイム・モニターの“塗りつぶし”部分の色を選択します。

- 「空き部分の色」を選択します。

「空き部分の色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンで、リアルタイム・モニターの“空き”部分の色を選択します。

新規の設定を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

フォント設定の構成

「フォント」フィールド・グループで選択できる項目を使用して、このモニターの表示内のすべてのテキストに使用するフォントとフォント色を選択します。このフィールド・グループでの選択で、次のことができます。

- フォントを選択します。

フォントの「名前」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、この構成要素の各表示に使用するフォントを選択します。

- フォントの色を選択します。 (OS/2 の場合のみ)

「色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンで、この構成要素の各表示のテキストに使うフォントの色を選択します。

新規の設定を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

属性モニター

属性モニターは、数値では意味がないものを監視するのに使用します。たとえば、RAID デバイスの現在の状況は、数値ではなく、オンライン、オフライン、または作動不能などの記述語で表現されます。属性モニターを使用すると、このような装置の現在の状況を表示し、また状態の変化に基づいたしきい値を割り当てることができます。属性モニターは、各種の設定値を割り当てることができます。

注: 属性モニターは、185ページの付録D、『RAID アラート』に説明されている RAID アラートに似てはいますが、同じものではありません。RAID アラートは、RAID デバイスがその状態を変更すると、Netfinity によって自動的に生成されますが、ユーザーが RAID デバイスの現在の状態を簡単に画面で確認できるような方法はありません。属性モニターの場合、ユーザーは、RAID 装置の現在の状況を画面で確認でき、さらに、必要に応じて、それらのデバイスに対し、追加のしきい値を設定できます。

属性モニターのしきい値

属性モニターのしきい値は、「属性モニター」ノートブックの「しきい値」ページで設定されます。このノートブックをオープンするには、マウス・ボタン 2 で、しきい値を設定したいモニターをクリックし、そのモニターのコンテキスト・メニューをオープンします。そこで、「オープン」を選択してから、「しきい値」を選択します。

属性モニターのしきい値を設定するには、次のようにします。

1. 監視対象とする属性を選択します。

各属性モニターには、監視できる属性を 1 つまたは複数指定できます。属性の名前は、デバイスのタイプによって決めます。「モニターする属性」フィールドから、監視対象となる属性の名前を選択します。

2. しきい値に名前を付けます。

「しきい値名」フィールドにこのしきい値の名前を入力してから、**Enter** キーを押します。

3. しきい値の持続期間を設定します。

持続期間の値を設定するには、数値を入力して測定単位 (たとえば“秒”) を選択します。この値によって、監視対象の属性の状態が変化してからアラートが生成されるまでの時間が設定されます。

4. 「再送遅延」を設定します。

数値を入力し、測定単位 (たとえば、“秒”) を選択して、再送遅延値を作成します。この値は、システム・モニターがアラートを送信した後、属性の状態が変わらない場合に、同じアラートを再送するまでの時間を指定するものです。

5. アラートの状態を選択します。

「状態」フィールドから、監視対象の属性から異状の報告を受けた場合にアラートを生成する状態の名前を選択します。

6. 重大度値を選択します。

指定された状態が報告されたときに生成されるアラートの重大度を選択します。

7. アプリケーション・アラート・タイプを指定します。

アプリケーション・アラート・タイプ は、生成されたアラートに割り当てられる 4 桁の数値です。これは、アラート・マネージャーがアラート・アクションをとる際、ほかのアラートの識別に使われます。「アプリケーション・アラート・タイプ」フィールドに、このアラートに割り当てる 4 桁の数値を入力します。

注: アプリケーション・アラート・タイプは、16 進数値で、最大 4 桁です。

8. アラート・タイプを選択します。

アラート・タイプは、生成されるアラートに割り当てられる記述語です。これは、アラート・マネージャーがアラート・アクション応答で、アラートを識別するために使われるほか、アラート生成の原因となった問題の性質を記述する上で役に立ちます。「アラート・タイプ」リストから、アラートに付けるアラート・タイプを選択します。

9. 「通知」を選択します (任意選択)。

アラート状態になったときに、このシステムにポップアップ・ウィンドウを表示したい場合は、「通知」を選択します。「通知」を選択しなくても、しきい値は保管されてアクティブになりますが、アラート状態になったことを知らせるポップアップ・ウィンドウは自動的に表示されません。

10. 「作成」を選択して、これらのしきい値を保管します。すでに構成されているしきい値を編集した場合は、「変更」を選択して、新しいしきい値を保管します。

属性モニターの設定

属性モニターの設定値は、「属性モニター」ノートブックの「設定」ページから設定されます。このノートブックをオープンするには、マウス・ボタン 2 を使用して、しきい値を設定したいモニターをクリックし、そのモニターのコンテキスト・メニューをオープンします。「オープン」を選択してから、「設定」を選択します。

属性モニターの「設定」ノートブックから、次のことができます。

- タイトル・バーを使用可能または使用不可にする (OS/2 のみ)

このモニターのタイトル・バーをアクティブにしたい場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。このタイトル・バーには、モニターの名前が表示されます。タイトル・バーが不要の場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスの選択を解除します。

- ビットマップを使用可能または使用不可にする (OS/2 のみ)

「ビットマップを使用可能にする」チェック・ボックスを選択すると、監視対象の各属性の前に小さなアイコンが表示されます。このアイコンは、属性の現在の状態を示します。

- モニター表示を変更します。

属性モニターでは、次の表示を選択できます。

- 属性履歴

「属性履歴」の表示には、指定された期間に、属性モニターによって報告された状態が表示されます。

- リアルタイム

「リアルタイム」の表示には、監視対象の装置の現在の状態だけが表示されます。

- モニターのフォントを変更します。

「フォント」フィールド・グループで選択できる項目で、このモニターのすべての表示、すべてのテキストに使用するフォントとフォント色を選択します。このフィールド・グループでの選択で、次のことができます。

- フォントの選択

「名前」フィールドの右側にあるスピン・ボタンで、この構成要素の各表示に使用するフォントを選択します。

- フォントの色の選択 (OS/2 の場合のみ)

「色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンで、この構成要素のテキストで使うフォントの色を選択します。

新しい設定を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

IBM PC サーバー 720 のモニター

Netfinity には、IBM PC サーバー 720 用に特別に設計された追加モニターが含まれています。Netfinity が IBM PC サーバー 720 にインストールされている場合、次をトラックできる追加モニターが使用できます。

- 電源装置の温度 (摂氏または華氏)
- システムの温度 (摂氏または華氏)
- プレーナーの温度 (摂氏または華氏)
- 電源装置の電圧 (+5V、+12V、-12V、および +3.3V)

第14章 システム区画アクセス

Netfinity システム区画アクセスを使用すると、IBM パーソナル・コンピューターのシステム区画ファイルの処理を大幅に簡素化できます。このサービスには、次の機能を備えています。

- 幅広いファイル・レベル操作
- 初期マシン・ロード (IML) イメージの更新
- アダプター記述プログラム (ADP)、アダプター記述ファイル (ADF)、および診断 (DGS) の更新
- 構成プログラム更新の設定
- システム区画の不用意な削除を避けるためのユーザー確認による安全保護

システム区画は、いくつかの IBM システムのハード・ディスク・ドライブにある一区画で、システムの電源オン自己試験 (POST)、基本入出力システム (BIOS) やその他のシステム・ユーティリティー・プログラムが格納されています。システム区画をもつ IBM システムをお使いでない場合は、システム区画アクセス・サービスにアクセスできないし、これを使う必要もありません。

注: システム区画アクセスでは、*ESDI (Enhanced Small Device Interface)* システム上のシステム区画にはアクセスできず、管理することもできません。

Netfinity システム区画アクセスは、システム区画のさまざまなファイル操作アクションを提供します。使用可能なアクションは、次のとおりです。

- 区画からコピー
- 区画へコピー
- ディレクトリーの削除
- ディレクトリー名の変更
- ファイルの削除
- ファイル名の変更
- 区画のバックアップ
- 区画の復元
- 区画の削除
- ディレクトリーの作成
- 終了

選択できる各アクションについては、次に詳しく説明します。



図 36. システム区画アクセス・サービス

区画からコピー

「区画からコピー」オプションを使用すると、システム区画からローカル・ドライブの選択されたディレクトリーに特定ファイルをコピーすることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドで選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから該当するディレクトリーを選択して、ファイルのコピー元となるシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリー内のすべてのファイルが、システム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. システム区画の「ファイル名」フィールドで、コピーしたいファイルを選択します。
4. そのファイルのコピー先ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側の矢印を選択して、使用可能なすべてのドライブのリストを表示します。その中から、コピー先となるドライブを選択します。
5. そのファイルの宛先ディレクトリーを選択します。選択された論理ドライブに存在するすべてのディレクトリーが論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。その中から 1 つを選択します。これによって、このディレクトリーにあるすべてのファイルが、論理ドライブの「ファイル名」フィールドに表示されます。
6. 「区画からコピー」を選択して、選択したシステム区画ファイルを、選択した宛先のディレクトリーにコピーします。

区画へコピー

「区画へコピー」オプションを使用すると、ローカル・ドライブからシステム区画に指定したファイルをコピーすることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから、ファイルのコピー先となるシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリー内のすべてのファイルが、システム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. そのファイルのコピー元ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側の矢印を選択して、使用可能なすべてのドライブのリストを表示します。コピーのドライブを選択します。
4. そのファイルのコピー元ディレクトリーを選択します。選択された論理ドライブに存在するすべてのディレクトリーが論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。これらのディレクトリーのうちの1つを選択します。これによって、このディレクトリーにあるすべてのファイルが、論理ドライブの「ファイル名」フィールドに表示されます。
5. 論理ドライブの「ファイル」フィールドから、コピーしたいファイルを選択します。
6. 「区画へコピー」を選択して、選択したファイルをシステム区画のコピー先ディレクトリーにコピーします。

ディレクトリーの削除

「ディレクトリーの削除」オプションを使用すると、システム区画からディレクトリーを削除することができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドで、削除したいシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーをオープンするには、ディレクトリーをダブルクリックします。
3. 「ディレクトリーの削除」を選択して、選択したディレクトリーをユーザーのシステムから削除します。削除するにはディレクトリーが不用意に削除されないように、十分確認する必要があります。

注: Netfinity システム区画アクセスがディレクトリーを削除できるようにするには、そのディレクトリーを空にしておく必要があります。システム区画ファイルの削除については、170ページの『ファイルの削除』を参照してください。

ディレクトリー名の変更

「ディレクトリー名の変更」オプションを使用すると、システム区画内のディレクトリーに新しい名前を付けることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドで選択します。
2. 名前を変更したいシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーをオープンするにはディレクトリー名をダブルクリックします。
3. 「ディレクトリー名の変更」を選択します。システム区画アクセスによって、選択したディレクトリーの新しい名前を入力するよう要求されます。
4. 新しいディレクトリー名を入力して、**Enter** キーを押します。システム区画アクセスによって、ディレクトリーの名前が変更されます。

ファイルの削除

「ファイルの削除」オプションを使用すると、システム区画内からファイルを削除することができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドで選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドで、削除したいファイルが入っているシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリー内のすべてのファイルが、システム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. システム区画の「ファイル名」フィールドで、削除したいファイルを選択します。
4. 「ファイルの削除」を選択します。システム区画アクセスが、システム区画アクセスによって削除されます。

ファイル名を変更

「ファイル名の変更」オプションを使用すると、システム区画のファイルの名前を変更できます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドで選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから名前を変更したいファイルが入っているシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリー内のすべてのファイルが、システム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. システム区画の「ファイル名」フィールドから名前を変更したいファイルを選択します。
4. 「ファイル名の変更」を選択します。システム区画アクセスは、そのファイルをどのような名前に変更したいのかを尋ねてきます。ファイルの新しい名前を入力して、**Enter** キーを押します。これで、ファイルの名前が変更されます。

区画の削除

重要:

システム区画を必要とするシステムでシステム区画を削除すると、システムが操作不能になります。システム区画の削除後、システムが正しく動作するかどうかはわからない場合は、「区画の削除」オプションを使用しないでください。

選択した論理ドライブから選択したシステム区画（「システム区画」フィールドに表示されている）を除去したい場合は、「区画の削除」オプションを使用します。このオプションを選択すると、システム区画アクセスが、その区画を削除してよいか確認してきます。続行する場合は、「了解」を選択します。選択したシステム区画（およびその区画内のすべてのディレクトリーとファイル）が削除されます。

区画のバックアップ

「区画のバックアップ」オプションを使用すると、システムのシステム区画を任意の論理ドライブ内のファイルにコピーすることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドで選択します。
2. システム区画のバックアップ・ファイルを書き込む宛先ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側にある矢印を選択すると、使用できるすべての論理ドライブが表示されるので、適切なドライブを 1 台選択します。
3. 宛先ディレクトリーを選択します。選択した論理ドライブ内のディレクトリーが、論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。
4. 「区画のバックアップ」を選択して、選択したシステム区画のファイルを、宛先ドライブのディレクトリーに書き込みます。

区画の復元

「区画の復元」オプションを使用すると、「区画のバックアップ」機能で作成したバックアップ・ディスク、またはファイルを使用して、システム区画を復元することができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画のバックアップ・ファイルが入っているコピー元ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側にある矢印を選択すると、使用できるすべての論理ドライブが表示されるので、適切なドライブを 1 台選択します。
2. バックアップ・ファイルが入っているコピー元ディレクトリーを選択します。選択された論理ドライブに存在するすべてのディレクトリーが論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。その中から 1 つを選択します。これによって、このディレクトリーにあるすべてのファイルが、論理ドライブの「ファイル名」フィールドに表示されます。使用したいバックアップ・ファイルを論理ドライブの「ファイル名」フィールドから選択します。
3. 「区画の復元」を選択して、バックアップ・ファイルをシステム区画にコピーします。

ディレクトリーの作成

選択したシステム区画（「システム区画」フィールドに表示されている）に、ディレクトリーを追加したい場合には、「ディレクトリーの作成」オプションを選択します。このオプションを選択すると、システム区画アクセスが、新しいディレクトリーの名前を指定するように指示します。

終了

システム区画アクセスを終了するには、「終了」を選択します。

第15章 システム・プロファイル

システム・プロファイルを使用すると、他の方法では容易に入手しにくいシステム固有の、またはユーザー固有のさまざまな情報のリポジトリを簡単に編成することができます。「システム・プロファイル」サービスには、データの編成と入力を簡単に行うことができるようにするための、多くの定義済みフィールドが用意されています。また、「システム・プロファイル」サービスには、各ユーザーの必要に合わせてシステム・プロファイルをカスタマイズできるようにするための、多くのユーザー定義可能フィールドも含まれています。

システム・プロファイルのデータは、テキスト・ファイルに保管できます。システム情報ツールが持つ高度のハードウェア情報収集機能と、システム・プロファイルが持つ、システムに固有のデータ・フィールドとユーザーに固有のデータ・フィールドを幅広く選択できる機能を組み合わせることによって、極めて柔軟性のある、有用なシステム・インベントリ機能とシステム情報機能が得られます。

注: システム・プロファイルは、収集されたデータを Netfinity データベースへエクスポートできます。ただし、データベースにエクスポートできるのは、Netfinity マネージャーによってだけです。Netfinity クライアントサービス・プログラムが稼働しているシステムでは、データベース・エクスポート機能をローカルに使用することはできません。



図 37. 「システム・プロファイル・サービス」のウィンドウ

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウは 5 つのセクションからなります。各セクションは、2 ページ以上からなり、特定タイプのシステム固有情報、またはユーザー固有情報に使用されます。各セクションは、固有のタブで識別されます。これらのセクションは、次の 5 つがあります。

- システム

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「システム」セクションは、ご使用のシステム、ディスプレイ、プリンター、およびモデムに固有の情報を編成するための定義済みフィールドが設けられています。

- ユーザー

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「ユーザー」セクションには、システムの主要なユーザーの名前、電話番号、自宅住所、緊急連絡先などの情報を編成するための、定義済みフィールドが設けられています。

- 位置

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「位置」セクションには、システムの物理的な位置を示す部屋番号、建物番号、サイト名、市町村名、国名などの情報を編成するための、定義済みフィールドが設けられています。

- 連絡先

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「連絡先」セクションには、システムの主要なユーザーに連絡するための情報（電話番号、ファックス番号、E-Mail アドレスなど）を編成し、そのユーザーに関連のある他の人についての情報（たとえば上司、秘書など）を編成するための、定義済みフィールドが設けられています。

- その他

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「その他」セクションには、ニックネームや誕生日などの追加情報を入れておくための、未定義のフィールドが設けられています。

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウにデータを入力し、保管するには、次のようにします。

1. 保管したいデータを、該当するフィールドに入力します。

フィールドを選択して、該当のデータを入力します。 ページを変更するには、ページの右下隅の小さな矢印を選択します（右方向の矢印を選択すると 1 ページ進み、左方向の矢印を選択すると 1 ページ戻ります）。セクションを変更するには、ノートブックの右側にあるセクションのタブを選択します。設けられているフィールドのすべてに入力する必要はありません。

2. 「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウをクローズします。

情報の入力が終わってから、「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの左上隅をダブルクリックすると、情報を保管して、「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウがクローズします。

現行ページのフィールドを、最後に保管された値にリセットしたい場合は、「やり直し」を選択します。「やり直し」を選択しても、サービス・ウィンドウのほかのページには影響を与えません。

変更内容を保管しないでサービス・ウィンドウをクローズする場合は、「オプション」プルダウン・メニューで、「保管せずに閉じる」を選択します。

「オプション」プルダウン・メニューで選択できるアクションには、ほかに次のものがあります。

- 最新表示

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウで表示される情報を更新するには、「最新表示」を選択します。サービス・ウィンドウを表示しているときに、その内容が他のユーザーによって変更されている可能性があります。「最新表示」を選択すると、「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウのフィールドに表示されているデータが更新されます。

- ファイルに保管

「ファイルに保管」を選択すると、「システム・プロファイル」サービスに入っているすべての情報がテキスト・ファイルに印刷 (保管) されます。

Netfinity クライアントサービス・プログラムの構成にあたっては、3つのインストール構成のいずれか1つを選択することができます。これらの構成のそれぞれで、システム上に特定のグループのNetfinity サービス・プログラムがインストールされます。

スタンドアロン機能

このインストール構成では、次の基本プログラムとインターフェースがインストールされます。

- Netfinity サービス・マネージャー
- システム情報ツール
- システム・プロファイル
- システム・モニター
- アラート・マネージャー
- クリティカル・ファイル・モニター
- ソフトウェア・インベントリー

また、システムがサポートしていれば、次のサービス・プログラムもインストールされます。

- ECC メモリー・セットアップ (ECC メモリーが必要)
- システム区画アクセス (システム区画が必要)
- 事前障害分析 (PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブが必要)
- RAID マネージャー (RAID アダプターが必要)
- DMI ブラウザー (DMI サービス・レイヤーが必要)

パッシブ・クライアント機能

このインストール構成では、次のものがインストールされます。

- Netfinity サービス・マネージャー
- ネットワーク・コミュニケーション・ドライバー
- アラート・マネージャー
- 安全保護マネージャー
- シリアル接続制御
- システムでサポートされる Netfinity サービスに関するすべての基本プログラム

注: パッシブ・クライアント機能は、Netfinity リモート・システム・マネージャーがパッシブ・クライアント・システムをリモートからアクセスして管理できるように特別に設計されています。アラート・マネージャー、安全保護マネージャーおよびシリアル接続制御を除き、Netfinity クライアントサービスへのローカル・アクセスは使用できません。

アクティブ・クライアント機能

このインストール構成では、リモートからシステムを管理するために、次のものがインストールされます。

- Netfinity サービス・マネージャー
- ネットワーク・コミュニケーション・ドライバー
- アラート・マネージャー用の基本プログラムとユーザー・インターフェース
- ご使用のシステムでサポートされる Netfinity サービスのすべての基本プログラム

ローカル・システム管理用に、次のプログラムがインストールされます。

- Netfinity サービス・マネージャー
- システム情報ツール
- システム・プロファイル
- システム・モニター
- アラート・マネージャー
- 安全保護マネージャー
- シリアル接続制御
- クリティカル・ファイル・モニター
- ソフトウェア・インベントリー

また、システムがサポートしていれば、次のサービス・プログラムもインストールされます。

- ECC メモリー・セットアップ (ECC メモリーが必要)
- システム区画アクセス (システム区画が必要)
- 事前障害分析 (PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブが必要)
- RAID マネージャー (RAID アダプターが必要)
- DMI ブラウザー (DMI サービス・レイヤーが必要)

付録B. サポートされる PFA ハード・ディスク・ドライブ

事前障害分析 (PFA) は、次の PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブをサポートします。事前障害分析サービスで監視し、管理できるハード・ディスク・ドライブは、次に示すものだけです。Netfinity サービス・プログラムのインストール時に、これらのドライブのどれかがシステムになれば、事前障害分析サービスはインストールされません。

- IBM 0664 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM 0663 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM 0662 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM DPES-31080 型ハード・ディスク・ドライブ (製品改訂版 531Q のみ)
- IBM DFHS 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM DFMS 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM XP31 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM XP32 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM XP34 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM DORS-3216DW 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM FIREBALL12805 型ハード・ディスク・ドライブ (製品改訂版 630N またはそれ以降)

OS/2 版または Windows NT 版の Netfinity マネージャーおよびクライアントサービス・プログラムでは、上記のハード・ディスク・ドライブに加えて、自己モニター分析報告技術 (SMART) 標準に適合する PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブもサポートします。SMART 準拠のハード・ディスク・ドライブが使用できるのは、OS/2 版または Windows NT 版の Netfinity マネージャーまたは Netfinity クライアント・サービス・プログラムが稼働しているシステムの場合だけです。

付録C. サポートされる RAID アダプター

サポートされる RAID アダプターは、次のとおりです。

- IBM RAID アダプター
- IBM SCSI-2 Fast/Wide-Streaming RAID アダプター/A
- IBM SCSI-2 Fast PCI-Bus RAID アダプター
- IBM PC ServeRAID アダプター
- IBM PC ServeRAID PCI アダプター
- IBM PC ServeRAID PCI II アダプター

RAID (*Redundant Array of Independent Disks*) アダプターは、複数の物理ディスク・ドライブに接続し、8 台までのシステム・ドライブ (つまり、論理ドライブ) として扱うことができます。RAID システムが使われている場合は、システム・モニター・サービスはモニターを表示しませんが、RAID アダプターに接続されているすべてのディスク・ドライブの状況を監視して、それらがオンラインで正常に機能しているかどうかを確認します。

物理ドライブかシステム・ドライブが、アクティブまたは非アクティブになると、RAID アダプターはそれを検出します。これを、ドライブの状況と呼びます。

システム・ドライブは、次の 3 つの状況のどれかを報告します。

- オンライン
- クリティカル (限界)
- オフライン

注: クリティカルな状況は、RAID レベル 1、2、3、または 4 のシステム・ディスク・ドライブだけが報告します。RAID レベル 0 のシステム・ディスク・ドライブは、クリティカル状況は報告できません。RAID レベル 0 のディスク・ドライブは、すべてオンラインまたはオフラインのどれかになります。RAID レベルの詳細については、RAID アダプターの資料を参照してください。

物理ドライブについては、次の 3 つの状況のどれかが報告されます。

- オンライン
- スタンバイ
- 停止

RAID アラートは、RAID ディスク・ドライブの状況が変更されたときにだけ生成されます。状況が未変更のままである場合には、追加のアラートが生成されることはありません。

システム・モニターによって生成されるすべての RAID アラートのテキストは、すべて次の形式です。

アラート: RAID デバイス状況 *状況* 属性 *タイプ*と
ロケーション (サブシステムの) は
状況 に設定されています。

状況 とは、ドライブによって報告された状況のことで、*タイプ*と*ロケーション*は、RAID ディスク・ドライブのタイプ (物理またはシステム) と、その指定位置 (システム・ドライブ番号または物理ベイ番号)、*サブシステム* は、この状況の変化を報告している RAID サブシステムの名前のことです。

各 RAID アラートに固有の情報は、次のとおりです。

RAID 物理ディスク・ドライブ状況がオンラインです

説明	物理ドライブの状況がスタンバイまたは停止からオンラインに変わったときに生成されます。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

RAID 物理ディスク・ドライブ状況がスタンバイです

説明	物理ドライブの状況がオンラインまたは停止からスタンバイに変わったときに生成されます。
アラート・タイプ	エラー
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

RAID 物理ディスク・ドライブ状況が停止です

説明	物理ドライブの状況がオンラインまたはスタンバイから停止に変わったときに生成されます。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオンラインです

説明	システム・ドライブの状況がクリティカルまたはオフラインからオンラインに変わったときに生成されません。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

RAID システム・ディスク・ドライブ状況がクリティカルです

説明	システム・ドライブの状況がオンラインまたはオフラインからクリティカルに変わったときに生成されません。
アラート・タイプ	警告
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオフラインです

説明	システム・ドライブの状況がクリティカルまたはオンラインからオフラインに変わったときに生成されま す。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

注: 1 台の RAID 物理ディスク・ドライブがアラート・メッセージを生成すると、通常その物理ディスク・ドライブに関連するすべてのシステム・ドライブから、アラート・メッセージがユーザーに送られます。

付録E. Netfinity のコマンドライン操作

Netfinity のサービスのうちの幾つかは、システム・コマンドラインからアクセスすることができます。ここでは、コマンドラインからサービスにアクセスする方法、およびそれらの使用に関連するさまざまなパラメーターについて説明します。

アラート・マネージャーのコマンドライン操作

アラート・マネージャー・サービスは、コマンドライン操作がありません。ただし、ユーザーのシステムからアラートを生成するためのプログラムとして GENALERT.EXE があります。このアラートは、次に説明する幾つかのユーザー指定パラメーターを指定することができます。

注: GENALERT で生成したアラートを、「APPC (拡張プログラム間通信) を介してアラートをホストに転送」アラート・アクションによってホスト・システムに転送する場合は、191ページの『GENALERT アラート記述を NMVT.INI ファイルに追加する』を参照してください。

GENALERT.EXE のコマンドのコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
GENALERT /T:"text" /APP:id_name  
/SEV:0..7 /TYPE:sssttt /ATYPE:hexnum
```

コマンドライン・パラメーターは、次のとおりです。

- | | |
|---------------------|--|
| /T:"text" | アラートを記述するテキスト・メッセージを定義します。引用符が必要です。 |
| /APP:id_name | アラートのアプリケーション ID を定義します (1 ~ 8 文字)。 |
| /SEV:0...7 | アラートの優先順位、つまり重大度 (0 = 最も優先順位が高い、7 = 最も優先順位が低い) を定義します。 |

/TYPE:sssttt アラートの標準タイプを定義します。

sss フィールドには、次のようなアラートの ID を記述します。

- UNK - 不明
- SYS - システム
- DSK - ディスクまたは DASD
- NET - ネットワーク
- OS_ - オペレーティング・システム
- APP - アプリケーション
- DEV - 装置
- SEC - 安全保護

ttt フィールドには、次のようなアラートのクラスを記述します。

- UNK - 不明
- FLT - 障害
- ERR - エラー
- WRN - 警告
- INF - 通知

/ATYPE:hexnum アプリケーションに特定のアラート・タイプを16進値で定義します。値は 0000 ~ FFFF の範囲です。

GENALERT アラート記述を NMVT.INI ファイルに追加する

NMVT.INI ファイルは Netfinity ディレクトリーにあり、このファイルには、標準 Netfinity アラートを NMVT 形式のアラートにマップするアラート記述が入っています。こうしてマップされると、NMVT 形式のアラートは、拡張プログラム間通信機能 (APPC) および “APPC を介してアラートをホストに転送” アラート・アクションを使用して、ホスト・システムに正しく渡すことができます。ただし、GENALERT コマンドを使用して生成されたアラートは、ユーザーによって構成および定義されるため、このファイルには組み込まれません。その結果、GENALERT アラートに関して NMVT.INI ファイルにエントリーを追加しておかないと、“APPC を介してアラートをホストに転送” アラート・アクションは、NMVT の作成に必要なデータ (アラート記述、障害の原因、推奨アクションなどがある) が得られず、この情報をホストに転送することができません。

GENALERT コマンドで作成されたアラート情報を、システムからホストに転送することができるようにするためには、アラートを生成するシステムの Netfinity ディレクトリーの中にある NMVT.INI ファイルに、エントリーを追加する必要があります。このエントリーは、NMVT.INI ファイルの他のすべてのエントリーと同様に、Netfinity アラートに関する情報 (アプリケーション名、アラート・タイプ、およびアラートの重大度など) と、ホストに転送する NMVT に関する構成データで構成されている必要があります。

たとえば、次に示す GENALERT コマンドでアラートを生成します。

```
GENALERT /T:"Virus Detected" /APP:ANTVIR /SEV:0  
/TYPE:SECWRN /ATYPE:000C
```

このアラートがホストに正しく転送されるようにするには、NMVT.INI ファイルを編集し、Netfinity アラート情報を NMVT 固有の情報に変換するためのエントリーを特別に作成しておかなければなりません。次に例を示します。

```
APP:ANTVIR TYPE:SECWRN SEV:0 ATYPE:000C GTYPE:01  
DESC:C007 CAUSE:6700 USER:7199:1026 FAIL:0501:18003103
```

このエントリーが NMVT.INI ファイルに追加されると、Alert マネージャーは、“APPC を介してアラートをホストに転送” アラート・アクションによってこのアラートを NMVT の形式のアラートに変換して、ホストに転送できます。

システム情報ツールのコマンドライン操作

システム情報ツールはコマンドラインから始動することができ、5つのコマンドライン・パラメーターをサポートします。システム情報ツールのコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
SINFG30 /P:filename /H:filename  
/F:history filename /NOLOGO /B
```

コマンドライン・パラメーターは、次のとおりです。

/P: filename このパラメーターは、プログラムによって収集されたすべての情報に関する報告書を生成するために使用されます。ファイル名の代わりに LPT1 のような論理プリンター名を指定すると、報告書がプリンターに送られます。情報が収集されている間はプログラムのロゴ画面が表示され、報告書が生成されるとプログラムは終了します。

/H: filename このパラメーターは、プログラムによって検出されたすべての情報、および報告書が生成された日時を含む、バイナリー履歴ファイルを生成するために使用されます。作成したファイルは、**/F** コマンドライン・パラメーターを使用し、入力ソースとして使用することができます。情報が収集されている間はプログラムのロゴ画面が表示され、ファイルが生成されるとプログラムは終了します。

/F: history filename
このパラメーターを使用すると、プログラムを実行している物理システムではなく、以前に生成された履歴ファイルが、情報収集のソースとして使用されます。このオプションを使用することによって、別のシステムから得られた履歴ファイルを見ることができます。

/NOLOGO プログラム・ロゴを表示されないようにします。このパラメーターは、他のどのパラメーターとも組み合わせて使用できます。

/B このパラメーターを使用すると、プログラムが始動されている間は、すべての警告および通知メッセージがバイパスされます。これは、不在システム始動の場合に使用することができます。このパラメーターは、他のどのパラメーターとも組み合わせて使用できません。

ECC メモリー・セットアップのコマンドライン操作

ECCMEM.EXE を使用すると、ECC メモリー・セットアップのすべての機能に、OS/2 のコマンドラインからアクセスできます。

注: ECCMEM.EXE が使用できるのは、OS/2 が稼働しているシステムで使用する場合だけです。

ECCMEM.EXE のコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
ECCMEM /INIT /SCRUB:ON or OFF /THRESH:ON or OFF  
/COUNT:ON or OFF /QUIET /COUNTVAL:number  
/THRESHVAL:number
```

コマンドライン・パラメーターは、次のとおりです。

/INIT	ECC メモリーを、保管されている設定値に初期設定します。
/SCRUBON or OFF¹	シングル・ビット・エラー修正を使用可能または使用不可にします。
/THRESH:ON or OFF¹	シングル・ビット・エラーしきい値マスク不能割込み (NMI) を使用可能または使用不可にします。
/COUNT:ON or OFF¹	シングル・ビット・エラー・カウントを使用可能または使用不可にします。
/QUIET	ECCMEM.EXE は、テキスト出力を生成しなくなります。
/COUNTVAL:number	シングル・ビット・エラー・カウントを指定された値に設定します。
/THRESHVAL:number¹	シングル・ビット・エラーしきい値を指定された値に設定します。

¹ これらのオプションは、保管されている設定値を指定した値に更新します。システムを再始動すると、保管された設定値で ECC メモリーを構成します。

サービスの基本プログラムをリモートから始動または停止させる

Netfinity の STRTBASE.EXE コマンドライン・プログラムと STOPBASE.EXE コマンド行プログラムを使用すると、ほとんどの Netfinity サービスの基本プログラムをリモートから始動または停止できます。

注: STRTBASE.EXE と STOPBASE.EXE が始動または停止できるのは、個々の Netfinity サービスの基本プログラムだけです。STRTBASE.EXE と STOPBASE.EXE は、Netfinity ネットワーク・インターフェース、Netfinity サポート・プログラムをリモートから始動、または停止させることもできませんし、Netfinity ネットワーク・インターフェースまたは Netfinity サポート・プログラムによって始動された基本プログラムをリモートから始動、または停止させることもできません。(そのような基本プログラムは、アラート・マネージャー、電源オン・エラー検出、システム・モニター、シリアル接続制御です。) STRTBASE.EXE と STOPBASE.EXE を正常に機能させるには、これらによって始動または停止できるプログラムのどれか 1 つが、リモート・システムで実行されていない必要があります。

サービス基本プログラムをリモートから始動させる

ご使用のシステムから、リモート・システムの Netfinity サービスの基本プログラムを始動させるには、STRTBASE.EXE を使用します。STRTBASE.EXE のコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
STRTBASE /N:networktype::networkaddress  
/BASE:servicebase [/BATCH] [/?]
```

変数	定義
<i>networktype</i>	メッセージの送信に使われるプロトコル名です。(例：TCPIP)
<i>networkaddress</i>	始動させる基本プログラムがあるリモート・システムの、プロトコル固有のアドレスです。(例：user.network.com)
<i>servicebase</i>	リモート・システムで始動させるサービス基本プログラムのサービス結合名です。このコマンドで使われるサービスの結合名については、197ページの『サービスの結合名』を参照してください。
BATCH	プログラムは、何も出力せずに実行されます。STRTBASE.EXE を BATCH モードで実行すると、リモート・システムの名前が入っている SYSNAME.OUT という名前のファイルが、STRTBASE.EXE がある同一ディレクトリーに作成されます。
?	コマンドラインについてのヘルプを表示します。

サービス基本プログラムをリモートから停止させる

ご使用のシステムから、リモート・システムの Netfinity サービスの基本プログラムを停止させるには、STOPBASE.EXE を使用します。STOPBASE.EXE のコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
STOPBASE /N:networktype::networkaddress  
/BASE:servicebase [/BATCH] [/?]
```

変数	定義
<i>networktype</i>	メッセージの送信に使われるプロトコル名です。(例：TCPIP)
<i>networkaddress</i>	停止させたい基本プログラムがあるリモート・システムの、プロトコル固有のアドレスです。(例：user.network.com)
<i>servicebase</i>	リモート・システムで停止させるサービス基本プログラムのサービス結合名です。このコマンドで使われるサービスの結合名については、197ページの『サービスの結合名』を参照してください。
BATCH	プログラムは、何も出力せずに実行されます。STOPBASE.EXE を BATCH モードで実行すると、リモート・システムの名前が入っている SYSNAME.OUT という名前のファイルが、STOPBASE.EXE があるディレクトリーに作成されます。
?	コマンドラインについてのヘルプを表示します。

サービスの結合名

STRTBASE.EXE と STOPBASE.EXE の両プログラムで使われるサービスの結合名 (短縮されたサービスの名前) は、次のとおりです。

サービスの結合名	サービス名
CFMBase	クリティカル・ファイル・モニター
ProcMgr	プロセス・マネージャー
ECCMemory	ECC メモリー・セットアップ
Gatherer3.0	システム情報ツール (バージョン 3.0 以降)
Gatherer	システム情報ツール (ほかのバージョンすべて)
PFAServiceBase	事前障害分析
ScreenID	スクリーン・ビュー
DMIBrowserBase	DMI ブラウザー
RAID_BASE	RAID マネージャー
RCSHD	リモート・セッション
SoftInvB	ソフトウェア・インベントリー
FileBase	ファイル転送
PartionBase	システム区画アクセス
SCH_BASE_NODE	イベント・スケジューラー
ProfileBase	システム・プロファイル
CAPMGT	キャパシティー・マネージャー

RWCService	リモート・ワークステーション制御
DiagMgr	システム診断マネージャー
SCFMgr	サービス構成マネージャー
ServiceProcessorBase	システム管理
UpdateConnector	Update Connector マネージャー (インターフェイス)
UpdateConnectorClient	Update Connector マネージャー (インターフェイスまたはクライアント)

すべての Netfinity アラートには、アラートが生成された時刻と日付が入っています。その他の情報は、アラートを生成したサービスと、アラートを生成する原因となった状況によって異なります。

アラートの中には、ユーザーに割り当てられる値を持つものもあります。例外は幾つかありますが、通常、重大度値で適用できます。この場合、アラート情報は変数として表され、アラート・データの下に注には、必要な説明が付けられます。

一部のアラートでは、マクロ・パラメーターの文字列が使えます。これらの文字列(%P1 ~ %P9)は、他のプログラムに渡して、そこで使用することができます。

各アラートとそのアラート固有の情報は、アラートを生成するサービスの見出しの下に示してあります。

電源オン・エラー検出アラート

説明	リモート・システムで電源オン・エラーが検出されると、電源オン・エラー検出サービスによってアラートが生成されます。電源オン・エラー検出サービスは、「エラー時のアラート」オプションが選択されている場合だけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	Netfinity 電源オン・エラー検出アラート
アラート・タイプ	障害
重大度	4
アプリケーション ID	POED
アプリケーション・アラート・タイプ	0201

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使えません。

事前障害分析 (PFA) アラート

説明	PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブからドライブの障害が 24 時間以内に起こるという通知を受け取ると、事前障害分析サービスによって、アラートが生成されます。事前障害分析サービスは、「アラートの生成」オプションが使用可能な場合だけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	事前障害分析によって、PUN w 、LUN x ハード・ディスクで緊急障害が検出されました。物理ドライブ y のバックアップをとり、サービス提供者に交換を依頼してください。
アラート・タイプ	ディスク障害
重大度	z
アプリケーション ID	PFA
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使いません。

注:

1. アラート・テキスト変数中の w 、 x 、 y は、それぞれ、事前障害分析サービスによって判別され、障害のある PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブに割り当てられている PUN、LUN、およびドライブ名です。
2. このアラートには、テキストを追加することができます。詳細については、76 ページの『「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ』を参照してください。
3. 重大度 z を指定することができます。詳細については、76 ページの『「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ』を参照してください。

クリティカル・ファイル・モニター

クリティカル・ファイル・モニターによって生成されるアラートは、次のとおりです。

ファイル変更アラート

説明	監視対象のファイルのサイズ、日付または時刻が変更されると、クリティカル・ファイル・モニターによって生成されます。
アラート・テキスト	次のファイルが変更されました：' <i>filename</i> '
アラート・タイプ	アプリケーションの警告
重大度	<i>x</i>
アプリケーション ID	MonCritF
アプリケーション・アラート・タイプ	0

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使えません。

注:

1. アラート・テキスト変数中の *filename* は、変更があったファイルの名前です。
2. 重大度 *x* を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 3 です。

ファイル削除アラート

説明	監視対象のファイルが削除されると、クリティカル・ファイル・モニターによって生成されます。
アラート・テキスト	次のファイルが削除されました：' <i>filename</i> '
アラート・タイプ	警告
重大度	<i>x</i>
アプリケーション ID	MonCritF
アプリケーション・アラート・タイプ	1

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使いません。

注:

1. アラート・テキスト中の *filename* は、削除されたファイルの名前です。
2. 重大度 *x* を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 3 です。

ファイル作成アラート

説明	監視対象のファイルが作成されると、クリティカル・ファイル・モニターによって生成されます。
アラート・テキスト	次のファイルが作成されました：' <i>filename</i> '
アラート・タイプ	警告
重大度	<i>x</i>
アプリケーション ID	MonCritF
アプリケーション・アラート・タイプ	2

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使えません。

注:

1. アラート・テキスト変数中の *filename* は、作成されたファイルの名前です。
2. 重大度 *x* を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 3 です。

プロセス・マネージャー

プロセス・マネージャーによって生成されるアラートは、次のとおりです。

プロセス終了アラート

説明	監視対象のプロセスが停止すると、プロセス・マネージャーによって生成されます。
アラート・テキスト	プロセス '%P1' が停止しました。
アラート・タイプ	アプリケーション情報
重大度	x
アプリケーション ID	ProcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0901

注:

- このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
%P1 停止したプロセスの名前です。
- 重大度 *x* を設定できます。

プロセス開始アラート

説明	監視対象のプロセスが開始されると、プロセス・マネージャーによって生成されます。
アラート・テキスト	プロセス '%P1' が開始されました。
アラート・タイプ	アプリケーション情報
重大度	x
アプリケーション ID	ProcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0900

注:

1. このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
%P1 開始されたプロセスの名前です。
2. 重大度 x を設定できます。

プロセス開始の失敗アラート

説明	監視対象のプロセスが、システム始動の指定時間内での開始に失敗したとき、プロセス・マネージャーによって生成されます。
アラート・テキスト	プロセス '%P1' の開始に失敗しました。
アラート・タイプ	アプリケーション情報
重大度	x
アプリケーション ID	ProcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0902

注:

- このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
%P1 開始できなかったプロセスの名前です。
- 重大度 x を設定できます。

リモート・システム・マネージャー

リモート・システム・マネージャーによって生成されるアラートは、次のとおりです。

システム・オンライン・アラート

説明	システムがオンラインになっていて、アクセス可能なリモート・システムから、リモート・システム・マネージャーが通知を受け取るとアラートが生成されます。リモート・システム・マネージャー・サービスは、「システム・オンライン通知」オプションが、システム・グループ内のシステムに対して使用可能になっている場合だけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	システム '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') はアクティブで、オンラインになっています。
アラート・タイプ	システム情報
重大度	x
アプリケーション ID	NetMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	000A

注:

- このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
 - %P1** アクティブ・システムのシステム名。オンラインになったシステムを表示するときに設定します。
 - %P2** アクティブ・システムのネットワーク・アドレス。オンラインになったシステムを表示するときに設定します。
 - %P3** アクティブ・システムのネットワーク・タイプ。
- 重大度 x を設定できます。

システム・オフライン・アラート

説明	リモート・システム・マネージャーがリモート・システムに到達できないときアラートが生成されます。リモート・システム・マネージャー・サービスは、サービスの「システム・オフライン通知」オプションが、システム・グループ内のシステムに対して使用可能になっている場合にだけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	システム '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3) がオフラインまたはアクセス不能です。
アラート・タイプ	システム情報
重大度	x
アプリケーション ID	NetMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	000B

注:

- このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
 - %P1** 非アクティブ・システムのシステム名。オフラインになったシステムを表示するときに設定します。
 - %P2** 非アクティブ・システムのネットワーク・アドレス。オフラインになったシステムを表示するときに設定します。
 - %P3** 非アクティブ・システムのネットワーク・タイプ。
- 重大度 x を設定できます。

安全保護マネージャー

安全保護マネージャーによって生成されるアラートは次のとおりです。

アクセス付与アラート

説明	アクセスのためにユーザー ID とパスワードの組み合わせを使ったりモート・ユーザーに対して、1 つまたは複数のサービスへのアクセスが付与されると、安全保護マネージャー・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') がシステム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	7
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	14

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザーの ID
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ

パブリック・アクセス付与アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、1 つまたは複数のサービスへのパブリック・アクセスが付与されると、安全保護マネージャー・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザーID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') がパブリック・システム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	6
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	15

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザーの ID
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ

システム・アクセス拒否アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、システムへのアクセスが拒否されたときに、安全保護マネージャー・サービスが生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') によるログオンが拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護警告
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	16

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザーの ID
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ

システム再始動開始アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー・プログラムが、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」オプションを使ってシステムを再始動しようとしたとき、安全保護マネージャー・サービスが生成しません。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') によってシステム再始動が開始されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	41

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム再始動を要求したユーザーの ID
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ

システム再始動要求リジェクト・アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー・プログラムが、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」オプションを使ってシステムを再始動しようとしたが、必要な安全保護アクセスの資格を持っていなかったときに、安全保護マネージャー・サービスが生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') によるシステム再始動要求は拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護エラー
重大度	3
アプリケーション ID	SecMgr

アプリケーション・アラート・タイプ

40

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム再始動を要求したユーザーの ID
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ

Netfinity サービス・マネージャー

サービス・マネージャーによって生成されるアラートは、次のとおりです。

サービス開始要求アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー・プログラムが、ご使用の Netfinity サービス・プログラムのうちのどれか 1 つを使おうとしたとき、Netfinity サービス・マネージャーによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') による '%P4' サービスの開始が要求されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	7
アプリケーション ID	SvcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0900

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** サービス開始を要求したユーザー ID
- %P2** サービス開始を要求したシステムのネットワーク・アドレス
- %P3** サービス開始を要求したシステムのネットワーク・タイプ
- %P4** 開始を要求されたサービスの名前

サービス開始リジェクト・アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー・プログラム、Netfinity サービス・プログラムのどれか 1 つを開始する要求を拒否されたとき、Netfinity サービス・マネージャーによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID '%P1' (アドレス '%P2': ネットワーク '%P3') による '%P4' サービスの開始要求が拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護警告
重大度	5
アプリケーション ID	SvcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0901

注: このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

%P1	サービス開始を要求したユーザー ID
%P2	サービス開始を要求したシステムのネットワーク・アドレス
%P3	サービス開始を要求したシステムのネットワーク・タイプ
%P4	開始を要求されたサービスの名前

システム・モニター

システム・モニターによって生成されるアラートは、次のとおりです。

しきい値上限エラー・アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された持続期間よりも長い間、エラー上限値を超えていると、システム・モニターによって生成されます。
アラート・テキスト	エラー・アラート %P1 : モニター ' %P2 ' が %P3 以上になっています。 (%P4 の間)
アラート・タイプ	エラー
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

注:

1. このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

%P1	しきい値の名前
%P2	モニターの名前
%P3	しきい値
%P4	しきい値を下回る値の持続期間

2. 重大度 x を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 2 です。

しきい値上限警告アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された持続期間よりも長い間、警告上限値を超えていると、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	警告アラート %P1 : モニター ' %P2 ' が %P3 以上になっています(%P4 の間)。
アラート・タイプ	警告
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

注:

1. このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

%P1	しきい値の名前
%P2	モニターの名前
%P3	しきい値
%P4	しきい値を下回る値の持続期間

2. 重大度 x を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 4 です。

しきい値下限警告アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された持続期間よりも長い間、警告下限値を下回っていると、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	警告アラート %P1 : モニター ' %P2 ' が %P3 以下になっています (%P4 の間)。
アラート・タイプ	警告
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

注:

- このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
 - %P1** しきい値の名前
 - %P2** モニターの名前
 - %P3** しきい値
 - %P4** しきい値を下回る値の持続期間
- 重大度 *x* を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 4 です。

しきい値下限エラー・アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された持続期間よりも長い間、エラー下限値を下回っていると、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	エラー・アラート %P1 : モニター ' %P2 ' が %P3 以上になっています(%P4 の間)。
アラート・タイプ	エラー
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

注:

1. このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

%P1	しきい値の名前
%P2	モニターの名前
%P3	しきい値
%P4	しきい値を下回る値の持続期間

2. 重大度 x を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 2 です。

しきい値の標準への復帰アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、しきい値を超えていた状態から、“正常な”状態または範囲に戻ったとき、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	情報アラート %P1: モニター '%P2' は通常に戻りました。
アラート・タイプ	エラー
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	10

注:

- このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
 - %P1** しきい値の名前
 - %P2** モニターの名前
- 重大度 x を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 6 です。

物理 RAID ドライブ・オンライン・アラート

説明	物理 RAID ドライブの状態がオンラインに変わったとき、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	'RAID 装置オンライン：属性 '物理ディスク x 状況' (y の) は、'オンライン' に設定されています。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

注:

1. アラート・テキスト変数の中の x は物理ドライブの位置 (物理ベイ番号)、y は状態の変化が報告される RAID サブシステムの名前です。
2. このアラートが生成されるのは、183ページの付録C、『サポートされる RAID アダプター』にリストされた RAID アダプターを備えたシステムだけです。

物理 RAID ドライブ・スタンバイ・アラート

説明	物理 RAID ドライブの状態が待機に変わったとき、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	'RAID 装置スタンバイ': 属性 '物理ディスク x 状況' (y の) は、'スタンバイ' に設定されています。
アラート・タイプ	通知
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

注:

1. アラート・テキスト変数の中の x は物理ドライブの位置 (物理ベイ番号)、y は状態の変化が報告される RAID サブシステムの名前です。
2. このアラートが生成されるのは、183ページの付録C、『サポートされる RAID アダプター』にリストされた RAID アダプターを備えたシステムだけです。

物理 RAID ドライブ停止アラート

説明	物理 RAID ドライブの状態が停止 (操作不能) に変わったとき、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	'RAID デバイス不良': 属性 '物理ディスク x 状況' (y の) は、'不良' に設定されています。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

注:

1. アラート・テキスト変数の中の x は物理ドライブの位置 (物理ベイ番号)、 y は状態の変化が報告される RAID サブシステムの名前です。
2. このアラートが生成されるのは、183ページの付録C、『サポートされる RAID アダプター』にリストされた RAID アダプターを備えたシステムだけです。

論理 RAID デバイス・オンライン・アラート

説明	論理 RAID 装置の状態がオンラインに変わったとき、システム・モニター・サービスによって生成されません。
アラート・テキスト	'RAID システム装置オンライン': 属性 'システム・ドライブ x 状況' (y の) は、'オンライン' に設定されています。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

注:

1. アラート・テキストの中の x はシステム・ドライブの位置 (システム・ドライブ番号)、y は状態の変化が報告される RAID サブシステムの名前です。
2. このアラートが生成されるのは、183ページの付録C、『サポートされる RAID アダプター』にリストされた RAID アダプターを備えたシステムだけです。

論理 RAID デバイス重大アラート

説明	論理 RAID デバイスの状態がクリティカル (重大) に変わったとき、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	'RAID システム・ドライブ限界': 属性 'システム・ドライブ x 状況' (y の) は、'限界' に設定されています。
アラート・タイプ	警告
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

注:

1. アラート・テキストの中の x はシステム・ドライブの位置 (システム・ドライブ番号)、y は状態の変化が報告される RAID サブシステムの名前です。
2. このアラートが生成されるのは、183ページの付録C、『サポートされる RAID アダプター』にリストされた RAID アダプターを備えたシステムだけです。

論理 RAID デバイス・オフライン・アラート

説明	論理 RAID デバイスの状態がオフラインに変わったとき、システム・モニター・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	'RAID システム・ドライブ・オフライン': 属性 'システム・ドライブ x 状況' (y の) は、'オフライン' に設定されています。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

注:

1. アラート・テキストの中の x はシステム・ドライブの位置 (システム・ドライブ番号)、y は状態の変化が報告される RAID サブシステムの名前です。
2. このアラートが生成されるのは、183ページの付録C、『サポートされる RAID アダプター』にリストされた RAID アダプターを備えたシステムだけです。

本書において、日本では発表されていない IBM 製品 (機械およびプログラム)、プログラミングまたはサービスについて言及または説明する場合があります。しかし、このことは、弊社がこのような IBM 製品、プログラミングまたはサービスを、日本で発表する意図があることを必ずしも示すものではありません。本書で、IBM ライセンス・プログラムまたは他の IBM 製品に言及している部分があっても、このことは当該プログラムまたは製品のみが使用可能であることを意味するものではありません。これらのプログラムまたは製品に代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等な他社のプログラム、製品またはサービスを使用することができません。ただし、IBM によって明示的に指定されたものを除き、これらのプログラムまたは製品に関連する稼働の評価および検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBM および他社は、本書で説明する主題に関する特許権 (特許出願を含む)、商標権、または著作権を所有している場合があります。本書は、これらの特許権、商標権、および著作権について、本書で明示されている場合を除き、実施権、使用権等を許諾することを意味するものではありません。実施権、使用権等の許諾については、下記の宛先に、書面にてご照会ください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3 丁目 2-31
AP事業所
IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

商標

本書において使用されている以下の用語は、米国およびその他の国における、IBM社の商標です。

IBM	Netfinity
Micro Channel	NetView
OS/2	Predictive Failure Analysis
PS/2	SystemView

本書において使用されている次の用語は、他社の商標です。

cc:Mail	cc:Mail, Inc. division of Lotus Development Corporation
DMI	Desktop Management Task Force
IPX	Novell, Incorporated
Lotus Notes	Lotus Development Corporation
NetWare	Novell, Incorporated
Novell	Novell, Incorporated
Sportster	U. S. Robotics

Microsoft、Windows、および Windows NT は、Microsoft Corporation の登録商標です。

Pentium は、Intel Corporation の登録商標です。

Tivoli は、Tivoli Systems の商標です。

これら以外の会社、製品、およびサービスの名前にも、他社の商標またはサービス・マークがあります。

日本語、英字、数字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われていません。

〔ア行〕

- アクセス、制限 95
- 値、アラート・タイプ 17
- アプリケーション・キーワード 137
- アラート
 - 生成 189
 - GENALERT.EXE 189
- アラート条件 40, 51
- アラート情報 16
- アラート送信元 ID 17
- アラート・アクション 25
- アラート・タイプ値 17
- アラート・プロファイル
 - アクションへの割り当て 48
 - アラート条件の設定 40
 - 削除 43
 - 作成 39
 - 説明 37
 - 編集 43
- アラート・マネージャー
 - アクション 24
 - アクション定義の設定 53
 - アクションへのプロファイルの割り当て 48
 - アラート条件 40
 - アラート条件の指定 52
 - アラート・アクション 25
 - アラート・プロファイル 37
 - 安全保護アラート 98
- アラート・マネージャー (続き)
 - 管理情報ベース (MIB) 28
 - 機能 23
 - コマンドライン操作 189
 - 説明 13
 - 定義済みアラート・プロファイル 44
 - プロファイル 23
 - ページャー 30
 - ページャーのダイヤルアウト 30
 - GENALERT.EXE 189
 - MIB2.TBL 28
 - NETFIN.MIB 28
- アラート・ログ
 - アラート情報 16
 - アラートの印刷 23
 - アラートの削除 23
 - アラートのファイル 23
 - アラート・ログの表示 19
 - 最新表示 24
- 安全保護アラート 98
- 安全保護マネージャー
 - 安全保護アラート 98
 - 説明 93
 - 着信ユーザー ID とパスワードの設定 96
 - パブリック・アクセスの制限 95
 - ユーザー ID とパスワードの削除 98
 - <パブリック> ユーザー ID とパスワード 94
- インストール構成 177
 - アクティブ・クライアント機能 179
 - スタンドアロン機能 177
 - パッシブ・クライアント機能 178

〔カ行〕

- 管理情報ベース (MIB) 28
- 基本プログラムをリモートから始動させる 194
- クリティカル・ファイル・モニター
 - システム・ファイルの監視 56
 - 説明 55
 - 存在しないファイルに対する監視 60
 - ファイル作成の監視 60
 - 別のファイルの監視 58
 - NetWare のシステム・ファイル 57
 - OS/2 のシステム・ファイル 56
 - Windows のシステム・ファイル 56
 - Windows NT のシステム・ファイル 57
 - Windows 95 のシステム・ファイル 56
- コマンドライン操作 189
 - ECCMEM.EXE 193
 - GENALERT.EXE 189
 - SINFG30.EXE 192
 - STOPBASE.EXE 194
 - STRTBASE.EXE 194

〔サ行〕

- サービスの基本プログラムをリモートから停止させる 194
- サービスの結合名 197
- サービス・マネージャー
 - 始動 3
- 辞書ファイル 113
 - 新規の作成 114
 - 製品定義の削除 116
 - 製品定義の追加 117
 - 製品定義の編集 130
 - 説明 113
 - ファイル・リスト製品定義 118
 - 編集 115

辞書ファイル (続き)

- ロード 113
- SYSLEVEL 製品定義 125
- システム区画 165
- システム区画アクセス
 - アクション 166
 - 区画からコピー 166
 - 区画の削除 171
 - 区画のバックアップ 171
 - 区画の復元 172
 - 区画へコピー 168
 - 新規ディレクトリーの作成 172
 - 説明 165
 - ディレクトリーの削除 169
 - ディレクトリー名の変更 169
 - ファイルの削除 170
 - ファイル名の変更 170
 - ESDI システム 165
- システム情報ツール
 - 機密システム・データの保護 143
 - コマンドライン操作 192
 - システム・データの保管 142
 - 収集される情報 139
 - 使用 142
 - 説明 139
 - テキスト報告書の印刷 142
 - 履歴ファイルの生成 142
 - SIKEYWD.INI 143
 - SINFG30.EXE 192
- システム・プロファイル
 - サービス・ウィンドウの内容 174
 - 最新表示 175
 - セクション 174
 - 説明 173
 - データ入力 174
 - ファイルに保管 175

システム・モニター

- 値、説明 153
- アラートの生成 152
- 移動 150
- 「ウィンドウ」プルダウン・メニュー 147
- 折れ線グラフ 156
- 折れ線グラフの設定値の構成 158
- 折れ線グラフ・モニター 157
- 隠す 150
- クローズ 147
- コンテキスト・メニュー 149
- サイズ 150
- しきい値 152
- しきい値の設定 152
- 「システム・モニター・サービス」ウィンドウ 147
- 終了 147
- 使用 147
- スケール 158
- 設定値 156
- 説明 145
- 属性モニター 160
- 属性モニターのしきい値 160, 162
- タイトル・バーの使用可能/使用不可 156
- 通知チェック・ボックス 155
- データ処理技法 146
- データの記録 150
- テキスト・モニター 157
- 塗りつぶし 158
- ノートブック 151
- 表示 149, 157
- 「表示可能モニターの選択」ウィンドウ 147
- フォント設定の構成 159
- ポップアップ・メニュー 149
- メイン・メニュー 147

システム・モニター (続き)

- モニターの構成 156
- モニター表示の変更 157
- モニター・タイプ、選択 149
- リアルタイム設定の構成 159
- リアルタイム・モニター 157
- RAID アラート 152
- RAID モニター 160
- 事前障害分析
 - アダプター情報 74
 - アラートの生成 78
 - オブジェクトの説明 73
 - オプション 76, 78
 - サイズ情報 75
 - 「事前障害分析」ウィンドウ 73
 - 状況 77
 - 説明 73
 - ドライブ情報 74, 77
 - ドライブの PFA オプション 76
 - ドライブ・サイズ 75
 - 物理ドライブ情報 75
 - プロダクト ID 77
 - プロダクト・リビジョン 77
 - ベンダー ID 77
 - メッセージのシミュレート 78
 - リセット 78
 - 論理ドライブ情報 75
 - PUN と LUN 75
- 修正 71
- 重大度、説明 17
- 初期設定ストリングのガイドライン 109
- シリアル管理 108
- シリアル接続制御
 - 初期設定ストリングのガイドライン 109
 - 説明 105
 - モデムの構成 106

シリアル接続制御 (続き)
リモート・アクセスを使用可能にする 108
シングル・ビット・エラー 71
スクリーン・ビュー
制限、リモート・アクセスの 95
生成、アラートの 189
製品定義 117
追加 117
ファイル・リスト定義 118
編集 130
SYSLEVEL 定義 125
ソフトウェア・インベントリ
アプリケーション・キーワード、使い方 137
検索の実行 130
辞書ファイル、新規の 114
辞書ファイル、説明 113
辞書ファイル、編集 115
辞書ファイル、ロード 113
製品タイプによる検索 133
製品定義、削除 116
製品定義の追加 117
製品定義の編集 130
説明 111
全辞書の検索 131
選択された製品の検索 131
ソフトウェア辞書のインポート 136
突き合わせ属性 113
データのエクスポート 134
ドライブによる検索 131
ファイルへの報告書の印刷 134
ファイル・リスト製品定義 118
プリンターで報告書を印刷 134
報告書の生成 134
NetView DM インベントリーの更新 135
SYSLEVEL 製品定義 125

〔 夕行 〕

着信ユーザー ID とパスワード
削除 98
設定 96
パブリック・アクセスの制限 95
<パブリック> 設定 94
着信ユーザー ID とパスワードの設定 96
データ処理 146
定義済みアラート・プロファイル 44
ディレクトリー
デスクトップ・マネージメント・インターフェース
(DMI) 61

〔 八行 〕

パスワード 95
ページャーのダイヤルアウト 30

〔 マ行 〕

マスク不能割り込み 71
モデムの構成 106

〔 ラ行 〕

リモート・システム・マネージャー
リモート・セッション
履歴ファイル 142

D

DMI 61
定義 61
動作 62
DMI ブラウザー
エラーの通知 69
エラー・ログ、表示 69
グループ情報の表示 68

DMI ブラウザー (続き)
構成要素情報の表示 68
属性情報の表示 69
属性情報の変更 69
問題の通知 69
DMIの定義 61
DMIの動作 62
DMI ブラウザーの使用 67

E

ECC メモリー・セットアップ
アクション 71
構成 71
コマンドライン操作 193
終了 72
説明 71
マスク不能割り込み 71
ECCMEM.EXE 193
NMI の起動 72
ECCMEM.EXE
パラメーター 193

G

GENALERT.EXE
コマンドライン形式 189
説明 189
パラメーター 189
GENALERT アラートの、ホスト・システムへの
転送 191

M

MIB2.TBL 28

N

Netfinity
コマンドライン操作 189
サービス・マネージャー 4
始動 3
説明 1
OS/2 システムでの Netfinity 始動の遅延 11
Netfinityの始動 3
NETFIN.MIB 28
NMVT.INI 191

O

OS/2 システムでの Netfinity 始動の遅延 11

R

RAID アラート 185
RAID マネージャー
アダプター構成のバックアップ 91
アダプター固有の情報 89
一般アダプター情報 88
ウィンドウのオプション 80
仮想ドライブ情報 90
仮想ドライブの管理 92
筐体情報 86
説明 79
装置管理 91
表示スケールの変更 81
物理装置情報 87
RAID 情報の表示 86

S

SIKEYWD.INI 143

SINFG30.EXE

 パラメーター 192

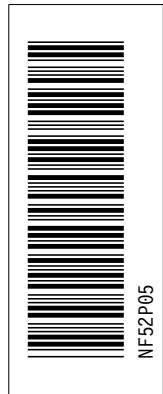
STOPBASE.EXE 194

STRTBASE.EXE 194

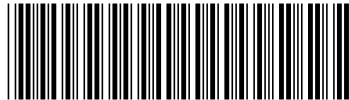
IBM

部品番号: NF52P05

Printed in Japan



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12



SA88-6558-00